

かしわ ぎ じょう あと
柏 木 城 跡

《北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会の記録》

2014年3月31日

北塩原村教育委員会

序 文

北塩原村には、国指定天然記念物の雄国沼湿原植物群落があり、夏のころには青々とした空を映した雄国沼のほとりに、ニッコウキスゲが咲き誇ります。また、裏磐梯とよばれる磐梯山北側の桧原湖・五色沼の周辺は、四季折々の山々と湖沼が織りなす自然美あふれる景観で磐梯朝日国立公園に指定されており、磐梯山は日本ジオパークに認定されるなど、国民の財産ともいえる豊かな自然環境にかこまれています。

そうした自然環境とともにわれわれの歴史は刻まれてきました。特に戦国時代は、会津と米沢を結ぶ古道をめぐって会津蘆名氏と米沢伊達氏のあいだで東北の覇権をかけた争いの舞台となり、多くの城館や砦がのこされています。また江戸時代は、会津藩により米沢街道として整備され、大塩や桧原では宿場が栄えました。山あいをぬって延びる道は、自然のなかで暮らしをつなぐ我々の先人の方々の歩みをささえ、その足跡を人知れずのこしてきました。

このたび戦国時代の蘆名氏の城郭である柏木城跡の調査報告書を刊行しますことは、村の歴史にさらなる光を当て、ふるさとの先人を偲ぶ事業として大変喜ばしく思います。柏木城跡は大塩地区の旧米沢街道・古道を望む場所に築かれ、会津進攻をもくろむ伊達政宗に対抗した蘆名氏方の境目の城であり、会津防衛の拠点として大きな役割を果たしていたことがわかるとともに、戦国時代の石積みの城として福島県を代表する山城としての意義が明らかにされました。

旧米沢街道に残された古道と城館等の歴史的な遺構群は、北塩原村が加盟する「日本で最も美しい村」連合でも高く評価されています。この報告書を今後の史跡活用につなげ、豊かな自然環境のなかで戦国時代の歴史ロマンを体感できる旧街道と戦国城館跡群に、より多くの方々に訪れていただけるきっかけとなれば幸いです。

平成26年3月

北塩原村長 小 椋 敏 一

刊行にあたって

北塩原村は、裏磐梯に代表される山紫水明の地としてつとに有名ですが、戦国時代における蘆名氏と伊達氏の攻防の最前線の地であり、また、歴史上の人物、上杉景勝や直江兼続、伊能忠敬、吉田松陰、新島八重等がそれぞれの思いを抱えて往来した米沢街道のある歴史の豊かな村でもあります。特に、中世から江戸時代にいたる歴史の中で築かれた城館跡や街道、遺跡などは良好に残されています。

このような村にある歴史遺産の価値を検証し、将来に向けて保存・活用をはかるべく、平成20年度に「北塩原村城館跡保存整備計画策定委員会」を立ち上げ、さらに平成22年度には、城館等の保存・整備・活用のより踏み込んだ議論を進めるために同委員会を発展的に解消し、名称を「北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会」として現在に至っております。

このたび刊行の運びになりました北塩原村文化財調査報告書第3集柏木城跡は、北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会がこれまで検討を重ねてきた成果であり、今後の調査研究を進めるうえでの土台となるべきものであります。

柏木城は、戦国時代、蘆名氏と伊達氏の攻防の最前線となる「境目の城」という明確な性格を持ち、また、築城から廃城までの期間が短いことから時代的指標となりうる城跡で学術的価値も高く、保存状態の良さも合わせて北塩原村民の「誇り」となるべき貴重な遺跡であると考えております。

今回の発刊を通し、村民多くの方々が改めて村のすばらしさを知る機会となり、また、村内小中学校児童生徒の郷土理解学習が、さらに深まりのあるものとなることを期待してやみません。

最後になりましたが、このたびの北塩原村文化財調査報告書第3集柏木城跡を発行するに当たり、ご指導をいただきました福島県教育庁文化財課、多大のご支援・ご協力を賜りました北塩原村城館跡保存・整備・活用検討委員会の委員の皆様、そして地元大塩地区及び大久保地区をはじめ関係の方々に心より感謝とお礼を申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成26年3月

北塩原村教育委員会

教 育 長 佐 藤 信 寛

例 言

1. 本報告書は、福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字柏木城外に所在する柏木城跡の調査報告書である。
2. 柏木城跡は 北塩原村指定史跡（指定番号No.12）。福島県遺跡地図掲載番号40210021である。
3. 本報告書は、北塩原村が設置した日本中世史、考古学、城郭研究の有識者による「北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会（委員長 鈴木 啓）」での柏木城跡に関する学術的な検討に基づく。
4. 同委員会では柏木城跡中心部に関して現況を地表面観察して検討を行い、さらに文献史料からの成果等を加えて本報告書を作成した。柏木城跡は中心部以外にも広く遺構群が展開することが指摘されているが、それらについては今後検討を続けた上で報告書を制作する予定である。
5. 本報告書刊行にあたっては、北塩原村教育委員会教育課公民館班が事務局となり、県教育庁文化財課の指導を受け、同委員会の調査・研究の成果と意見を得ながら作成した。
6. 検討委員会の委員である石田明夫、高橋 明、高橋 充、鈴木 啓各先生からは、同委員会での関連調査報告の内容について、玉稿をいただきました。記して感謝申し上げます。
7. 本書の執筆は、第2章第1節・第4章：布尾幸恵、第2章第2節：木村郁夫、第2章第3節：五十嵐怜、第3章：長島雄一・布尾和史、関連調査の報告1：石田明夫、関連調査の報告2：高橋明、関連調査の報告3：高橋 充、あとがき：鈴木 啓、その他を布尾和史が執筆した。
8. 蘆名・葦名、松原・檜原など複数ある文字遣いについては、引用文をのぞいて、『北塩原村史』に準じさせていただいた。
9. 第1章から第6章の図と写真については、ことわりのないものについては事務局の撮影、作成である。
10. 本報告書の作成にあたり、柏木城跡の図は、石田明夫委員が作成したものを下図として使用させていただいた。石田氏は他の村内城館跡等についても詳細な図面を作成されており、村史等でも活用させていただいているところである。氏のご助力に敬意を表しつつ改めて感謝の意を表します。
11. 本報告書の作成にあたり、北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会の鈴木 啓、石田明夫、高橋 明、佐藤一男、長島雄一、高橋 充の各委員には、報告書原稿の執筆や草稿の検討なども含めて多岐にわたる指導・助言をいただきました。また、下記の方々、機関より指導・助言と資料の提供をいただきました。記して感謝申し上げます。
梶原圭介、梶原文子、金子明洋、北垣聰一郎、佐藤真由美、田村昌宏、丹野隆明、布尾幸恵、根本豊徳、平田禎文、山崎四朗、吉田博行、渡部新一、福島県教育庁文化財課、福島県立博物館（50音順）

目 次

序 文	北 塩 原 村 長	小 椋 敏 一	
刊行にあたって	北塩原村教育委員会教育長	佐藤 信寛	
第1章 調査の経過	布尾 和史	……………	1
第1節 調査に至る経緯			
第2節 調査の経過			
第2章 柏木城跡の位置と環境			
第1節 地理的環境	布尾 幸恵	……………	5
第2節 歴史的環境			
第3節 柏木城跡周辺の動物	木村 郁夫	……………	8
第4節 柏木城跡と周辺の地形について	五十嵐 怜	……………	9
第3章 柏木城跡中心部分の現状	長島雄一・布尾和史	……………	11
第1節 概 要			
第2節 主郭とその周辺の遺構			
第3節 馬出とその周辺の遺構			
第4章 文献にみる柏木城跡	布尾 幸恵	……………	28
第1節 主要文献			
第2節 年 表			
第5章 検 討 -これまでの研究と今後の課題-	布尾 和史	……………	34
第1節 呼称について			
第2節 柏木城の築城から廃城	1 築城 2 築城者 3 城番 4 廃城		
第3節 絵図、縄張り図について	1 絵図 2 縄張り図		
第4節 遺構について	1 石積み 2 虎口 3 馬出 4 弧状石積み		
第5節 柏木城跡中心部の構造について			
第6節 他地域との関連について			
第7節 柏木城跡の範囲			
第8節 性 格			
第6章 総 括	布尾 和史	……………	50
関連調査の報告1 柏木城跡について	石田 明夫	……………	53
関連調査の報告2 柏木城の文献による沿革	高橋 明	……………	60
関連調査の報告3 三瓶（三平）氏について	高橋 充	……………	65
あとがき 柏木城はいかなる城であったか	鈴木 啓	……………	71
報告書抄録			

第1章 調査の経過

第1節 調査にいたる経緯

1 調査に至る経緯

北塩原村には、中世から近世にいたる歴史のなかで築かれた城館跡や街道、鉾山遺跡などが良好な状態で残されている。ただ戦後省みられることは少なく、埋もれていた城館等遺跡の確認に取り組んだのは北塩原村郷土史研究会の方々であった。今に知られる文化財の多くは、昭和50年代以降、志ある人々の熱意により明らかにされてきた。昭和61年度は北塩原村教育委員会で文化財の村指定が初めて行なわれ、柏木城跡をはじめ村内の文化財保護の礎が築かれた。

平成19年には、村は会津古城研究会代表の石田明夫氏に依頼して、『会津路武士の世の裏磐梯 米沢街道－葦名と伊達の攻防譜』を刊行した。平成20年には『北塩原村史』を刊行し、城館跡を含めた遺跡に関して現況をまとめ、文献からも北塩原村の歴史が叙述されている。また、同年には大河ドラマ「天地人」ゆかりの旧米沢街道でウオーキングイベントをおこない1,700人を超える参加者があった。これにより従来からの村の観光の目玉である裏磐梯の自然と共に、綱取城跡、柏木城跡、桧原（小谷山）城跡、戸山城跡などの城館跡や、桧原金銀山跡、米沢（会津米沢）街道といった村の各地に点在する豊かな歴史遺産が再認識されるにいたった。

北塩原村では、文化財を保存し、地域住民によるふるさとの歴史学習や観光などの面で活用を模索すべく、城館や考古学、文献研究を中心とした有識者による委員会を立ち上げ意見を求めるものとした。

2 検討委員会設立

平成20年度には、第1回「北塩原村城館跡保存整備計画策定委員会」が開かれた。事務局を教育委員会におき、委員の構成や開催日等は後述のとおりである。第1回委員会では、当面の調査対象を「綱取城跡、柏木城跡、桧原（小谷山）城跡、戸山城跡」とし、戦国大名蘆名氏と伊達氏がその領域の境目でせめぎ合う歴史的背景を踏まえた保存、整備について検討を行い、必要な調査を行ったうえで県指定・国指定史跡を目指すことが提言された。

次の平成21年度の委員会では、柏木城跡の現地踏査を行った。範囲が広く、遺存状態がよいことが確認され、地形測量や見学時のルート作り、調査報告書の必要性が指摘された。また委員会開催に先立って事務局は、同年9月に地元の理解を得るべく大塩地区及び大久保地区の地権者に対して説明会を実施した。

そして、平成22年度の委員会では、これまでの北塩原村城館跡保存整備策定委員会での話し合いを踏まえ、新たに「北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会」を立ち上げ、城館等の保存・整備・活用についてより踏み込んだ議論をおこなっていくものとした。

第2節 調査の経過 ー北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会ー

1 調査の目的

北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会は、村内を通る米沢道（旧街道）沿いに点在する蘆名氏と伊達氏が築いた城館跡や諸鉾山に関連する遺跡、さらには北塩原村を舞台に繰り広げられた奥羽の覇権を賭けた戦いの歴史に係わる遺跡等を一体のものとして確実に保存し、整備・活用していくための方法等について、指導や助言を受けるために設置された組織である。

村は、測量や文献等のデータを収集し、散策ルートや説明看板の整備や説明会を行うことで城館跡や旧街道など歴史的価値の高い遺跡に触れる場所・機会として活用するとともに、史跡指定に向けた取り組みをおこなっていくことを基本方針とした。そして、引き続き地元住民に理解を求めていくこと、最初に柏木城跡から調査や整備、活用を進めることとされた。柏木城跡については、規模の把握や、大塩地区から主郭虎口への登城路、馬出などについて現地での十分な調査を行うこと等が委員会の目的である。

2 北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会

平成23年度の第1回検討委員会は、5月の雪解けを待って柏木城跡の現地踏査をおこなった。石垣（石積）の保存状態が良好であり、東北地方南部における石垣（石積）技術の発達過程を示す重要な遺跡であることが確認されるとともに、そうした石垣（石積）などの遺構を見やすくするために、上面に積もった土の除去や刈り払い、見学ルート策定の必要性が指摘された。

第2回検討委員会では、現地踏査の折、虎口付近の雑木伐採による視認性向上や、主郭からの若松・大塩方向の景観確保、発掘調査による遺構の把握、登城路確認の必要性などについて指摘された。各委員からは、「境目の城」か、あるいは境目と本城との中間である「番城」なのかという点や、巨大な城という表現、石垣という呼称について疑義・指摘がなされ、今後検討することとなった。また、鈴木啓委員長により、柏木城跡中心部の重要遺構を通る形で見学路案が示されるとともに、委員会での共通認識を深め、その内容を報告書としてまとめることが提案された。

平成24年度の第1回検討委員会では、報告書の内容が検討された。村に文化財担当の専門職員が配されていないため、異例なことではあるものの各委員の方々に報告書用原稿を執筆・編集していただくこととなった。その際、柏木城に関する委員会の確認事項として

- ・ 柏木城の性格については、「番城」「境目の城」という認識を持つ。
- ・ 柏木城の範囲については、a：従来の絵図などで知られる範囲と、b：aから東・西・北に大きく広がる石田明夫委員が作図した範囲がある。aの範囲について柏木城跡中心部とする点について異議はないこと。bの範囲すべてを現状で委員会の意見とすることには慎重を期し、今後さらに調査を行い、柏木城跡の広がりを確認するものとする。
- ・ したがって、「巨大な城」という表現については使用しないこととする。
- ・ 「石垣」については、裏込め石のある石垣が近世城郭では使用されるが、柏木城跡のものは裏込石が使用されないものと見られることから、これを「石積み」と呼ぶようにする。
- ・ 柏木城が描かれた絵図については、同じく城郭を描いた絵図や周辺地区を描いた絵図などとの比較や紙質の検討など、より詳細な調査をおこなうことで、絵図の年代を含めて判明すること

がある。

- ・ 保存・活用・整備にあたっては中心部分（上記a）から実施し、周辺は調査を行いながら検討する。
- ・ 主要な場所に標高を含めた説明版を配す。
- ・ 門や建物など建造物の復元については、いきなりおこなわず、将来発掘調査等を実施した上で検討する。

等が申し合わされた。

第2回検討委員会では、高橋明委員による「柏木城の沿革」に関する文献の研究成果を報告頂き、その内容は本報告書関連調査の報告2として掲載させていただいた。築城時期に関しては、従来の史書から天正12年とされることがほとんどであったが、天正12年から13年の伊達氏、蘆名氏の動静を文献資料から詳らかに論じ、天正13年夏築城の可能性について論及している。

築城年代に関しては、他に各委員からの意見として、塹堀の存在から永禄年間築城の可能性や、帯曲輪があることから同様に天正をややさかのぼる可能性もあること、廃城に関しては摺上の戦いで伊達政宗が蘆名氏を破ることで境目の城としての機能が失われる天正17年とするのがおおむね妥当との見解に至った。

また、佐藤一男委員からは松原鉾山に関する報告をいただいた。松原地区にある鉾山や文化財に関する報告であった。なお、柏木城跡の報告書については石田副委員長と長島委員が中心にまとめていくこととなった。

第3回検討委員会では、石田明夫委員による柏木城跡の縄張図にもとづき説明があった。内容については本報告書関連調査の報告1「柏木城について」に掲載させていただいた。

柏木城跡報告書については、対象を柏木城跡中心部分とし、再度現地確認を行い報告書記述内容の検討をすることを確認した。

平成25年度第1回検討委員会では、柏木城跡現地にて、各遺構の呼称や状況について確認した。また報告書については、石田副委員長に編集等を担当していただいていたが、本年より村教育課の担当が引き継ぐこととなった。

第2回検討委員会では、村事務局が柏木城跡報告書の素案を示し、その内容について検討が行われた。本報告書については現段階におけるまとめであり、内容は今後とも調査研究を進めつつ検討されていくべきものであることとした。佐藤一男委員の鉾山に関する報告については松原地区の文化財報告書作成の際に掲載を検討させていただくこととなった。

北塩原村文化財調査報告3 『柏木城跡』ー北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会の記録ーは平成26年3月31日に刊行となった。



図1 北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会のようす

3 北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会の構成

委員長	鈴木 啓	考古学・城館	福島県考古学会顧問、北日本近世城郭検討会会長
副委員長	石田明夫	考古学・城館	会津若松市東公民館主幹、会津古城研究会会長
委員	高橋 明	中世史	元郡山市文化財保護審議会会長
委員	佐藤一男	鉾山史	金属鉾山研究会員、産業考古学会員
委員	長島雄一	考古学	福島県教育庁文化財課 副課長兼専門文化財主査
委員	高橋 充	中近世史	福島県立博物館 専門学芸員
委員	五十嵐怜	郷土史	村文化財保護審議委員 (～平成24年度)

(役職名は平成26年3月現在)

4 委員会一覧

《北塩原村城館跡保存整備計画策定委員会》

平成20年度第1回	平成20年9月15日	旧大塩幼稚園
平成21年度第1回	平成21年12月7日	北塩原村公民館
平成22年度第1回	平成23年2月2日	北塩原村コミュニティーセンター[柏木城跡現地調査]

《北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会》

平成23年度第1回	平成23年5月31日	北塩原村公民館[柏木城跡現地調査]
平成23年度第2回	平成23年10月10日	旧大塩幼稚園[柏木城跡現地調査]
平成24年度第1回	平成24年7月25日	旧大塩幼稚園
平成24年度第2回	平成24年11月11日	北塩原村公民館
平成24年度第3回	平成25年3月9日	北塩原村公民館
平成25年度第1回	平成25年5月26日	北塩原村公民館[柏木城跡現地調査]
平成25年度第2回	平成26年2月24日	北塩原村公民館

第2章 柏木城跡の位置と環境

第1節 地理的環境

本遺跡が位置する北塩原村は福島県の北西部に位置し、東・南は猪苗代町、西は喜多方市、北は山形県米沢市に接する。村域は233.94km²で、その約80%を山林が占め、なかでも風光明媚な裏磐梯は観光地として著名である。裏磐梯の桧原湖や五色沼など湖沼を主とする景観は、明治21（1888）年の磐梯山の噴火によって吾妻川・大川入川・小野川などがせき止められ、大小さまざまな湖沼ができたことによる。

北塩原村の地質については、『北塩原村史 資料編』に詳しい。本遺跡が属する地域は猫魔山の噴火による安山岩溶岩を主とする地層である。柏木城跡にも、噴火による噴出物と思われる礫を多数確認している。

第2節 歴史的環境

北塩原村は旧石器時代から近代まで、数多くの遺跡が確認できる。桧原・裏磐梯地区は、前述の明治21年の噴火によってそのほとんどが湖底となった。このため、古代以前の人々の生活のあとが確認できるのは大塩川沿いの大塩地区や、会津盆地を望む北山地区が多い。

旧石器時代の可能性がある遺物が採取された小野川B遺跡は、現在小野川湖の湖底にあり、詳細は不明である。

村で多く確認されているのは縄文時代の遺跡である。縄文時代早期の一盃清水・二十平下・上二ノ沢遺跡をはじめとして、前期の天ヶ作・松音寺・二十平遺跡、中期・後期の松音寺・土合坂ノ上・与市ヶ窪遺跡、晩期の土合矢ノ根塚遺跡がある。遺跡の分布は大塩・北山地区など広範囲に及ぶ。とくに北山地区の松音寺遺跡は前期から後期まで続く遺跡で、調査例こそないものの表採された遺物量から中心的な遺跡と考えられている。

弥生・古墳時代の遺跡は現状では確認されていない。ついで人々の痕跡が確認できるのは古代である。入大光寺窯跡では平成2・6年に試掘調査が行われ、8世紀の須恵器窯が4基、確認された。この窯で焼成された須恵器等は耶麻郡内のみで出土例が確認されているため、製品の流通範囲は狭かったものと推察されている。

当村で再び遺跡数が増加するのは中世になってからである。遺跡の種類は現在、館跡・山城を中心としており集落跡は確認されていないが、館や山城に関連する集落も当然存在したであろう。北山地区には中世からのものと思われる小字名が散見される（「第三章第六節」『北塩原村史 通史編』）。

本書に収録されている柏木城跡を含む綱取城跡・戸山城跡・桧原（小谷山）城跡は、米沢街道沿いにおける伊達氏と蘆名氏の攻防に伴って築城されたとされる山城で、いわゆる「境目の城」としての機能が考えられている。このうち、本書で取り上げる柏木城跡は石積み遺構が特徴的な城跡である。本書に詳説されているように、その石積み造成の技術系譜や同時期と考えられている蘆名領・伊達領に位置する山城との比較は、今後の調査により明らかにされることであろう。

この時期は板碑を初めとした宗教的な石像物も多い。「下吉の板碑」は阿弥陀三尊の種子が刻まれ、応永3年（1396）の紀年銘がある。「漆の四方仏」と通称される漆の石造物群は、刻書の確認されて

いないものが1基あるが、阿弥陀三尊種子がすべて蓮台に乗るものが2基あり、うち1基は応永2年(1395)の銘がある。この2基は頂部が山形に成形され、応永2年銘のものは頂部との間に段を有するなど、関東系の様相も見られる。

このほかに特筆すべき遺跡として、桧原(小谷山)城跡と戸山城跡に挟まれた山に、「桧原金銀山跡」がある。この鉱山は近代まで操業されていた。

この鉱山については、近世後半の文献であるが、『新編会津風土記』・『家世実紀』などにも記載がある。今後、この鉱山本体だけではなく、桧原(小谷山)城跡・戸山城跡との関係、鉱山にかかわった人々の生活跡、鉱山臼など関連の道具を製作していた石切場・加工場の存在も予想されよう。

近世は桧原宿場跡や桧原口番所跡などが確認される。

明治21年の噴火によって桧原宿場は現在桧原湖底にある。桧原五輪塔群は中世にこのあたりを治めていた穴沢氏の供養塔と伝わるが、一部に後刻の文も確認されており、銘文の内容とともに五輪塔の型式編年からの確認も必要となろう。

近代には北山発電所という、会津で初の水力発電所が明治34(1901)年に北山地区に作られた。

現在の北塩原村が誕生したのは、昭和29(1954)年に北山村・大塩村・桧原村が合併したことによる。

遺跡名	所在地	時期	遺跡番号
柏木城跡	北塩原村大塩字柏木城	中世	21
桧原峠の境塚	北塩原村桧原字西吾妻国有林	近世	1
鷹の巣一里塚	北塩原村桧原字西吾妻国有林	近世	2
桧原口留番所跡	北塩原村桧原字西吾妻国有林	近世	3
桧原金山精錬所跡	北塩原村桧原字小屋沢	近世	6
戸山城跡	北塩原村桧原字西吾妻国有林	中世	4
桧原金銀山跡	北塩原村桧原字芋畑沢・無縁原・五十両原	中世～近代	5
小谷山城跡	北塩原村桧原字西吾妻国有林	中世	7
戸倉澤大正寺跡	北塩原村桧原字早稲澤	近世	8
桧原宿場跡	北塩原村桧原字桧原(桧原湖底)	中世～近代	9
桧原五輪塔群	北塩原村桧原字高平山	中世	11
桧原山神社の燈籠	北塩原村桧原字巢の山	近世	12
巖山城跡	北塩原村桧原字細野山国有林	中世	10
吾妻山白鳳寺跡	北塩原村桧原字秋元原(秋元湖底)	中世	13
小野川A遺跡	北塩原村桧原字小野川	縄文	44
小野川B遺跡	北塩原村桧原字小野川	旧石器	52
鹿垣柵跡	北塩原村大塩字萱峠	中世	14
小森山新田跡	北塩原村大塩字小森山	近世	19
桜峠遺跡	北塩原村大塩字桜峠	縄文	53
八丁壇の一里塚	北塩原村大塩字西小沢	近世	15
中島館跡	北塩原村大塩字中島道北	中世	18
西福寺跡	北塩原村大塩字湯ノ上	中世	17
大窪の塩井跡	北塩原村大塩字湯ノ上	古代	16
雨沼遺跡	北塩原村大塩字雨沼	縄文	43
六郎屋敷跡	北塩原村大塩字上六郎屋敷	中世	20
下高山遺跡	北塩原村大塩字下高山	古墳・近世	45
赤城館跡	北塩原村大塩字土合	中世	22
大窪の稗田	北塩原村大塩字稗田	縄文	24
道貞邸跡	北塩原村大塩字館上	中世	23
二十平下遺跡	北塩原村大塩字二十平	縄文	54
上二ノ沢遺跡	北塩原村大塩字上二ノ沢	縄文・弥生・古代	56
作道遺跡	北塩原村大塩字作道	縄文	
屋敷遺跡	北塩原村大塩字屋敷	縄文	
長峯A遺跡	北塩原村関屋字長峯下	縄文	55
長峯B遺跡	北塩原村関屋字長峯下	縄文	55
坪家館跡	北塩原村関屋字坪家館	中世	25
一盃清水遺跡	北塩原村関屋字一盃清水	縄文	58
休場遺跡	北塩原村関屋字休場	縄文	57
樟前山遺跡	北塩原村関屋字前山	縄文	27
樟の一里塚	北塩原村関屋字一里壇ノ上	近世	26
興市ヶ窪遺跡	北塩原村関屋字興市ヶ窪	縄文	28
土合矢ノ根遺跡	北塩原村関屋字土合	縄文	
綱取城跡	北塩原村北山字要害	中世	29
北山発電所	北塩原村北山字岩下	近代	30
矢ノ根塚遺跡	北塩原村北山字土合	縄文	31
坂ノ上遺跡	北塩原村関屋字坂ノ上	縄文	32
居館跡	北塩原村北山字上ノ台	中世	33
上ノ台館跡	北塩原村北山字上ノ台	中世	34
漆の石仏群	北塩原村北山字柿木田・原口・中在家	中世	35
下吉塚	北塩原村北山字下吉	中世	60
鶏林塚	北塩原村北山字鶏林	中世・近世	59
赤館跡	北塩原村北山字北畑	中世	36
松音寺遺跡	北塩原村北山字北畑	縄文	39
新井館跡	北塩原村北山字新井館	中世	40
窪の薬師跡	北塩原村北山字村北	近世	38
下吉の板碑	北塩原村下吉字前畑	中世	41
入大光寺遺跡	北塩原村下吉字入大光寺	古代	37
天ヶ作遺跡	北塩原村下吉字天ヶ作	縄文	61
一盃館跡	北塩原村下吉字一盃館	中世	42



図2-1 北塩原村位置図

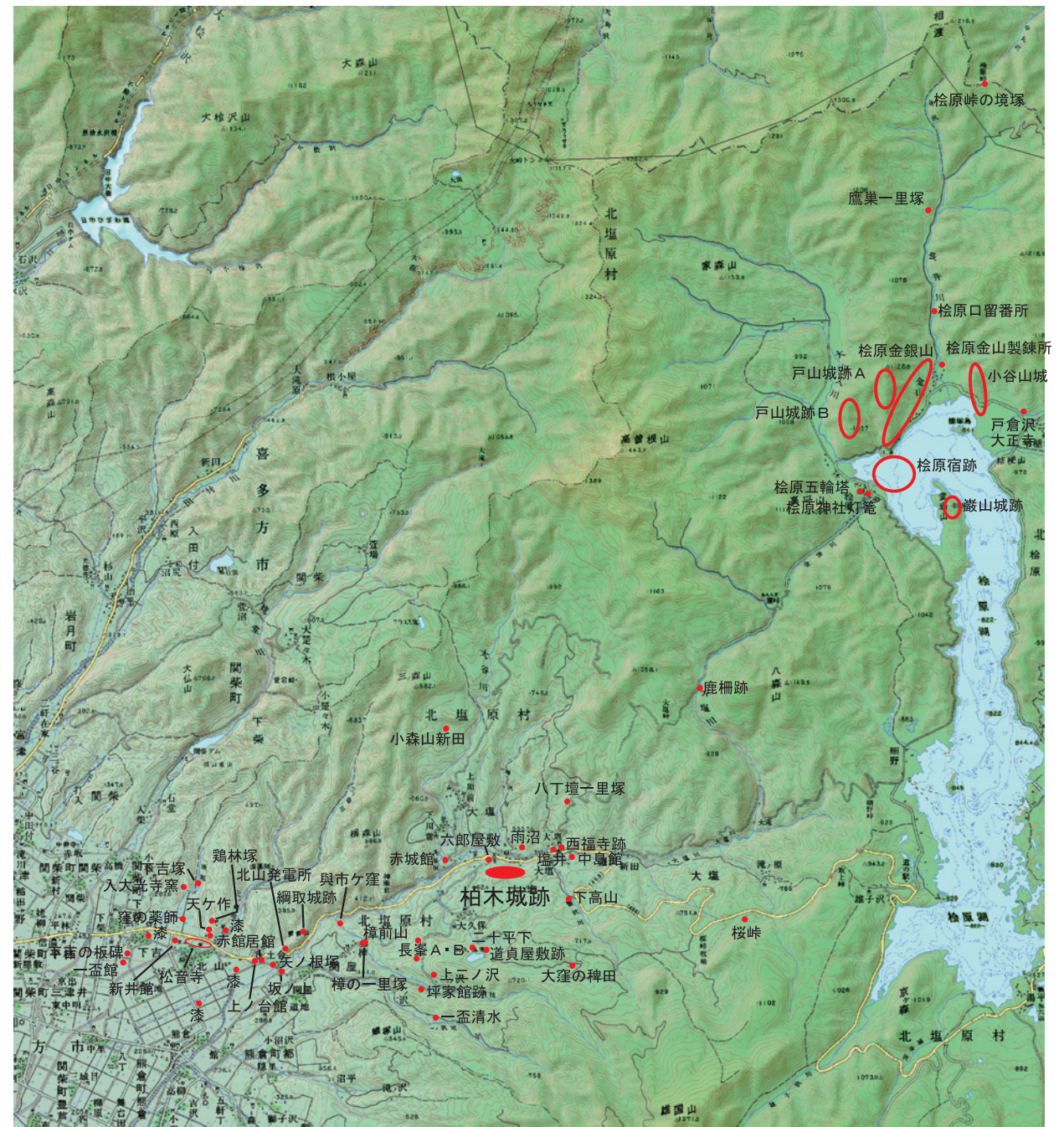


図2-2 遺跡位置図(国土地理院2万5千分の1 KASHMIR3Dで作成)

第3節 柏木城跡周辺の動物

1 地理的要因による動物分布

柏木城は会津盆地の北東端にある大塩川扇状地より東へ3km上流に位置する。南側には標高1,300mの雄国山、北側には標高1,400mの高曽根山、東側には標高1,000mの八森連山が隣接しており、各山の境界を分断するように東西に流れる大塩川溪谷沿いの南側にある標高400～500mの小山に柏木城は展開している。

この山間は鳥類にとっては生息も移動もし易い適地となっているが、哺乳動物にとっては大塩川溪谷が妨げとなり多くの種が南北に分かれていると考えられる。

2 動物の生息状況

動物の調査は目視と聞き取りに加え、近隣地域の資料からの考察によるものである。

(1) 哺乳動物

- ・ツキノワグマ 周囲の全山に生息するが高曽根山から下りてくるものが多く見受けられる。
- ・カモシカ 全山に生息。柏木城周辺でも頻繁に出没。郭内や土塁上でも足跡を確認。
- ・エゾシカ 生息しない。雄国山麓の桜峠で一度だけ確認されているが以後は目撃なし。
- ・イノシシ 生息しない。数回の日撃情報があるが低地から迷ってきたものと推測される。
- ・ニホンザル 高曽根山系には生息。出没は少ない。
- ・テン 生息する。城内の倒木上や石上で糞を確認。
- ・アナグマ、リス 多数生息する。特に柏木城にはナラ、クルミの木が多い為、リスの営巣となっている。
- ・ノウサギ、キツネ、タヌキ 全域に生息する。
- ・コウモリ、ネズミ、モグラ 生息するが種別は不明。
- ・ムササビ、イタチ、ハクビシン 未確認だが生息が予想される。

(2) 鳥類

高山に抱かれた広がりのある溪谷地形の為、大型の猛禽類から小型の鳥類まで種類は多いが柏木城周辺には湖沼が殆ど無いので水鳥は少ない。聞き取り調査ではトビ、カラス、スズメ、ツバメ、ウグイスといった他所でも見かけ易い回答となったがトビ、及びスズメについては同大の鳥類との誤認の可能性が含まれるかも知れない。

また、夏季にはフクロウの鳴き声が頻繁に聴けるとの情報もあった。谷合で響くので場所の詳細は不明。

2011年、春に委員で現地調査した際に主郭付近の杉の樹上に猛禽類がいたが、鳴き声からノスリが巣を守るために威嚇していたものと推測される。猛禽類の巣は補修、拡大しながら何年にも渡って使用されるので保護の必要もあると判断される。

生息する鳥類は留鳥（通年いる鳥）、漂鳥（国内、又は低地、高地を移動する鳥）、渡り鳥（日本と外国を行き来する鳥）毎に分け、以下にまとめてみた。

3 柏木城跡周辺生息鳥類分類

・留鳥 スズメ、シジュウカラ、キジバト、ハシボソガラス、ハシブトガラス、フクロウ、トビ、ホオジロ、キジ、コゲラ、アカゲラ、アオゲラ、カワガラス、カワウ、アオサギ、カルガモ、カワセミ、ヤマドリ、ゴジュウカラ

・漂鳥 ウグイス、ヒヨドリ、モズ、ノスリ、ヒバリ、メジロ、ムクドリ、ホオアカ、トラツグミ、アオジ、カケス、ミソサザイ、ヒガラ、キセキレイ、ハクセキレイ

・渡り鳥 ツバメ、イワツバメ、オオルリ、キビタキ、カッコウ、ヨタカ、ヨシキリ、ツツドリ、ジュウイチ、ホトトギス、ヤブサメ、ツグミ、マガモ、サシバ

その他の鳥類で生息が推測される種も数多くあるが未確認である事に加え、移動の途中や迷鳥の可能性も高いので確実性のある種のみ記載に留めたい。

(木村郁夫)

参考文献

- 会津民俗研究会1977『北塩原の民俗』北塩原村
 富田國男1994『裏磐梯自然ハンドブック』
 磐梯山噴火記念館編1988『磐梯山の自然』磐梯山噴火記念館
 高山の原生林を守る会編1994『吾妻連峰』
 阿部 武2009『裏磐梯の生物』
 高野伸二1989『日本の野鳥』山と溪谷社
 杉坂 学2004『野鳥観察図鑑』成美堂出版
 小林桂助1988『野山の鳥』保育社
 伊達郡梁川町1993『梁川町史』第四巻



図2-2 ニホンカモシカ
平成25年12月9日、柏木城跡の大石塁にて撮影。

第4節 柏木城跡と周辺の地形について

(1) 位置、所在地

北塩原村大字大塩字柏木城2450。主郭は、大塩集落の中心部より南南西に集落と平行に位置する。距離は300m。

(2) 主郭の旧街道からの標高差

曲輪1：61m。曲輪2：56m。曲輪3：49m。曲輪4：50m。

(3) 帯曲輪の北側の斜面の斜度は緩やかな斜面で35度、外は40度で斜面を攻め上がることは不可能である。

(4) 水路

城の南側は水路（湿田）で20～30m。さらにその南側は50m位深い泥の湿田で、攻め入るのは難しい。東側には湿田が100mは続く。地の利を得た城で難攻不落の城である。

(5) 柏木城への道路

大久保集落より俗称滋里道、標高差31m、距離は500m、城の南側の馬場を通り、大塩長泉寺を通り大塩中心部に出る。旧米沢道からは大手口より上る道と城の西側を廻り搦手口へ登る道がある。

桧原からの道路は旧米沢街道の外に桧原より猪苗代に出る道、雄子沢より取上峠を通り、滝ノ原を通り大塩におりる道がある。取上峠より滝ノ原の上部で分かれて大久保館上に来る道があるが、細い山道で軍勢が通るには適さない。が、防備を備える必要はあると考えられる。

(6) 用水路

南側の水路（湿地）用の水を引くため、1.3kmの用水堀を作った。水源は通称、通り清水と呼んでいる雄国山の伏流水であり大量に湧出する。

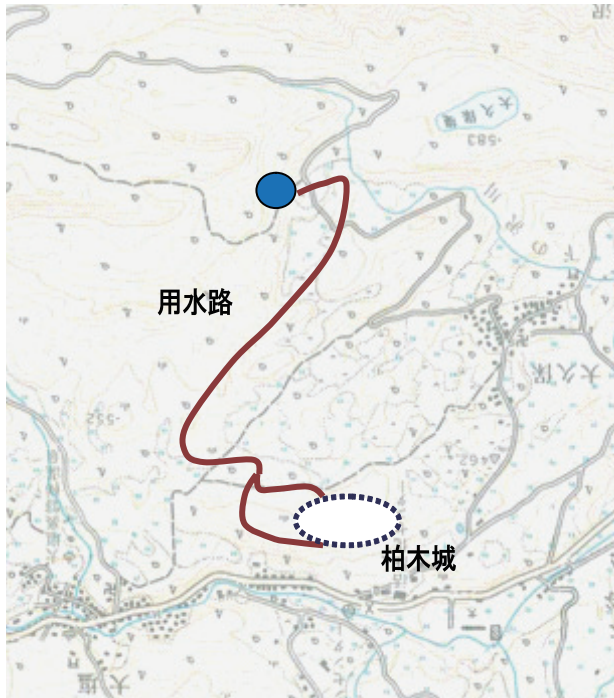


図2-3 推定される用水路
約1.3km離れた水源から引かれた水路が現在まで残る。
(国土地理院2万5000分の1地形図より作成)

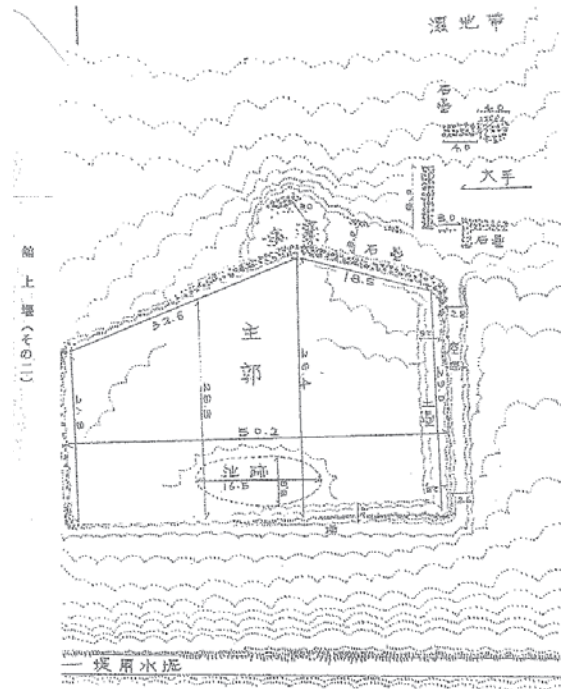


図2-4 道貞邸跡
水源近くには道貞邸跡という中世の遺跡があるとされる。
図は[渡部新一1987]より。

(7) 桧原側よりの大塩村への入り口は塩ノ沢のV字谷の沢に沿った狭い道で神社側より石落としなどの攻撃を受ければ防ぎようがない。

(8) 大塩川

大塩村の入口は大塩川につき当たる。湯の上橋を落とされると村に入るのは困難である。

(五十嵐 怜)

第3章 柏木城跡中心部分の現状

第1節 概要

柏木城跡の範囲は、江戸時代以降に示されてきた主郭を中心とする範囲と、石田明夫氏が指摘する主郭の周りに広がる東曲輪群、西曲輪群、北曲輪群を含めた範囲で捉える見方[石田1999、本書p54]がある。

北塩原村城館等保存・整備・活用委員会では、検討の結果、遺構の特徴や組み合わせから、主郭とそれに近接する曲輪群について柏木城跡中心部として判断した。その範囲は主郭（曲輪1）、曲輪2・3・4・5・6、馬出、帯曲輪1・2a・2bとする平坦面と、それに伴う堀切や堅堀、石塁などである[図3-1]。

主郭を含めた中心部の規模は、東を曲輪4東側、西を虎口3付近までとすると東西約300m、北を虎口2北側とし、南を虎口1南側の曲輪6付近までとすると南北約130mを測る。

標高を見ると、主郭（曲輪1）は、城跡の北に位置する大塩集落との比高差約110mを測る標高約510mの地点にあり、また南西の大久保集落とは約30mの比高差を測る[図3-2]。

柏木城は、地形的に見れば南西側からは傾斜が緩く、北側には幅約20mの大塩川が西流することや傾斜が急であること等から、北方向からは攻めにくい立地となっている[図3-3]。

柏木城跡中心部の北側や西側の斜面下で展開する北曲輪群、西曲輪群、そして南側の谷も含まれるとすれば、北曲輪群から曲輪6付近まで南北350m、曲輪4東側から西曲輪群西端まで東西約450mを測り、石田氏の述べるように東曲輪群までを含めると東西約1.1kmもの範囲となることから、今後、十分な表面観察や発掘調査などによる考古学的な検証が必要である。

以下、本章では、柏木城跡中心部について遺構ごとに概観する。北曲輪群、西曲輪群などについては今後調査を行い、別の機会に報告することとしたい。

報告は、主郭（曲輪1）から周辺の遺構、馬出を含む曲輪4、外縁の石塁、南谷地の順序で行う。遺構名は石田明夫氏が付けたもの[石田1999ほか]をできるだけ踏襲しつつ、新規でつける場合には、付属する曲輪の番号と合わせて名称を付した。曲輪4の石積遺構は「石積4-1」、馬出(U)に付属する虎口は「虎口U-1」、帯曲輪2(O2)に付属する堅堀は「堅堀O2-1」などとしている。なお、同委員会の検討により遺構名称を変更している箇所もある。

第2節 主郭とその周辺の遺構

1 主郭（曲輪1）

柏木城跡で最も標高が高く、広い曲輪である。全体の形状は南北にやや長く東西に広がった紡錘形となり、東・南・西側には土塁がめぐる。内部は三区画されており、石を積んだと見られる石塁と、段差で区画されている。北西側を区画A、北東側を区画B、南側を区画Cとする。標高は区画Aが高く、区画B・Cが低い[図3-4]。

A. 区画A

区画Aは南北に約30m、東西に約40mを測り、東側と南側にはほぼ直線的に設置される石塁によって

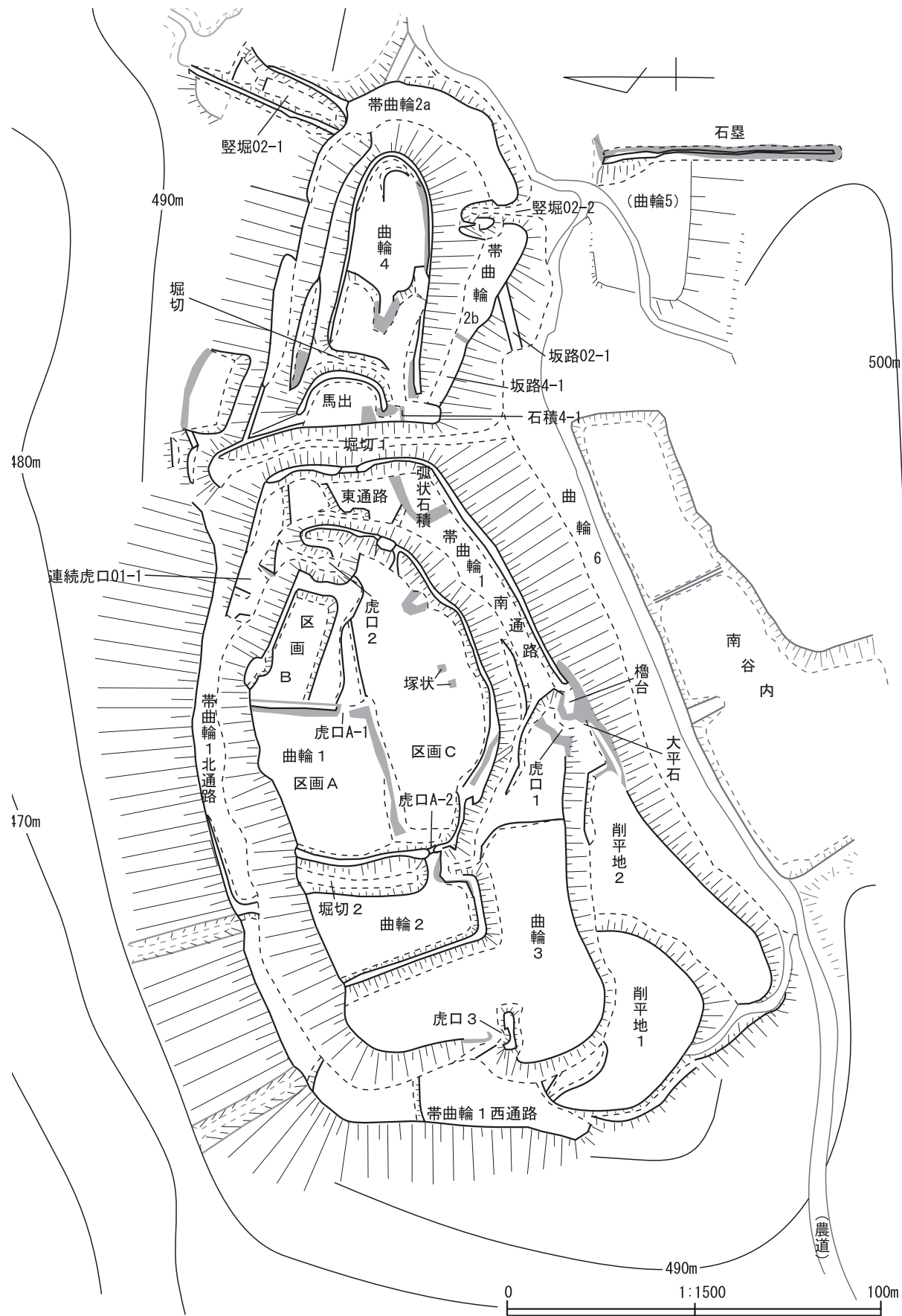


図3-1 柏木城跡中心部（石田明夫原図を使用・改変）



図3-2 柏木城跡周辺の地形
 柏木城跡は、大塩地区、大塩川を望む山の上に立地する。大塩地区は、桧原を経て米沢に至る古道米沢道（後の旧米沢街道）や細野に抜ける谷、磐梯山を北に迂回する道などが集結し、西に向かうと大久保から関屋をへて、会津盆地へと抜ける。
 [国土地理院2万5千分の1、KASHMIR3Dを用いて作成]



図3-3 北側から望む柏木城跡
 前面の山全体が柏木城跡。手前に大塩川が写真左から右に向かって流れている。

区分される。北側には土塁等はなく切岸となる。西側は低めの土塁により画され、堀切を挟んで曲輪2に対面する。区画A東土塁・南土塁は、現状では草木の繁茂により十分な確認はできないが、上面にはほぼ全面で石が積み重ねられているようであり、土塁ではなく石塁と見られる。東土塁の南側、曲輪中心寄りには石塁の切れ目があり、その両側には長さ80cmを超える石が北側に1個、南側に2個並べて配されており、区画Aへの出入口（虎口A-1）を構成している[図3-5・3-6]。虎口A-1は平入りの虎口で、虎口A-1から区画Aの南側を通り、曲輪2への出入口となる虎口A-2がある。虎口A-2は土塁の切れ目であり、そのまま土橋に接続する。また、区画A西土塁には、その北にもう1箇所土塁が切れている部分がある。堀切2をはさんで対する曲輪2には土台となるような石の存在も認められることから、木橋がかけられていた可能性がある。

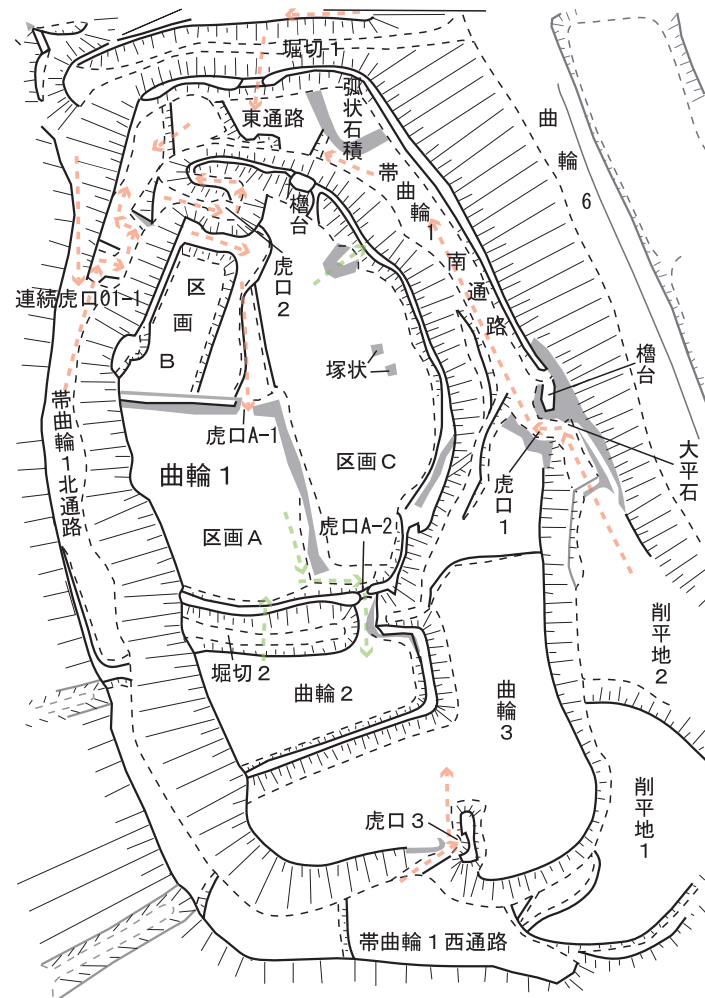


図3-4 柏木城跡主郭とその周辺の遺構



図3-5 区画A 東から
手前が区画Aへの出入口（虎口A-1）。



図3-6 虎口A-1 西から
虎口A-1にはおおぶりの石が配される。奥が区画BとC。

B. 区画B

区画Bは大部分が周囲から一段下がる長方形の堅穴状となる。北側は土塁と急な法面（切岸）によって画され、東から南にかけては幅2mほどの通路状の高まりがあり、ほぼ直角に折れて虎口2と区画Aへの出入口（虎口A-1）を結んでいる[図3-7]。

C. 区画C

区画Cは曲輪1の南半分を占め、形状は半月形となる。東端部は虎口2に面し、西端部は虎口A-2

に接しており、区画A南通路からはやや下がっており段差が認められる[図3-8]。東から南にかけては高さのある土塁[図3-9]と帯曲輪と下がる切岸によって画されている。土塁は柏木城跡のなかでは最も高さがあり、上面や内側の法面上方には石を配する部分も多く、堅牢な作りとなっている[3-10]。区画C東土塁の一部には上面が広がりをもつ箇所があり、東側の帯曲輪や馬出を望む位置にあることから櫓台とみられる。また、南東と南西には土塁が切岸とともに緩く折れ曲がった箇所があり、横矢掛りに類する地業の可能性もある。土塁の高さは櫓台と南東の横矢掛りとみられる遺構がある辺りが最も高く、西に行くにつれて高さを減じている。



図3-7 曲輪A区画B 西から
手前と左側が通路。奥が区画A。通路の内側は掘り込まれて一段低くなっている。

一方、区画Cからは、土塁に上るために設えられたと見られる坂路がある[図3-11]。坂路は櫓台と横矢掛りと見られる遺構の近くで土塁の高さがある部分にかけられており、表面には石が敷かれ強度を高めており、平場から土塁上への兵の移動に留意した近世城郭にみられる雁木坂に類する施設と認識できよう。ほかに、区画内で2箇所、石を積んだ塚状の高まりがある。



図3-8 区画Cの西側 北から
区画Cの西側は、まわりの通路から一段下がる。



図3-9 区画C東側の土塁 西から
曲輪1区画Cの東側には高さのある土塁が築かれる。最も高い部分が櫓台。



図3-10 土塁状の石
曲輪1区画C東～南の土塁状には石が配される。



図3-11 土塁へ上る坂路 東から
曲輪1区画Cからは、土塁の上に上るための坂路が造られている。近世城郭にみる雁木に類する遺構と思われる。

D. 虎口2

曲輪1への出入り口で明確なものは東側の虎口2である。虎口2は帯曲輪1から直接主郭（曲輪1）に入るための出入り口で、東西約14m×南北約12mの略方形に掘り込まれた枡形を呈する虎口である。現状では、帯曲輪1からやや急な坂を上がり虎口内部に進入する状態になっている。虎口2内の南壁は区画Cを削っており、東は土塁、西は区画Bの通路で囲まれ、区画BとCの平場からの深さは約2mを測る。南壁には部分的に石を積んだ箇所が確認されており[図3-12]、その広がり



図3-12 虎口2西壁の石積 南東から
虎口2内部の壁には所々で石積みされた様子が見える。



図3-13 虎口2 南から
奥が外からの出入り口。内部で細かく折れ曲がる。



図3-14 虎口2 北から
虎口2は周囲から掘り込まれ、樹形虎口となる。平成25年暮れの初雪のころ。

は現況では不明だが、帯曲輪1への出入り口である虎口1とともに、大規模に石を積んでいた可能性がある。虎口2の東壁側には南から北に向かって上がる通路が確認できる。したがって、虎口2から曲輪1への進入経路は二通り考えられ、進入後左・左に折れ、土塁端部にとりついて鋭く南折し土塁上を通過して内部に入る経路と、進入後左・左に折れ、再度左に折れて、進入口を越える木橋もしくは門の上などを渡り区画B東の通路に入る経路である。仮に前者とすれば土塁上を経路とするため幅の狭い通路しか確保できず、後者とすれば現況では進入口と区画B通路との高低差は1m弱で、十分な高さがとれず交錯してしまうため、進入口はある程度掘り込まれていたものと想定する必要がある、今後調査検討が必要である[図3-13・3-14]。いずれにせよ主郭への出入り口とは言え相当な屈曲を強いる造りとなっている点が特徴的である。

2 堀切2

東の曲輪1と西の曲輪2を画する堀切である。幅約10mを測り、南北に伸びて北は切岸に開口し、南は曲輪3に開口する。現状では断面U字状となる[図3-15]。やや南に寄った場所に土橋が設けられ、土橋上部は曲輪1と曲輪2の土塁に接続している[図3-16]。土橋の北側は傾斜の急な法面だが、南側は傾斜が緩く、ここに曲輪3からの出入り口



図3-15 堀切2 南から

を想定する意見もある[図3-17]。ただしその場合、空堀にかけられた土橋の防御機能は不十分なものとなり、曲輪1の最重要区画である区画Aへの進入も容易となる位置関係にあるため検討の余地がある。



図3-16 土橋 北西から
曲輪2から土橋を望む。奥が曲輪1区画C。



図3-17 堀切2南側 南から
中央の凹みが堀切2にかけられた土橋。右が曲輪1、左が曲輪2、一段低い手前が曲輪3。

3 曲輪2

東西・南北が約25m・45mを測る台形に近い曲輪である。東側は堀切を挟んで曲輪1に隣接し土橋で結ばれる[図3-18]。西から南にかけては一段低い曲輪3により囲まれており、北側は切岸となる。曲輪3との間は土塁が設けられ土橋から西側の切岸まで続いている。



図3-18 曲輪2 東から
曲輪1から土橋を経て曲輪2を望む。奥は曲輪2南土塁。

4 曲輪3

曲輪1・2の南から西を取り巻く曲輪で、鉤形を呈する。東端は帯曲輪1の虎口1に接し、曲輪1南切岸の下から曲輪2の西に広がる。西側には帯曲輪1から切岸を斜めに上がる出入り口（虎口3）がある。曲輪3の西側と南側には土塁はなく、切岸によって画される。

A. 虎口3

曲輪3西側の切岸中央付近で、墨線が食い違う部分が出入り口となる食違い虎口である。帯曲輪1から切岸を斜めに上がる坂路は曲輪3内の出入り口南側土塁で遮断され左に屈折する[図3-19]。虎口1・2に比べると簡易な印象を受けるが、斜路東側の切岸には部分的に石積みが認められる[図3-20]。

5 帯曲輪1

曲輪1南側の虎口1から、南通路・東通路・北通路をへて曲輪3西側の虎口3付近までを取り囲む帯状の平場で、南通路から東通路の屈折部には弧状石積、北側通路の虎口2付近には連続虎口などがある[図3-4]。

A. 虎口1

虎口1は削平地2を通る西からの通路を経て帯曲輪1に入る出入り口である[図3-21]。なお削平地1・2は後述のように近年の耕作等により削平された平場である。この削平により西からの通路はそ



図3-19 虎口3 北西から
帯曲輪1西通路から虎口3を望む。曲輪3西切岸に対して斜めに上がっていく。



図3-20 虎口3 西から
手前のポールのある箇所が坂路。進むと土塁に突き当たり、左に折れて、曲輪3に入る。切岸に石積みがある。

の大半が失われているが、遺存している範囲を見ると北側は曲輪3南東の切岸に接し、南側は土塁が設けられ、曲輪6へと下る高さのある切岸が続く。南土塁の上には石が配されており、堅固な造りとなっている。虎口1には、南東に櫓台とその西法面に配された大平石と石積み、北側に曲輪3を削った壁があり、そこにも丁寧に石積みが施されて、帯曲輪1への進入路を北へ1回、東に1回屈折させている[図3-22~25]。北側の一段高い曲輪3と南の土塁とに挟まれた枡形虎口である[図3-26]



図3-21 虎口1手前 西から
虎口1手前から撮影。奥に大平石が見える。左は曲輪3の南切岸。



図3-22 虎口1北側の石積み 東から
虎口1北側（上の段は曲輪3南東端）には石積みが施される。



図3-23 虎口1北側の石積み 南から
現状で7段程度の石積みが確認できる。正面を横方向に長い面を向ける。



図3-24 虎口1北側の石積み 東から
左の写真と同一の石積み。急な角度で積み上げている。その分、石積みの高さは低い。



図3-25 虎口1北側の石積み 東から
茂っている樹木により崩れている部分もある。



図3-26 虎口1 東から
周囲から一段低く掘り込まれる。石積みを施した枡形虎口である。

B. 櫓台

虎口1の南東に位置する櫓台は、帯曲輪1の南外縁に築かれた土塁の西端とごれた箇所に設けられており、約5×3mの小規模な平場となっている[図3-27]。虎口1に隣接し通路への見通しも良いことから櫓台と推定したものである。

C. 大平石

虎口1南東壁面（櫓台西法面）には石が積まれており、通路に面する側には前記したように大平石が配される。この大石は約1.2×1.0×0.5mほどのほぼ直方体を呈し、立てられて最も大きな面を通路の外側（西側）にむける[図3-28~29]。近世城郭では大手口や搦手口の石垣に巨石を配し後にこれを「鏡石」と呼称する場合もみられる。柏木城跡のこの大平石については、城郭中心部への出入り口にあたり、外部からの進入者に対する側に大きな面を向けており、近世城郭の出入口においてしばしばみられる「鏡石」に類した据え方をされているが、周囲に積石を配していない点で異なっている。戦国時代末期での「鏡石」の呼称については確認できなかったことから、本書では石の特徴による呼称とした〔北垣1981〕。



図3-27 大平石・櫓台・土塁 西から
虎口1東側の大平石は、帯曲輪1南通路の南土塁西端の櫓台法面に接している。



図3-28 大平石 西から
ほぼ直方体の大石が、出入り口外側に平らな面をむけている。近世城郭にみる「鏡石」に似る。



図3-29 大平石 南から
側面のような。正面に比べると厚みがない。背後の樹木により抑えつけられている。

D. 南通路

帯曲輪1南側は、概ね直線的に伸びており長さ約50m、幅約5～8mの広くて長い通路となっている[図3-30]。この部分は目立つ段もなく、一気に駆け抜けることができる。北側は曲輪1の切岸で、高さもあり土塁上からは帯曲輪南通路を見下ろすことができる。通路の南縁には土塁が築かれ、土塁上には石が列状に配されている状況が観察できる。土塁外側は高さのある切岸となる。



図3-30 帯曲輪1南通路 西から
虎口1を入ると幅の広い直線的な通路が延びる。

E. 弧状石積み

帯曲輪南東には、弧状石積みと称する遺構がある[図3-31～34]。石が数段積み上げられた石列および石塁が、東西方向と南北方向にL字状に配されるもので、両端が土塁に接していることから石積み・石塁と土塁に囲まれてほぼ方形に区画された空間となる。北側の区画石列は、西半が石塁、東半が石積みとなる。この北側東石積みの背面は帯曲輪1東通路であるが、帯曲輪南通路から一段上がっており、ちょうどその段差を石積みで土留めした形となっている。西側を区画する石塁は崩れ気味であるが現状で2段程度石が積まれている状況が確認できる。弧状石積みの北西隅は幅1m弱ほど石列が途切れており、ここが開口部となって内部への出入り口となっていたものと推測される。



図3-31 弧状石積み区画から帯曲輪1南通路を望む 東から
帯曲輪1南通路を東からみる。



図3-32 弧状石積み区画北側 西から
やや大きめの石が3段前後積まれている。

F. 東通路

曲輪1東土塁外の切岸と帯曲輪1東土塁との間を通る。中央が最も高く、南通路に向かって一段、北通路に向かって2段、全体的に下がる段が設けられている。曲輪1の切岸下には溝が掘り込まれ、切岸の高さを確保しているように見える。

東側の土塁は中ほどの一部が途切れており、堀切1を挟んで馬出・曲輪4に面している。対面する馬出には堀切1寄りの南西側に虎口が設けられており、曲輪1・帯曲輪1と馬出の関係を踏まえれば、この、土塁が途切れた部分には木橋などが



図3-33 弧状石積み区画北側 南から
積み石は横方向に目地が揃う傾向にある。たてられた石もある。



図3-34 弧状石積み区画 南西から
東と南の土塁と、西の石塁、北の石塁・石積みでほぼ方形の区画が造られている。

架けられ通路が設けられていた可能性がある。

G. 北通路

曲輪1と曲輪2の北側切岸の下で、東西に伸びる通路である[図3-35]。曲輪1虎口2に進入する箇所が比較的高くなっており、西から進入する際には3段ほどの段が設けられた連続虎口O1-1を通ることになる。連続虎口は左右に曲折する虎口で、段を上がったところに壁が設えられる。西からO1-1連続虎口に入ると、1段目をあがり右折れして曲輪1切岸に当たって左折れし、2段目に上がって壁に当たり左折れして、北側の切岸の前で右折れ、3段目に上がってようやく東通路に出ることがで



図3-35 帯曲輪1北通路 西から
左上段は曲輪1で高さのある切岸となっている。



図3-36 連続虎口O1-1の石積み 西から



図3-37 連続虎口01-1 西から
帯曲輪北通路から虎口2へ入る直前に、坂を4折れさせる入り組んだ虎口が配される。

き、虎口2へ入ることが可能となる。4回の屈折を経る連続虎口となっており、虎口2付近の防御を高めている[図3-37]。2段目の壁となる部分には石積みを確認され[図3-36]、堅牢な作りとなっている。連続虎口の下から西に向かっては概ね平坦な通路が続くが、途中2か所に低い段が設けられている。

一方、階段状の連続虎口を登らずに北へそれると、大塩の集落がある大塩川の河岸段丘まで下るつづら折れの通路となる。

H. 西通路

曲輪3切岸の外側をまわる通路であり、南側でやや広がっている。中ほどに段があり、その北側では概ね平坦、南側では北に傾斜する。通路南端は削平地1に接しており、改変を受けている可能性がある。

6 削平地1・2

削平地1・2は聞き取りにより、現代において耕作等により削平を受けていることが判明した場所である。曲輪の形状を大きく変えるほどの削平ではなく、もとの曲輪の形状をある程度は残しているものと思われる[図3-38]。削平地1は曲輪3の南西で、帯曲輪西通路よりやや高い。削平地2はそこから一段下がっており、帯曲輪への出入口である虎口1への通路もこの削平地2によって削



図3-38 削平地2 東から
手前が削平地2、奥の一段高い段が削平地1。

られている。削平地2の東端には土留め状の石積みがあるが、これは削平後の耕作時のものと考えるのが自然であろう。

7 堀切1

曲輪1・帯曲輪と、曲輪4・馬出を分ける堀切で、長さ約80m、上端幅約10mの柏木城跡最大の堀切である[図3-39]。南端は曲輪6に開口し、北端は北側斜面に開口する。前記したように中ほどの帯曲輪東通路と馬出の間には木橋を架けた可能性がある。



図3-39 堀切1 北から
柏木城跡最大の堀切。西(右)に主郭・帯曲輪1、東(左)に馬出・曲輪4を分ける。

第3節 馬出とその周辺の遺構

1 馬出

西側を堀切1、東側をほぼコの字状の土塁及びその外側の堀切によって区画されている平坦面である[図3-40]。通常馬出は虎口の前面に設けられ、城兵の出入りを防御する目的があるが、ここでは堀切1を隔てた向かいの帯曲輪1に東側土塁の上が低くなった部分があるので、そこから木橋が架けられて出入口となっていた可能性がある。

馬出の土塁は、高さ約1m弱で、土塁上および斜面には部分的に石が配されているのが確認できる[図3-41]。馬出の土塁平面形は現況ではやや方形を意識しつつも直線的ではなく、丸みを帯びたラインで設けられているが明瞭に半円形ともいい難い。外側の堀切は現況で0.3~0.5m程度と浅く、曲輪4との間を区画する。北側は切岸となるためか堀はめぐらない。馬出内部には堀切1寄りの南側に石積みを伴う台状の遺構(石積み遺構U-1)があり[図3-42]、その南側が虎口U-1となっている。

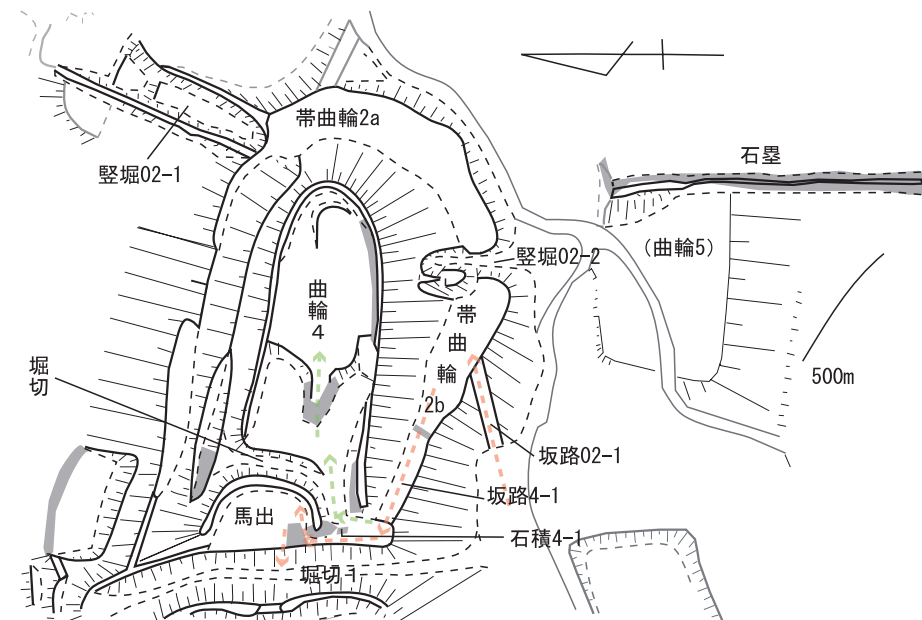


図3-40 柏木城跡馬出周辺の遺構 (石田明夫原図を改変)



図3-41 馬出 西から
中央に見えるのが馬出。周囲に土塁が巡る。その奥は曲輪4。馬出と曲輪4からの出入り口は南側(右側)にある。手前は帯曲輪1東通路で、土塁と堀切1が並ぶ。土塁には切れ目があり、馬出への通路であったとみられる。



図3-42 馬出 南側土塁上の石 北から
馬出の南から東・北にかけて築かれた土塁には石が配される。



図3-43 馬出の出入り口(虎口U-1) 東から
馬出内部からの出入り口は南側土塁と台状遺構の間をとり、南(左)に折れる。

A. 虎口U-1

馬出内部の南側に石積み遺構U-1、土塁南端部の外側に石積み遺構4-2がある。内部の石積み遺構U-1は一辺が約1m程のほぼ方形を呈し、高さは約0.8mを測る。北側側面には石を積んだ状況を確認できる。馬出への出入り口は石積み遺構4-1の西側を通り[図3-44]、土塁端部と堀切の間を抜け、土塁と石積み遺構U-1による食違いの虎口U-1に入る。

2 曲輪4

曲輪4は、西で馬出に接し、北・東・南は土塁と高さのある切岸で画される。平坦面は段差によって東と西に区画されて東が高く西が低い。両者は緩い坂路で結ばれており、西側に大きく入り込んだ



図3-44 曲輪4の出入り口(虎口4-1)
正面が馬出の土塁。土塁の切れ目と堀切1(左側)の間を抜けて馬出内部へ。土塁手前が石積み遺構4-1。右へいくと曲輪4。



図3-45 石積み遺構4-1 東から
ほぼ方形となる2~3段程度の石積み。

坂路が馬出外側の堀切近くまで伸びる。曲輪の南西隅、馬出の土塁端南部にある外側には石積み遺構4-1があり、その付近が出入り口(虎口4-1)となっており、石積みがあることで経路が屈折する。虎口4-1からは下方の帯曲輪2bに下りる坂路4-1がある。

A. 石積み遺構4-1

石積み遺構4-1の積石は現状で多くて3段程度で高さはあまりない[図3-44]。東と南側は面をそろえて石を積んでいる状況が確認され、現状では約1.8mの方形を呈した石積みが崩れたように見受けられる。この石積み遺構4-1の東側が曲輪4の虎口4-1にあたり、曲輪4下方の帯曲輪2bから坂路4-1を上がってくると、上りきった場所で西側の堀切1にぶつかり、右折すると石積み遺構4-1にあたる。石積み遺構4-1と堀切1の間を通れば虎口U-1を経て馬出に入り、東側に折れば虎口4-1を経て曲輪4へと入ることになる。

3 帯曲輪2

曲輪4の東と南に設けられる。中ほどに曲輪4南切岸の途中から掘り込まれる豎堀O2-2によって、北と西(2aと2b)に画されている。平場の北端は豎堀O2-1に接しており、そこから西側には伸びない。西には曲輪4と馬出から帯曲輪2bに下る坂路4-1があり、南には西側一段下の曲輪6へと下りる坂路O2-1がある。坂路4-1から坂路O2-1へは帯曲輪2bで強く屈折する。

A. 帯曲輪2a

北端は豎堀O2-1が接しており、その西側の土塁により画され、南西端には豎堀O2-2が配される。曲輪4からの切岸東下端をまわっており、現状で切岸裾には一抱えもあるような石が並んでいる。平場東側は低い切岸で画されている。帯曲輪2aは幅約10m、延長約50mある平坦面で、ここから曲輪4への切岸は非常に高く急な傾斜となっている[図3-45]。豎堀O2-1・豎堀O2-2とともに城内中心部への進入を遮断する強い意識がうかがえる。

B. 帯曲輪2b

曲輪4と馬出の南西から下る坂路を下りた平坦地で、北は曲輪4切岸、東は豎堀O2-2、南は切岸で画される[図3-46]。曲輪4切岸の下には大きめの石が配される。

C. 豎堀O2-2

曲輪4南切岸の法面途中から掘り込まれる。帯曲輪2を東と西(2a・2b)に分け、その一段下の平場に開口する[図3-47]。豎堀西側では上方が土塁となっている。



図3-46 帯曲輪2a 曲輪4(西)から
曲輪4の下方に帯曲輪2aが広がる。高さのある切岸が両者を隔てる。



図3-47 帯曲輪2b 東から
帯曲輪2bから坂路(画面奥)を上がると曲輪4と馬出へ入る。南側(左)の坂路を下がると曲輪6へお入る。

D. 坂路4-1

坂路4-1は幅約3mあり、幅の広い通路となっている。北側の曲輪4切岸裾には大きな石が並んでおり、坂路下方の帯曲輪2bとの境にもこれを画するように石が並ぶ。

E. 坂路O2-1

坂路O2-1は帯曲輪2bから曲輪6に下りる通路である。現状では坂路4-1ほどは明瞭ではなく、周囲の切岸と見分けが困難な部分もあるが、やや幅の狭い通路が設けられている。

11 石塁

柏木城跡の南東で南北方向に伸びる[図3-48～50]。確認できる範囲では、石を積み上げて塁としているので石塁とした。柏木城の築かれる丘陵部と南側の山裾との間の緩斜面を塞いでおり、南端は山裾近くまでのび、北端は後年一部削平されたものとみられる。高さは北側では約1.5mを測り、南に向かって徐々に低くなっていく。中ほどからは現況で高さ50cmに満たない。石塁の東側は徐々に標高が上がっていく緩斜面であり、石塁の西側は地盤が低くなっている。曲輪4と塹壕1、塹壕2と併せて東方からの進入を遮断する防御施設の可能性がある。

12 曲輪5

石塁の西側に隣接する平坦地である。柏木城跡のほかの曲輪と見比べると近年耕地となっていた場所を挟むため、不明な点も多い。石塁に接している。



図3-48 塹壕O2-2 南から
帯曲輪2a(右)と2b(左)をへだてる塹壕。上は曲輪4。



図3-49 石塁 南から
北側は高さのある石塁となる。石塁の西(左側)が曲輪5



図3-50 石塁 北から
南に向かって低くなっていく。

13 曲輪6

柏木城跡主要部分の南側、帯曲輪1や削平地2の南切岸に接する[図3-51]。東は帯曲輪2bを経て曲輪4・馬出へのぼる坂路O2b-1の入り口に接し、南は谷地となる。西は削平地2への上り口付近までひろがると見られる。現状では農道が大久保方面(西)から通じてきており、柏木城跡の南側への通路が通され、農道として利用されている。

14 南谷地

曲輪6の南側の谷である[図3-52]。谷は現在水田となっており、往時の様子は不明だが、50年ほど前までは湿地であり、ヘドロ状の湿地であった。江戸期の絵図では堀として描かれる。現在では圃場整備により乾田化されているが、曲輪6の平場から水田面まではかなり深さがあり、斜面も急である。

(長島雄一・布尾和史)



図3-51 石塁 東から
石積みは基底付近に大きめの石を用いている。



図3-52 曲輪6 西から
細長い曲輪が西から東へ延びる。左上は帯曲輪1南通路。西側の水田は南谷内。



図3-53 南谷地 東から
江戸時代の絵図に描かれた柏木城跡南側の堀は、現在、水田となっている。右が曲輪6で、西(奥)へ進むと大久保地区へ抜ける。

6 政宗記 卷一大内暇給事

《(上略)されば政宗、同(天正13年5月)三日に会津より田舎道六十里北、^(きて)扱米沢よりも同十里なる、会津領の境桧原と云処へ馬を出されければ、即時に桧原は手に入れれども、今度は先会津への初の手切なれば、密のため米沢の軍兵迄にて出給ふに、左馬介敗軍なりと聞き、五月五日に惣軍を桧原へ参れと触給ひ、諸勢参るを待給へば、其間に会津の人数は大塩へ楯籠り、城は堅固に相抱へけり。伊達勢も同八日に、大塩の上の山まで動きけれども、山中にて道一筋なれば、^(そなえ)備を立べき地形なし、大山隔て後陣は桧原を引離れざれば、合戦には及ばず、近々と働き引上、先小身者をば返し給ひて、御身は桧原におはします事、《『政宗記』巻一は「寛永十三年丙子六月吉日」(1636)と奥書されるが、この書物全体は少なくとも元禄16年(1703)には成立している。小林清治校注『伊達史料集(上)』から抄録》

7 芦名家記 卷第一米沢正宗桧原越より会津^江働之事

去程に伊達正宗は芦名家へ遺恨の事有て、桧原を正宗より攻給へとて、穴沢善右衛門尉つなぎ峠に物見を差置、正宗寄給へハ見下しに鉄炮を打せ用心きびしく仕りし故、左右なく正宗桧原を攻取り給ふ事不叶、然る処に穴沢一党のうちに遠藤武蔵と云者芦名へ謀反に依て、穴沢一党の者を風呂の内にて焼殺しける、穴沢善右衛門・同親右衛門はかり大塩へ引取り、三瓶大蔵を頼ミ是と一所に有て、右の条々を黒川へ注進申上けれハ、執権衆より⁽⁴⁾羽黒川より其口堅く相守へしとの上意をかふむりて、則三瓶大蔵・穴沢兄弟大塩に勢ともを揃て堅く守りけり、黒川より猪苗代盛国へも使者を立られ、頃日正宗桧原へ寄来るよし桧原より注進あり、其口慥に相守らるへしとの上意にて、早速猪苗代勢を集め置、并に桧原口をも堅く守りけり、斯て伊達正宗ハ桧原を攻取て移り給ひ、向ひ城を築き、要害堅固にして住宅せしめ玉ふ、《『芦名家記』は国立公文書館内閣文庫の所蔵。徳川家から献本されたものである。『群書類従』第21輯にも収録されるが、前者は平仮名交じり文、後者は片仮名交じり文である。著者、成立年ともに未詳。参考として収載する》

8 貞山公治家記録 天正13年5月8日条

八日戌寅、大塩ノ上ノ山マテ御馬ヲ出サル、山下ニ敵城アリ、身方備ヲ立ヘキ地ナシ、大山ニシテ細道タ、一筋ナレハ、大勢ハ進ミ得ス、後陣ノ勢ハイマタ桧原ヲ出離レス、此故ニ只御一線有り、小身ノ輩ハ不^レ残皆大塩城ニ返サレ、公ハ桧原ニ財陣シ賜フ、《「貞山公治家記録」は仙台藩藩祖政宗の父輝宗に始まり最後の藩主慶邦に終わる伊達氏歴代の正史『伊達治家記録』の政宗代の部分である。元禄16年(1703)の完成》

9 会津要害録

桧原ノ塁

大峠ヨリ此方ノ峯ニアリ、天正十三年五月十一日伊達左京大夫正宗大塩ヲ襲ントメ桧原坂ヲ下リテ、先手已ニ鹿垣・長原ノ辺マテ進ム、折シモ五月雨頻リナレハ、不叶メ桧原迄引レタル処ニ、昨日扱手トメ田付ヘ向ヘタル原田左馬・新田常陸カ散々ニ敗軍シテ長井ヘ引返シタル由、急ヲ告レハ、イタツラニ此峯ニ要害ヲ構ヘ五十余日対陣セラルハ、会津ハ太守亀王丸漸クニ才ナレハ、四天王ノ富田・平田等塩川ヘ出張メ弓断ナク下知ス、又桧原ニ居タル武士モ皆大塩ヘ集テ固ク柏木森ヲ守レハ、

正宗モ襲来ン便テ尽テ、要害ノ成就スルヲ幸ニメ、郎等後嶋孫兵衛ヲ残置テ同六月ノ末米沢ヘ帰陣也、

10 新編会津風土記

古蹟

柏木城跡 村南五町山上ニアリ、東西百二十五間・南北三十五間、南ノ麓ニ長九十間・幅四間ノ馬場跡アリ、其南ニ東西百三十間余、南北二十五間ニ空壕アリ、本丸二三ノ丸ノ形堀切ノ跡残レリ、天正十二年葦名義広コレヲ築キ、三瓶大蔵ヲ城番トシテ此辺ノ武士百五十騎ヲソヘ米沢ノ押ヘトシ、檜原村ノ繫トセシ所ナリ、今ハ皆田圃トナル、《「新編会津風土記」は文化6年(1809)に完成した会津藩の地誌で、寛文6年(1666)成立の「会津風土記」を補正しつつさらに詳述したものである。会津若松市立会津図書館の写本による》

11 会津四家合考 卷之三摺上ノ原軍ノ事

《(上略)河原田治部少輔盛次ハ、内々桧原口ノ用心ニ、大塩ヘ向テ居ケルニ、此ヘハ敵一人モ不来、殊ニ政宗、猪苗代迄乱レ入ラレタル沙汰ヲ聞テ、則大塩ヲ打立、摺上ヘ駆向ケルカ、(下略)《会津若松市立会津図書館蔵写本による》

12 伊達家日記 天正17年6月6日条

むま 六日

天気昼時分雨少ふり申候、則やミ申候、金川・三橋御動也、大塩あけかたに引申候、

《『伊達家日記』は伊達家の公的な日記で、当主政宗の動静等を知ることが出来る貴重な史料である》

13 政宗記 卷六摺上合戦

《(上略)六日跡の朔日に、大森より原田左馬介を米沢へつかわし、最上境と下長井の勢を差置、北条と上長井の人数を相具し、会津の大塩へ働き出、猪苗代より成実・景綱、北方辺を動くならば、末にて出合ける様にと遣し給へば、思ひの外政宗猪苗代へ乗入給ひ、摺上にて勝利を得、会津の衆敗軍と聞へけるに、あまつさへ大塩の城は引除、残て金川・三つ橋・塩川と云、三ヶ所持抱ひ、扱其外北方の侍、地下人に至る迄、皆残りなく会津に引除ける由、左馬介承り、六日の夜に入働所へ参りけるなり。

14 片倉代々記 天正17年6月6日条

六日 公金河、三橋へ御働あり、鉄炮を打懸させらるれとも、城中堅固に見ゆる間、明日御近陣在て攻抜給ふへき由被仰付、御人数引揚げ仕寄^{シヨキ}の道具支度仰付らる、今宵 公大寺前の原に御野陣也、昨日葦名殿摺上の合戦敗北に就て、大塩城も今朝明方に人数不残城を明て黒河へ引退く、

第2節 年 表

柏木城の築城から廃絶の前後、天正8年から天正17年までの会津を中心とした出来事を年表にまとめた。

西暦	年号	月日	会津領主	出来事	文献
1580	天正8	2月	蘆名盛氏	蘆名盛隆・佐竹義重・白川義親、田村氏と合戦	金上文書『新潟県史資料編5』3201ほか
		6月		蘆名盛氏、死去	会津若松市宗英寺所蔵蘆名盛氏坐像厨子銘
		9月8日	蘆名盛隆	蘆名・二階堂・佐竹、佐々川において田村氏と合戦	『郡山市史8』306
1581	天正9	3月		伊達輝宗、信夫郡杉目城に出馬して蘆名・二階堂・岩城氏と田村氏を調停する	伊達文書『福島県史7』99-142～144
		4月	蘆名盛隆	蘆名盛隆、佐竹義重とともに御代田城に田村氏を攻める。輝宗から調停の使者くる	伊達文書『福島県史7』99-146
		4月18日		田村氏が今泉城ほかを二階堂氏に返還して和睦する。	伊達文書『福島県史7』99-152
		7月		二階堂盛義、死去。これに伴い、盛義後室と子の蘆名盛隆が二階堂家臣と領地を守ることになる	『性山公治家録』同年7月条
		8月		蘆名盛隆、織田信長に名馬と輜轡を、野沢の地頭荒井万五郎を名代として贈る。盛隆、三浦介に任じられる。蘆名盛備が上洛、遠江守に任じられる	『信長公記』巻14
		10月		蘆名盛隆、上杉景勝に刀を贈る。景勝、同盟を約する	『上杉年譜』景勝巻5 上杉景勝書状
		1月26日		富田氏実、上杉景勝から堀越を与えられる	『上杉年譜』景勝巻6 上杉景勝宛状
1582	天正10	2月		上杉使者林泉寺僧宗鶴が蘆名盛隆の響応を受ける。須江光頼・金上盛満・富田氏実らと会談	『上杉年譜』景勝巻6 金上盛満書状
		2月23日		上杉景勝、蘆名盛隆に血判による同盟締結を求める。金上盛満、応じる意向を示す	『上杉年譜』景勝巻6 金上盛満書状
		2月26日	蘆名盛隆	蘆名盛隆、上杉・新発田の和睦の使者として須江光頼と松本左馬助を送る	伊佐早文書『福島県史7』125-7・8
		4月		穴沢新右衛門俊光、地頭小荒井阿波を攻める	『新編会津風土記』巻之62
		4月2日		蘆名盛隆、小田切弾正忠に新発田・上杉への援軍を送らないように命ずる	伊佐早文書『福島県史7』125-9
		4月7日		新発田重家、蘆名氏に救援を乞う	石丸本文書集『上杉家記』巻之27
		4月12日		蘆名盛隆、上杉景勝に、新発田重家の援軍要請には応じない旨を伝える	『上杉年譜』景勝巻6 上杉景勝書状
		5月29日		滝川一益、上杉景勝に蘆名が加担しているのではないかと詰問。金上盛備が釈明	坂田文書『会津若松史8』507頁
		6月2日		本能寺の変	
		8月12日	蘆名盛隆	蘆名盛隆、上杉景勝に新発田攻撃を了承する	上杉文書『新潟県史資料編4』144-11
		8月14日		蘆名盛隆、小田切弾正忠に上杉景勝から派兵命令があっても応じないように命ずる	『上杉年譜』景勝巻7 蘆名盛隆書状
		9月1日		蘆名盛隆、上杉に援軍を送る	色部文書『上杉家記』巻之28
		10月		上杉景勝使僧嶋閑斎と新発田攻めを相談	『上杉年譜』景勝巻7 須江光頼書状
		10月		上杉景勝から血判誓書が届く	上杉文書『福島県史7』144-13・14
		1583	天正11	5月	
5月				小田切弾正、上杉景勝から所領給与を約される	小田切文書『上杉家記』巻之28
10月				上杉景勝、蘆名盛隆に援軍を謝する	伊達文書『福島県史7』99-161
12月				蘆名盛隆、大内家中の混乱をおさめるために伊達氏に助勢してもらったことを謝する	『片倉代々記』天正11年12月条所収文書
1584	天正12	2月5日		蘆名盛隆、大寺清光に年頭祝儀の返礼を行い、その中で新国貞定が1月に見せた忠誠を疑う行為に対して許したことを記す	首藤石川文書『福島県史7』中世62-13
		2月1日		田村清顕、上野結城氏に宛てて新国氏の動向を示す	奥州文書『福島県史7』中世34-15
		3月25日		伊達輝宗、蘆名盛隆の出馬について考えのあることを某へ書状にて知らせる	松本与大夫所蔵文書『福島県史7』126-8
		4月6日		蘆名盛隆、小田切氏・岩城常隆と田村表を攻める	小田切氏文書『新潟県史資料編4』1663
		4月12日		岩城常隆、伊達輝宗に蘆名盛隆の出馬に関して書状を送る	『大日本古文書伊達家之一』198
		4月16日		蘆名盛隆、上杉景勝宛の書状に、田村表からいちど帰陣して再出馬したことを記す	伊佐早謙氏文書『新潟県史資料編5』3311
		5月27日		太田資正、保土原行藤宛の書状に、盛隆が病のため帰陣し、他の人々は陣にとどまっていることを記す	歴代古案15-12『史料纂集歴代古案』1274
		6月13日	蘆名盛隆	蘆名盛隆、東光寺参詣の留守に松本太郎行輔と栗村下総に黒川城を奪われる。その夜のうちに奪い返す	『性山公治家録』天正12年6月中旬条
		6月27日		蘆名盛隆、連沼右衛門・小田切但馬守に陣立てを命じる	佐竹式部義都人家蔵文書『茨城県史史料中世編IV』、反町英作氏所蔵文書小田切氏文書『新潟県史資料編4』1666
		6月28日		6～7月の蘆名内紛について、伊達輝宗が中津川丹波を使者として会津に派遣	『仙台市史資料編13』参考94
		7月3日		佐竹東義久、会津より長沼の調義に及ばれたとして、家臣に出陣を命じる。	秋田藩家蔵文書『茨城県史資料編IV』322頁
		7月7日		長沼城、黒川勢に包囲される	上杉文書『福島県史7』144-15
		7月10日		上記について、伊達政宗から蘆名盛隆に書状	『大日本古文書伊達家文書』279
		7月18日		富田氏実、直江兼統宛に、蘆名盛隆が出陣せず、「作調儀」が行われたと記す	上杉家文書『新潟県史資料編3』366
		9月15日		蘆名盛隆、塩松境の紛争に、小田切但馬守に軍勢を催促する	反町英作氏所蔵文書小田切氏文書『新潟県史資料編4』1669
9月28日		佐竹義重、金上盛満宛に、長沼城から蘆名盛隆が軍を引いたと記す	金上文書『新潟県史資料編5』3205		

西暦	年号	月日	会津領主	出来事	文献	
		10月6日		蘆名盛隆、謀殺	『性山公治家録』天正12年10月6日条	
		10月9日		佐竹義重、盛隆遺児亀若丸を家督に推す	伊達政宗記録事蹟考記『会津若松史8』244頁	
		10月13日		新国貞通、高野親兼に蘆名家内紛について伊達輝宗の「御念」を謝す	高野文書『長沼町史2』78	
				元亀～天正初年に、蘆名盛氏、輝宗次男を会津に差し越すように再三懇望する。輝宗、次男成人のときは盛氏に奉公することもあるだろうと回答	青山文書『福島県史7』69-50	
		10月16日	亀若丸	蘆名家家督、亀若丸に決定。佐竹義重、同盟強化のための条々を示す	芦名文書『福島県史7』108-7	
		10月20日		伊達輝宗、政宗に家督を譲る		
		1585	天正13	正月～3月	大内定綱、小浜城にこもって政宗へ出仕せず。これを蘆名の指示として、政宗、会津と合戦を決断。	『政宗記』巻1
		3月18日			猪苗代盛国、政宗相統祝儀進物を届ける	『歴代古案』1280・1278
		4月上旬			田村清顕、伊達政宗に大内定綱の討伐を求める。	伊達文書『福島県史7』中世99-165
		4月18日			伊達政宗、辺見上総守宛に、「さいかちたいれん寺分一村」の処遇について記す	「引証記」『仙台市史資料編10』12
5月2日		原田宗時、北方の柴野弾正館に潜入する。後刻、原田退去		『政宗記』巻1		
5月3日		伊達政宗、松原を手に入れる		『政宗記』巻1		
5月8日		伊達政宗、「大塩の上の山」に進撃する		『政宗記』巻1		
5月8日		伊達成実、松原に来る。猪苗代盛国への調略を献策		『政宗記』巻1		
		伊達政宗、猪苗代盛国宛に書状を出す。盛国、降伏後の条件を示す。政宗、これを了とするが、猪苗代盛種が反対する		『政宗記』巻1		
6月5日		伊達政宗、上杉景勝に松原在陣を知らせる		上杉文書『福島県史7』144-10		
6月14日		最上義光、岩城氏の須賀川出兵を賞賛。政宗の会津侵攻を非難		三坂文書『福島県史7』中世14-21		
6月28日		伊達政宗、松原城代に後藤信康を置いて米沢に帰る		伊達政宗記録事蹟考記『北塩原村史資料編』94		
8月27日		伊達政宗、小手森城の合戦に勝利		佐藤文右衛門氏所蔵文書『仙台市史資料編10』21		
8月28日		伊達政宗、小手森城の合戦に勝利したことを松原城代に伝える		伊達政宗書状『北塩原村史資料編』101		
9月25日		伊達政宗、大内定綱を攻める。大内定綱に会津の三人の家老が会津亡命をすすめる		『政宗記』巻2		
11月		佐竹・蘆名・二階堂・石川・白川・岩城の兵、須賀川に集結	『政宗記』巻2			
		11月17日	佐竹連合軍、畠山氏擁護のため太田原に伊達氏を攻める			
		11月27日	伊達政宗、松原城代から報告を受ける	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』102		
		12月	伊達政宗、松原城代の番替えを行い、塩森兵庫が入る	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』103		
1586	天正14	3月14日	大立目宗行、松原城番として入る	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』105		
3月16日		伊達政宗、後藤信康に畠山氏との戦について知らせる	伊達政宗記録事蹟考記二『北塩原村史資料編』108			
5月		蘆名、相馬義胤がすすめる調停に異を唱えるが、叶わず	瀬谷文書『白河市史5』中世968			
6月16日		伊達政宗、後藤信康に会津に関する情報を報告するように指示する	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』109			
7月7日		伊達・畠山に「一和」成立	伊達政宗記録事蹟考記二『二本松市史3』133			
7月		関白からの停戦命令を記した小笠原貞慶書状（6月17日付）、田村清顕に届く	青山文書『福島県史7』69-47			
7月16日		二本松城開城、畠山氏は会津に逃れる	留守家文書『仙台市史資料編10』43			
7月下旬		佐竹義重への停戦命令を示した秀吉直書（5月25日付）、白川義親に届く	白川結城文書『白河市史5』中世971・969			
8月22日		伊達政宗、松原に陣した留守政景に鷹の借用を願う	根本甲氏所蔵文書『北塩原村史資料編』110			
11月2日		佐竹義重、10月末に死去した蘆名亀若丸のことに言及	歴代古案15-3『史料纂集歴代古案』1265			
1587	天正15	2月8日	伊達政宗、後藤信康に「松原以下ノ御境目警固等ノ義厳シク檢察ヲ加ラル」旨を伝えたものと思われる	伊達政宗記録事蹟考記二『北塩原村史資料編』108		
2月15日		佐竹東義久、白川義親に、白川名跡は義広の子に継がせることを約する	白川文書『白河市史5』中世981			
3月3日		蘆名義広	佐竹義広、蘆名家督をつぐ	『平姓蘆名氏之家系』		
3月16日			伊達政宗、後藤信康に警備の弛みをとがめる	伊達政宗記録事蹟考記二『北塩原村史資料編』113		
5月			上杉景勝、新発田・五十公野在陣。蘆名義広、平田・金上氏を津川に配置			
6月8日			松原から伊達政宗に「しの子」が贈られる	『伊達家日記』		
6月16日			伊達政宗、松原から連行された犯罪被疑者を処罰する	『伊達家日記』		
6月末			後藤信康、伊達政宗に人夫派遣を要請	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』116		
7月1日		伊達政宗、後藤信康に人夫を送ることを伝える	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』116			
7月		松原城から逃散、伊達政宗、これを戒める	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』117			
8月		蘆名義広、赤谷城の小田切但馬守に兵鉄砲を送る	小田切文書『上杉家記』巻之30			

西暦	年号	月日	会津領主	出来事	文献
		10月14日		鮎貝宗信、最上義光に内通。伊達政宗、松原城に使者を送り下飯坂右衛門に七ヶ宿街道に赴くように命ずる。後藤信康、人員の補充を要請	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』120
		10月24日		新発田重家、上杉景勝によって討たれる。蘆名氏、白川・佐竹に救援を求めるが間に合わず、会津衆多数討ち死に	「伊達家日記」
1588	天正16	2月2日		伊達政宗、松原城の警固を監察させる	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』122
		4月		伊達政宗、松原城の普請を命じる	伊達政宗書状取意文『北塩原村史資料編』123
		4月7日		石川弾正、伊達家より離反	「貞山公治家記録」
		4月18日		蘆名・二階堂、片倉景綱・成実と太田原で合戦する	『郡山市史』388
		5月10日		猪苗代盛国、猪苗代城を奪還し当主に戻る	「伊達家日記」
		5月11日		蘆名盛隆後室、死去	『大日本古文書伊達家文書之一』370
		5月19日		中津川氏、「会津きたかたへくさいり」する	「伊達家日記」
		5月20日		伊達政宗、築館城出陣。翌日、小手森城攻め	「伊達家日記」
		5月25日		伊達政宗、大森城に退去	「伊達家日記」
		5月26日	蘆名義広	蘆名義広、佐竹義重・白川義親・石川昭光と安積郡に陣する	瀬谷文書『郡山市史8』392
		閏5月24日		中津川氏、「あいつへ草いたし」する	「伊達家日記」
		6月		伊達政宗、後藤信康に松原口の警戒を指示	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』125
		6月11日		伊達政宗、蘆名・白川・石川・岩城連合軍と安積郡に対陣する	「伊達家日記」
		7月8日		伊達政宗、後藤信康に郡山合戦の戦局を知らせる	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』126
		7月10日		伊達・蘆名、和睦	「伊達家日記」
		9月25日		豊臣秀吉からの惣無事令が蘆名・伊達に伝えられる	「伊達家日記」
		10月14日		蘆名義広、金上盛備を上洛させる	『会津旧事雑考』
		11月7日		伊達政宗、松原城番手新田義綱の労をねぎらう。城代後藤信康に増員要請に応じる努力を続けることを伝える	『仙台市史資料編10』340
1589	天正17	1月14日		片倉景綱、富田氏実が松原城に進物を贈ってきたこと伊達政宗に知らせる	針生寅次郎氏所蔵片倉家文書『北塩原村史資料編』中世編年128
		2月25日		伊達政宗、片平親綱に内応の首尾によっては安積郡富田・只野などを与えると記す	政宗君記録引証八『郡山市史8』中世428
		2月25日		伊達政宗、大内定綱が横沢三郎の調略に成功したことについて、今後もうまくいけば安子島を与えると記す	伊達文書『福島県史7』中世99-210
		2月		蘆名義広、上杉景勝とのあいだに和睦を結ぶ	佐竹文書『福島県史7』143-49
		3月20日		伊達政宗、鬼庭綱元に、白川義親が内密の話があると語ってきたことを記す	巨理神社文書『仙台市史資料編10』394
		3月22日		猪苗代盛国、伊達政宗に浜田景依を通じて「入魂」の意を伝える（原田宗綱も3月24日に知らせる）	歴代古案15-16『史料纂集歴代古案』1278
		3月23日		蘆名勢二隊、須賀川出陣。伊達政宗、これを気にかける	政宗君記録引証八『仙台市史資料編10』413
		3月24日		石田三成、蘆名義広の上洛をうながす	『福島県史7』126-27
		5月4日		伊達政宗、安子島城を攻め落とす	「政宗記」巻六
		5月5日		伊達政宗、高玉城を攻め落とす	登米懐古館所蔵登米伊達家文書『仙台市史資料編10』420
		5月7日		蘆名義広、御代田城を攻める	嶺崎家文書『仙台市史資料編10』422
		5月11日		伊達政宗、後藤信康が松原口の状況を知らせてきたのへ返礼	伊達政宗書状『北塩原村史資料編』130
		5月23日		大内定綱、伊達政宗に宛て、蘆名が会津に引き上げ、佐竹義重が蘆名に出馬しないため、義広を佐竹に返すべきだという蘆名家中の状況を記す	「貞山公治家記録」
		5月27日		佐竹義重・蘆名義広、須賀川に出陣	「貞山公治家記録」
		5月28日		三蔵軒、猪苗代盛国に会津と手を切るように記した伊達政宗書状を渡す	「貞山公治家記録」
		6月1日		三蔵軒、猪苗代盛国の応諾の返答を持ち帰る	伊達文書『福島県史7』中世99-218
		6月2日		伊達政宗、猪苗代盛国に松原口から援軍を送ることを知らせる	「伊達天正日記」
		6月3日		蘆名義広、黒川城に戻る	
		6月5日		摺上の合戦	
		6月6日		柏木城から兵、退く	「伊達天正日記」
		6月10日		蘆名義広、黒川城を出る	茂庭文書『仙台市史資料編10』452
		6月13日	伊達政宗	伊達政宗、黒川城入城	
		6月18日		伊達小次郎、松原・大塩を経由して黒川城に着く	「伊達天正日記」

(※高橋明2007・2009から作成)

第5章 検 討 —これまでの研究と今後の課題—

本章では、柏木城跡に関して言及されてきた研究を概観するとともに、第3章で述べた柏木城中心部の現地観察の成果をまとめつつ、今後に向けての課題を整理することとしたい。なお先学の方々の指摘等については、研究状況の整理という目的からできるだけ引用文自体も掲載することとした。

第1節 呼称について

柏木城については、第4章第2節でみる文献や絵図等にて以下のような呼称が知られる。

- 『異本塔寺長帳』天正十二年条・・・・・・・・・・「柏木城」（会津大塩邑柏木山築城）
- 『会津旧事雑考』卷之七天正十二年条・・・・・・・・「柏木森城」
- 『富田家年譜』天正十二年条・・・・・・・・・・「柏木森城」
- 『会津古墨記』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「柏木城」
- 『会津要害録』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「柏木ノ森ノ墨」
- 『貞山公治家記録』天正十三年五月八日条・・・・「大塩城」
- 『新編会津風土記』卷之五十六大塩村・・・・・・・・「柏木城」
- 『会津古城之図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「大塩邑柏木森臼城之図」
- 『会津城墨館図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「耶麻郡大塩邑柏木城」
- 『耶麻郡誌』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「大塩邑柏木城之図」
- 『小沼組絵図』・・・・・・・・・・・・・・・・・・「柏木古城」

会津では、江戸時代の史料により、「大塩」「柏木山」「柏木森」にある城跡ということで、「柏木城」「柏木森城」「柏木森臼城」などと呼ばれていたことが知られる。伊達氏方では「大塩城」という呼称が使用されており、呼び名が異なっていた。本書では『異本塔寺長帳』や『会津古墨記』などに拠るとともに、今日一般的な「柏木城」「柏木城跡」という呼称を使用した。柏木城中心部は現在の字名も「柏木城」となっている。

第2節 柏木城の築城から廃城

本節では、本書関連調査の報告掲載の高橋明氏と高橋充氏の論考と重複するが、文献にみる築城から廃城までのあらましを簡単にまとめておく。

1 築城

柏木城は、『異本塔寺長帳』・『会津旧事雑考』に天正12年（1584）の築城とみえ、後の『新編会津風土記』や『富田家年譜』でも同様の築城年とする。

「北塩原村の綱取城跡に代わる守りの拠点として天正12（1584）年に葦名氏が柏木城跡を築いた」（石田2001pp98）、とするように、柏木城について言及する先学も多くは同様であるが〔渡部1987、松岡2000など〕、高橋明氏は、同時代史料の検討においては、蘆名氏と伊達氏の間には柏木城築城に踏み切るような出来事や大塩での築城を示すような具体的な天正「12年築城説の根拠は確認できない」（高橋2007pp142）とし、「伊達氏桧原進攻の危険を察知しうるのは天正13年雪解け後のことと考える」

〔高橋2009pp33〕と述べ、当該期の蘆名氏と伊達氏の動向を史料から仔細に検討した上で築城年に関する新たな見解を示している。

後述する遺構の検討では、伊達氏系城館で天正12年頃までに採用されていた「枳形を有しない連続虎口」〔松岡2002〕が柏木城跡にもあることが指摘でき、その点からも天正12年ないし天正13年夏頃の築城について可能性が高まったといえるだろう。

2 築城者

築城者については、伊達家の正史である『貞山公治家記録』などに蘆名氏方の城であることが記載されており、古く遡って柏木城が存在することを示す文献もない。石田明夫氏が指摘するように、柏木城は伊達政宗が会津侵攻の拠点とした桧原城からの会津への進入路となる北・東側に対する防御が手厚いという点からも、会津を本拠とする蘆名氏の城であることが頷ける。

佐竹氏との関係では「天正15年（1587）以後の蘆名氏は佐竹義重の次男の義広が当主であるが、佐伯正廣氏の研究によると、奥羽での佐竹氏の城は、白河市の搦目城や棚倉町の赤館城のように、横堀によって広い駐屯部を備えるのが特徴であり、こうした拠点の城郭から進出した境目の地域では、伝統的な領主層の城をそのまま用いて、積極的な築城の例は乏しい〔佐伯1998〕。このような佐竹氏の城館の運用方法と柏木城は対照的であり、虎口や石の使用の面でも、類似した例は現在までのところ確認できない。〔松岡2000〕と述べられている点などからも、蘆名氏築城と考えることに無理はない。

ただ『新編会津風土記』における「天正十二年葦名義廣これを築き・・・」という記事については、蘆名義広が蘆名家の家督を継ぐのは天正15年のことであり、天正12年ならば蘆名盛隆であるとすべきことを渡部新一氏〔渡部1987〕や石田明夫氏〔石田2007〕が指摘している。

その頃の会津領主の動きとしては、天正12年10月6日に会津領主である蘆名盛隆が黒川城中において弑逆されて、その後蘆名氏家臣内で伊達氏・佐竹氏を背後とする跡継ぎ問題が勃発するなか、ほどなく佐竹義重が押す亀若丸が家督となる。しかし天正14年11月には瘡瘡により3歳で急死、天正15年3月に佐竹義重の次男義広が蘆名家家督を継ぐ。

渡部氏や石田氏の、天正12年築城で「義広でなければ盛隆」という見解については、盛隆死後亀若丸の代での築城も考慮にいれておくべきであろう。ただそうであるとしても幼少の亀若丸が直接築城を指示することはありえず、その頃の蘆名家家臣団により築城が決定・実施された可能性を想定する必要がある。

蘆名義広築城とする『新編会津風土記』については、「義広」との記載が単なる誤記なのか、あるいは同年殺害された「盛隆ではない」という意識がはたらいたものとみるかは今一度検討が必要であろう。加えて、それが天正12年10月から暮れにいたる期間なのか、あるいは高橋明氏が述べるように伊達氏の会津進攻が明白となる天正13年夏のころという可能性についても、今後検討していくべき問題として残されている。

3 城番

柏木城の城番は、蘆名氏から派遣の三瓶大蔵ほかの名が上がる。この点については、本書の高橋充氏、高橋明氏論考を参照いただきたい。

4 廃城

天正17年6月5日、猪苗代からの会津口進攻を企図する伊達方と、それを食い止めようとした蘆名

方が摺上において合戦する。朝10時頃からはじまった戦いは、伊達方の圧勝に終わっている。蘆名義広の本陣を離れ、黒川に逃れ、伊達方に追われるなか、『伊達家日記』同日条によれば柏木城は6日明け方にはすでに将兵が城を離れており自落したとされる。

10日に義広は黒川城を出て、翌11日には政宗が黒川に入る。その後は柏木城に関する記述はとだえることや、伊達方領内となることで境目の城としての役割もなくなり、使用されなくなったとみられている。

第3節 絵図、縄張り図について

1 絵図

柏木城跡を描いた絵図は同時代のものは知られておらず、江戸時代以降のものが数点現存する。

- i 「大塩邑柏木森白城之図」『会津古城之図』〔図5-1〕
- ii 「耶麻郡大塩邑柏木城」『会津城堡館図』〔図5-2〕
- iii 「大塩邑柏木城之図」『耶麻郡誌』〔図5-3〕
- iv 『小沼組絵図』〔図5-4〕

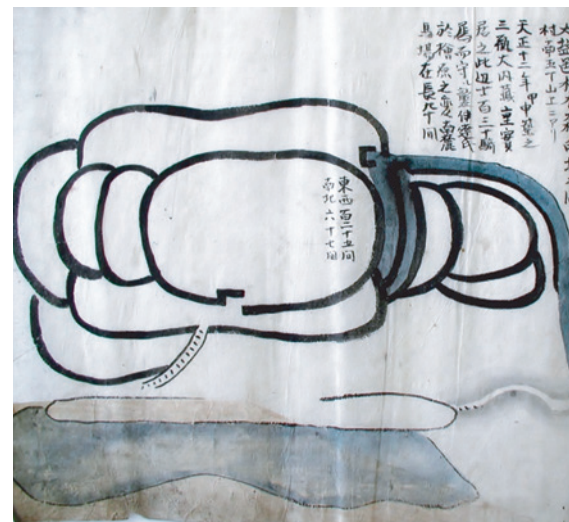


図5-1 「大塩邑柏木森白城之図」『会津古城之図』
(個人所蔵、石田明夫氏提供)

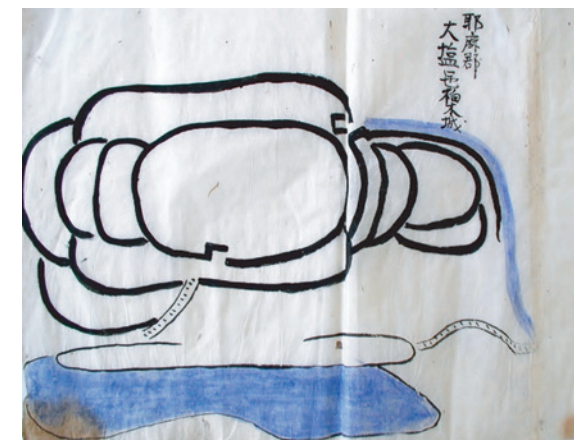


図5-2 「耶麻郡大塩邑柏木城」『会津城堡館図』
(個人所蔵、石田明夫氏提供)

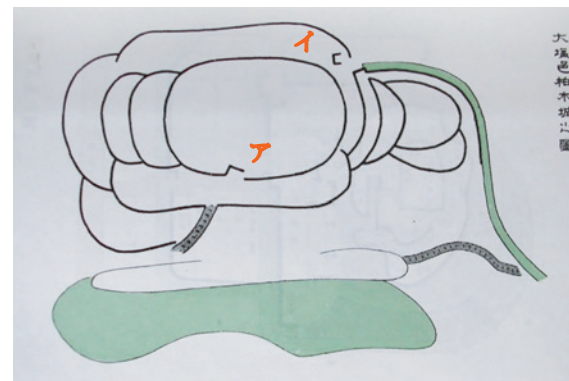


図5-3 「大塩邑柏木城之図」『耶麻郡史』
絵図にみる虎口アは現状の虎口1、虎口イは現状虎口2に
対応するとみられる。ア、イは著者記入。



図5-4 『小沼組絵図』(北塩原村蔵)
「柏木古城」と記されている。『小沼組絵図』は北塩原
村指定文化財。桧原歴史館で展示されている。

i・iiの描かれた時期は不明だが、石田明夫氏は同書記載の他城の図を検討することで、明和元年(1764)から寛政4年(1792)までに書かれたものと推定しており〔石田2007pp49〕、iiiの『耶麻郡誌』掲載の図は文政年間とされる。i・ii・iiiは曲輪や虎口、道などの表現が類似しており、元となる図は同一のものであろう。「江戸時代の軍学者が「城取り」(縄張)の練習に用いたもの」〔北垣1981〕とされる軍学絵図の一種と思われる。

現状と絵図を比較すると、絵図の上を北とみた場合、曲輪1～4、馬出、帯郭1・2とみられる曲輪の配置が類似することが窺える。

虎口については、絵図には虎口アと虎口イの2か所が描かれており、それぞれ現状の虎口1と虎口2(第3章参照)に対応するものとみられるが、虎口1が帯曲輪1への出入口であるのに対し、絵図虎口アは曲輪1への出入口として描かれ、一方虎口2も現状は曲輪1への出入口であるのに対し絵図虎口イは帯曲輪1への出入口として描かれている。このことから絵図の上を南とみて、虎口の配置状況から位置関係を合わせる見方も可能となるが、その場合柏木城跡において中心に配される最も広い主郭(曲輪1)と、その両側で、やや寸詰まり気味の曲輪2・3、細長い馬出・曲輪4という形状・配置面でのバランスが、絵図と現状で一致しなくなる。

また、水路とみられる表現が絵図虎口のイから曲輪の外側を回って下方に描かれている。現状で虎口付近から掘り込まれた空堀・水堀は確認できないが、通路状の平坦面は確認できるので、これに該当するとみることができよう。

一方、別の視点で絵図のこの部分を現状柏木城跡南側谷部(現水田)から西側を廻り北の斜面下方に流下する谷水の流れを表現したものとみれば、絵図の上を南とみた場合における現状との類似点の一つとなる。この場合、絵図の下にある青彩色された水堀表現の箇所は、柏木城跡から北に下った大塩川を表現したものである。

しかし、絵図における全体のバランスや配置の関係からは、この絵図下方の青彩色部分は、現状の柏木城跡南側の谷を当てたほうが自然であり、その場合には、谷と城中心部の間に描かれる細長い曲輪表現の「馬場跡」とされる平場も現状の曲輪6とみることもできるので、絵図は上方を北として描かれたものと理解しておきたい。

なお、絵図では曲輪6該当箇所から帯曲輪南の虎口ア(現状虎口1)付近へ向かう通路が描かれているが、現状では確認されていない。これはこの箇所が後年削平されたことが明らかな削平地2にあたることに起因していると思われ、今後周辺箇所の切岸を発掘することで通路の痕跡が把握される可能性がある。

ivの江戸時代の小沼組の村を描いた『耶麻郡小沼組絵図』には、「柏木古城」として描かれている。『耶麻郡小沼組絵図』は会津藩領内小沼組の範囲を図示したもので、現在の北塩原村大塩地区と北山地区の一部が含まれる。成立年代は不明だが、寛文年間(1661～72)に大塩村15ヶ村に入り、文化年間(1809～17)には小沼組に属していた関屋村が図中に記載されていることからおおよその年代が知れる。

2 縄張り図

A. 渡部新一 [図5-5]

北塩原村在住の渡部新一氏が1986年11月21日に踏査し作図したもので、1987年に刊行された『北塩原村の城館柵』に掲載されている。柏木城跡は、「大塩集落の南方300m独立丘陵を利用した中世の山城で、大塩全体を一望にでき、東方は旧米澤街道の萱峠、西方は綱取城を指呼の間に見える自然の要

衝地にある」と述べ、図には「本丸、二の丸、腰郭、西郭、三の丸、馬場跡」などが描かれている。大手口は南の虎口(本書虎口1)と理解している。『新編会津風土記』・『耶麻郡誌』における天正12年蘆名義廣築城とする記載については、天正12年10月の蘆名盛隆没、その後その遺児亀王丸が跡を継ぎ、天正14年11月に3歳で病死、その後を受けて佐竹義廣が天正15年3月に蘆名氏を継いだことを述べ、「大塩柏木城は天正12年蘆名盛隆により築城さる」とするべきと指摘している。またほかに、城番三瓶大蔵に関する一文もあわせて掲載している。

B. 佐々木修 [図5-6]

福島県教育委員会発行の『福島県の中世城館跡』に掲載された。内容的には渡部新一氏縄張り図〔渡部1987〕に基づき、柏木城跡の概要について述べている。図は渡部新一原図と付記されるが渡部1987掲載の図とは若干異なっており、「本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰郭、大手口、馬場」の他に、南側に空堀の表現が付加されている。

C. 松岡 進 [図5-7]

松岡2000、松岡2004a、松岡2004bなどに掲載の図面である。1985年に松岡進氏が作成したもの。「柏木城・中心部」として本書第3-1図に示す範囲が概ね図示される。その特徴を「中心部を東西に分割する堀切のみが大規模で、他は背後を含め遮断するための堀を設けていない。虎口はこの堀切に近接して西の主郭側に枡形、対岸に丸馬出があり、後者は唯一の開口部を食違い虎口にした嚴重なものである。また主郭南方には複雑な折れを伴う枡形が見られる。二つの枡形がいずれも石積みで固められているのも特徴的である。」とした。

D. 石田明夫

石田1999、石田2000、石田2007などに掲載の図面である(本書p54・55)。石田明夫氏が作成したもので柏木城中心部および、「東曲輪群、西曲輪群、北曲輪群」を含め東西約1.1km、南北約500mという広大な範囲を城域としている。本書で述べる柏木城跡中心部を「主郭」とし、東は馬出・曲輪4と北と西は帯曲輪、南は曲輪6及び水堀跡までをその範囲としている〔石田1999pp126〕。遺構については土塁や石積について現況観察に基づき分類を行い、「石堅め土塁、石張り土塁」や「石積石垣A類、石積石垣B類」として、城内の遺構を詳しく説明した。大塩集落側にある北曲輪群に大手口、そこから多くの屈折のある大手道を経て主郭の虎口2に入る経路を大手道とし、渡部新一氏が主郭南側の虎口(虎口1)に想定した大手口を搦手口とした。

E. 長島雄一

2007年に刊行された『北塩原村史資料編』に掲載されている。石田1999・2001をもとに柏木城跡を概観したもの。

F. 鈴木 啓

第1回全国城サミット資料集で、発表資料とされた。石田明夫氏作成図をもとに加筆したもの。主郭をめぐる帯曲輪、腰曲輪についてと、曲輪1区画Aの東出入り口と西の出入口は平入り虎口、馬出の南側出入口は食違い虎口であるとの指摘がある。

以上、主要な絵図や先学諸氏による縄張り図とそれを基にした柏木城跡に関する見解を概観した。柏木城跡中心部の曲輪の配置については、主郭(曲輪1)とその周囲の曲輪2・3・4、馬出、帯曲輪、腰郭、曲輪6などについて、遺構の検討を行った先学の認識はほぼ似通ったものとなっている。近世城郭で多用される本丸、二の丸などの用語を使用する例があるものの、中心部の曲輪配置については概ね共通理解が得られているものとみてよいだろう。また、上記範囲については柏木城跡「中心

検討されてきている。

福島県を含む東北南部では石田明夫氏が柏木城跡や向羽黒山城跡を通して石積みのある戦国期城郭の知見を積み重ねるとともに、郡山市木村館跡の発掘調査では天正期の石積みされた虎口が発掘調査され、その構造や系譜について指摘がおこなわれている^(註2)。

柏木城跡の石積みについては石田明夫氏が仔細に観察・検討し報告されているので、ここで石田氏の研究を振り返ってみよう。石田氏の石積み、石垣等の分類は以下のとおりとなっている〔石田2001〕。「Ⅰ類石列 石を横に一列に組んだもので、施設の区画に使用される。

Ⅱ類石積 石を積上げて組んだもので裏込め石は無く、狭い範囲に限定されるもの

Ⅲ類石塁 石だけで土塁と同じように積上げたもの。

Ⅳ類石積石垣 表面は石垣と変わらないが、裏込め石が無い。垂直に近く積上げる。

Ⅴ類石垣 裏込め石がある。野面積、布積、切込みハギ、打込みハギ、算木積などがある。」

これは城郭における石（礫）の使用のされ方を説明したもので、それらに関し、石の積み方に違いがあるとして、「構造上石が使用される組み方には、a類、横使用で奥が短いもの。b類、奥が短いものと長いものとが混在するもの。c類、縦使用で奥が長いものがある。初期段階はa類が主であり、柏木城跡などの天正年間の石積石垣はa類である。慶長5年（1600）の神指城跡では、b類へと変化し、その後、仙名城跡のⅡ期石垣のようにc類へと変化する。」と東北地方南部での事例をあげてその変化を説明しつつ、柏木城跡の石積みについても述べている。

そして柏木城跡に見られるような「その石垣は、裏込め石の無い石積石垣〔石田1999〕と呼ぶもので、東北地方南部を中心に・・・（中略）・・・約40ヶ所存在している」^(註3)と述べ、「城館跡の構造変化は、長檜の登場により土塁が高く、堀幅も広くなり、鉄砲の登場により石積石垣が登場、虎口が複雑化する」〔石田2001〕、また、「武将によって石積石垣を取り入れる時期が異なり、関東の武将北条氏と葦名氏は、天正10年頃に導入します。伊達氏は、葦名氏より遅く天正12年より後で、上杉景勝や佐竹義宣は、文禄・慶長の役まで石垣の技術を導入しませんでした。」「柏木城では、石垣のように見えるものすべてが石積石垣で、この城の特徴といえます」〔石田2007pp42〕として、石積みのある城館の分布状況や石積み出現の歴史的な背景、戦国大名ごとの石積みの採用時期についても言及した。

松岡進氏も「柏木城で今ひとつ注意を引くのは石積みの使用である。副郭の枳形内に見られるほか、南側の城外に開く枳形に、細かな折れをもつ石積みが使用されているのが今もよく残っている。虎口部分を意識して石を用いたことが明瞭である。石田明夫氏によると同じ北塩原村の綱取城や猪苗代町の弦峯城でも石を使用して虎口がつくられており、・・・」〔松岡2000〕、「この地域全体としても、近世城郭の石垣とは違うが石の積まれている例が多い」〔松岡2004a〕とする。

柏木城跡の石積みについては「この地では天正18年以後の改修が考えられないうえ、小振りの石材を垂直的に積み上げた技術は織豊系との相違が明確で、蘆名の築城技術の頂点と評価してよい。」「松岡2004c〕と述べている。

以上、柏木城跡については石積みが特徴的であることは明らかであり、加えて虎口をはじめ土塁、石塁や切岸などに多彩に使用された石積みが多くのある場所で遺存していることも、天正後半期に築城から廃絶までが比定される城郭としては県内でも稀な例であると指摘しておくことができよう[図5-8]。

上記した石田氏による石積みの系譜論や戦国大名による導入時期に関する指摘では、地域の自立的な発展による導入とも、あるいは他大名など他地域からの技術導入によるものとも受け取れるが、それらを当地で把握するにはまだ多くの作業が必要とされる。城内のどの場所でもどのような積み方がなされているかという点のさらなる確認や、使用石材、工具痕の有無などをより詳しく見つつ、会津、

および東北南部そして関東甲信地方など、周辺諸城と比較をすることが必要となろう。それを可能とする基礎的な情報が、柏木城跡には多く残されているとみることができよう。

2 虎口

柏木城跡中心部における出入り口は、主なものとして

・主郭（曲輪1）区画A東側出入口（虎口A-1）・・・平入り虎口

・主郭西出入口（虎口A-2）・・・・・・・・・・・・平入り虎口

・主郭北東出入口（虎口2）・・・・・・・・・・・・枳形虎口

・曲輪3西出入口（虎口3）・・・・・・・・・・・・食い違い虎口

・帯曲輪1南出入口（虎口1）・・・・・・・・・・・・枳形虎口

・帯曲輪1北通路内の虎口2手前（虎口O1-1）・・・連続虎口（枳形なし）

・馬出南側出入口（虎口U1）・・・・・・・・・・・・食い違い虎口

・曲輪4南西出入口（虎口4-1）・・・・・・・・・・・・食い違い虎口

などが確認される[図5-8]。主郭内やその付近での出入り口に関しては平入りとし、その他曲輪への出入口に関しては食い違い虎口や枳形虎口を併用していると判断される。

枳形虎口である虎口1・2に関しては、虎口1は柏木城跡中心部をほぼ周回する帯曲輪1への出入り口であり、外部からの入口正面に大平石^(註4)を置き、ほかの壁面でも石積みを伴うこと、そして虎口を入ったのちは帯曲輪1南通路とした幅の広い直線通路が続くことから柏木城内でも重要な出入り口であり^(註5)、それらを經由しての虎口2も主郭（曲輪1）への出入り口であることを踏まえれば、城内で最も重要な出入り口であると理解されよう。

そうした重要な出入り口で枳形虎口を採用する点については、松岡氏が伊達氏系の戦国期城館を検討するなかで述べた「伊達氏系城館には、後北条氏系や織豊系城郭に顕著な、戦闘空間としての曲輪を連ねて防御力を高めるという発想が基本的に希薄である。軍事的に発達した虎口のほとんどが主郭ないし中心部かまたは大手の虎口であるのも、この事情と照応している。」「松岡2002pp172〕という指摘を想起させる。そしてこの指摘は、伊達氏系の城館に限らず蘆名氏の城である柏木城でもあてはまり、後に松岡氏が、東北南部戦国城館の地域的な特質として述べるように「導入系の技術においては、馬出や食い違い虎口、横矢がかりの事例が地域を越えて点在するのが著しい特徴」であり「定型の枳形を援用」〔松岡2004〕する傾向が強いと把握される特徴を具備しているものと理解できよう。

一方、石田氏は、「北東部分に一部石積みされた内枳形の虎口2がある。」、帯曲輪1の「南側には石積石垣B類の内枳形の虎口1がある。」「石田1999〕とするほかに、④曲輪3西出入口は「西側に石積石垣A類の内枳形の虎口3がある。」、⑦は「石積石垣B類で内枳形を伴う丸馬出で防御されている。」、曲輪5には「西から延びる農道がぶつかる部分に石積石垣A類があり、内枳形虎口があったと推定される。」「石田1999〕と述べ、各虎口を積極的に枳形虎口とみて柏木城跡中心部での枳形多用を説く。ただ石積みの度合いや広さなど虎口1・2と比べると作りが簡素なのは明らかであり、枳形虎口の類型化を含め再度検討をおこなう余地があるのではなかろうか。

もうひとつ注目されるのは、虎口2付近で帯曲輪1北通路内にある多数の屈折を強いる坂虎口（虎口O1-1）である[図5-9]。こうした形状の虎口は連続虎口と呼ばれ、「伊達郡の山間部にある境目の主城」である福島県伊達郡川俣町の河股城跡を例として[図5-10]、「主郭南側の虎口は緩い傾斜を三度折り返して登っていく形態で、枳形をもたない連続虎口の一事例と考えられる」〔松岡2002〕とされ、これも伊達氏系城館の特徴の一つとされている。

松岡氏は城館縄張り図や関連する文献の検討から、伊達氏系城館の虎口は、Ⅰ期（天正初年以前）2折0区画、Ⅱ期（天正12年まで）食違い虎口+連続虎口（枡形なし）、Ⅲ期（天正13年以後）連続虎口（枡形・馬出含む）+2折0区画およびそれに準じるものという三段階によって把握されるとし、「伊具郡の伊達領国化天正12年という比較的早い時期に金山城などの直轄支城化によって一段落した」頃、「この段階での最新鋭の虎口形態は、明確な枡形を含まない④（連続虎口）だったのである」として、虎口の時間的な変遷も述べた。

天正12年に家督を継いだ伊達政宗は、天正13年以降松原城をはじめ多数の城を築く。それとあわせ伊達氏系城館では最新鋭の虎口形態が枡形をもたない連続虎口から枡形をもつ連続虎口へ変化するという指摘を踏まえるならば、築城者が蘆名氏であるとしても、築城年がまさにこの天正12年から13年とされる柏木城においても枡形をもたない連続虎口が採用されているのは年代的には整合していると思われる。

現地を見れば、柏木城の連続虎口01-1は、帯曲輪西からの幅のある長い通路が続いた後の主郭（虎口2）に入る直前に位置している。したがって大勢による容易な虎口2への出入りを防御すべく計4回の屈折を強いる虎口としたと思われ、熟考された配置であるように思われる。やはり築城時に築かれたものとみるのが自然であろう。

こうした連続虎口に類するものについて、石田明夫氏は柏木城中心部北側の城への登り口部分で虎口に複雑な曲折が見られることを指摘しており^(註6)、今後蘆名氏のほかの城館についても精査が必要となってこよう。

柏木城跡については虎口1・2をはじめ石積みが崩れかかっている箇所が多く、現況の確認や、当時の状況の復元、形態の比較検討のためにも発掘調査による記録と検討が求められる。

3 馬出

馬出の特徴は、村田修三氏による言をひけば「城門の前に設けられた小さな郭の一種で、敵の攻撃から虎口を守り、城兵の出入りを確保するための施設。堀を越えて外に張り出し、前方にも堀を回して囲むので、一見、堀中の島のように見える。・・・馬出の前・左・右の三面には土居を築いて虎口への透視を妨げる。・・・急峻な山城では、馬出の前後ともに空堀を設けることができないので、背面は上段から下降する壁面でもって堀に代える。・・・逆に前面を急な下降斜面のままとし、背面に空堀土橋を設ける形もある。・・・」〔村田1981〕と説明されている。

柏木城の馬出は背後に堀切1があり、前面に弧状の土塁と空堀があることと、堀切1には対岸から木橋がかけられていたとみられる部分が存在する〔石田2007〕ことから、ここを出入り口とみれば馬出としての条件を備えている。この馬出については、松岡氏が「馬出について興味深いのは、外に対する開口部が一つしかなく、しかもその内側に小さな土塁が張り出して、食違い虎口になっていることである。」「松岡2000）、また「食違い虎口をもつ丸馬出は特異なもので、虎口を中心として石積み



図5-9 河股城跡の連続虎口 [高橋ほか2002]を引用・改変

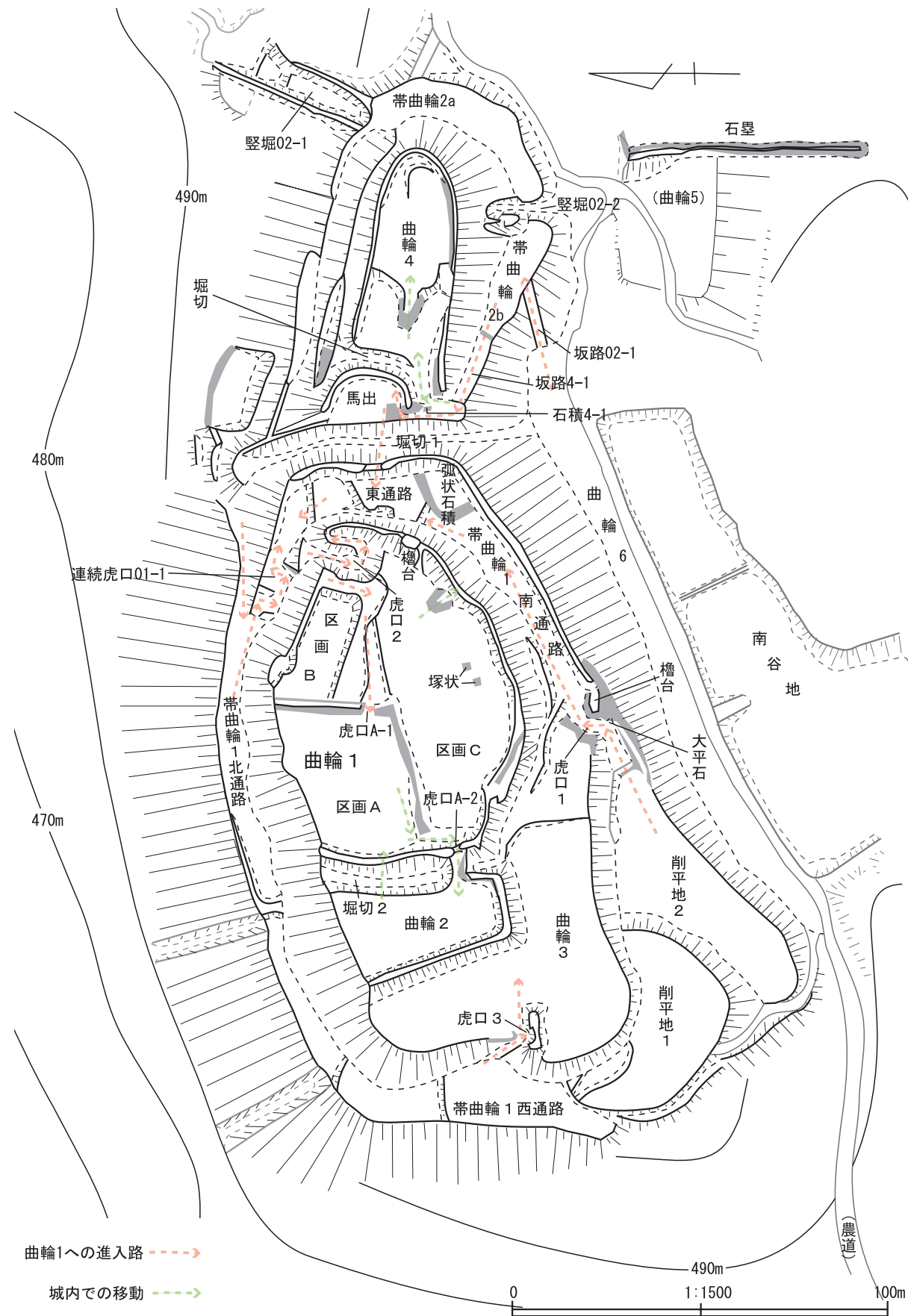


図5-8 柏木城跡中心部曲輪1への進入路 (石田明夫原図を改変)

を多用している点も注目される」〔松岡2004c〕と述べるように、出入口は南側の1箇所とみられ、北側は堀切1東土塁の上に出てしまう。また前面の土塁も低いものであり、出撃に当たっての出入りがこれにより確保されるとは言いがたい側面を持つ。加えて、この馬出は前面が城外ではなく曲輪4であり、しかも曲輪4のほうが馬出の平場よりも高くなっている点も注意が必要である。

これについては虎口U1-1の造作も含め「馬出の前面の空堀が小規模なのに対し、背後の堀切は強い遮断を実現しており、その限りではこの馬出は橋頭堡というにふさわしい攻撃的な立地を示すが、構造自体は出撃性を犠牲にして動線を複雑化し、防御を固める性格の強いものといえる。」〔松岡2000〕という評価が示すように、馬出のもつ攻撃的な側面はうかがいにくいものと理解できるが、逆に言えば前面が曲輪であるから土塁も低く、空堀も浅いということなのかもしれない。むしろ曲輪4についてみると、周囲を土塁で囲み、外側を高い切岸で画している点で、前記した村田氏の馬出の説明にある「前面を急な下降斜面のままとし、背面に空堀土橋を設ける形もある。」という条件に近い。出入口が南側一方（虎口4-1）であるものの、馬出に類するものとみることができるのではないだろうか。

馬出と曲輪4への進入路は帯曲輪2bからの坂路であり、こちらへは曲輪4土塁からの防御が可能である。また東方向外部からの攻撃に対しては高さのある切岸の上から見渡せることなど踏まえると、東側外部からの進入に対する防御の中心的な機能を曲輪4が担っていたことがうかがわれる。また、長く東に伸ばされる曲輪4は、竪堀1と竪堀2そして長く南北に伸びる石塁で構成される防衛ラインよりも東に張り出しており、橋頭堡と呼ぶにふさわしいと思われる。

馬出は曲輪4内まで敵兵が上がってきた際に機能するとみられる。また、そこでの防御に際してはより高さのある帯曲輪1東土塁や主郭（曲輪1）東土塁からの支援も期待できる位置関係といえる^{〔註7〕}。

4 弧状石積み

柏木城跡には、帯曲輪1の南東に、石塁、石積みと土塁によって区画された施設がある。この区画については、渡部新一氏が「食料庫らしき石積の基礎・・・」か、とその存在を指摘し〔渡部1987〕、石田明夫氏も「南東部分には、石塁で区画された部分があり、鉄砲等に使用した弾薬を保管した倉があったと考えられます。」〔石田2007〕と述べるなどその性格についても諸説ある。発掘調査の行われていない現状では如何とも言いがたいが、幅の広い直線的な通路である帯曲輪1南通路の突き当たりであることから、馬屋などがあった可能性も視野に入れるとともに、石積みの技術的な特徴を把握することに留意して今後発掘調査等をおこなうべきであろう^{〔註8〕}。

第5節 柏木城跡中心部の構造について

柏木城跡中心部については、主郭（曲輪1）を中心とした副郭及び帯曲輪1と、東側、つまり桧原方面からの伊達方の進入に対する防御の意識を強く感じさせる馬出・曲輪4・竪堀・石塁からなる部分があり、両者は堀切1によって分けられている。

主郭（曲輪1）は北側以外を土塁で囲みつつ、土塁上への坂路や櫓台も設けられ、曲輪内での守備が容易となる工夫がされている。曲輪2との間には空堀があり、土橋がかかる。すぐ近くには木橋もかけられていた可能性もあり、これも曲輪内での移動を容易とすることを企図したものと評価できよう。曲輪3は土塁による防御はないが、西にある虎口3は通路に切岸と土塁が配されており、帯曲輪

1西通路からの進入は容易ではない。

主郭（曲輪1）への出入口は虎口2と思われ、石積みを伴う枡形虎口となる。この虎口2へのルートは帯曲輪1であり、西からと東からの2方向から進入が可能であるが、西からの侵入は連続虎口でさえぎられ、もう一方は、石積みの枡形虎口である虎口1を経て幅広の通路（帯曲輪1南通路と東通路）を通る。帯曲輪1南通路は主郭の南と東の土塁から見下ろされ、防御に易く攻めるに難となっている。

中心部東側では、曲輪4が高さのある切岸や土塁が圍繞する平場を形成し、その北側に竪堀、南側に竪堀と石塁を配し、柏木城と南側の山斜面との間にある緩斜面にも遮断線を形成している。

曲輪4とともに設けられた馬出・堀切1については、馬出の虎口が石積みのある食違い虎口で堅牢なものであり、また、馬出内部に関しても堀切1対岸からの応射が可能であることから、東側から帯曲輪1で圍繞された主郭側への進入を容易でないものになっている。

石塁は柏木城寄りの北側が損壊しているが、城近くまで伸びており、損壊している部分で虎口が築かれていた可能性が指摘されている^{〔註9〕}。交差する方向に現在の農道が通るので、この通路が当時も虎口を経て外部に接続するものであったかという点や、石塁についても、石積みとともに柵などの使用の有無について確認が必要となろう。

柏木城中心部南側の、西から東に幅広く通路状に延びる曲輪6は、高さがある切岸の上にある帯曲輪1に守られつつ、東側の曲輪4や石塁方面へ大量かつ迅速に守勢人員を送り込むことが出来る。また、主郭・帯曲輪1方向へも、坂路を上り虎口1を経ることで虎口2近くまでスムーズに到着できる。曲輪6は『新編会津風土記』に記される「馬場」と比定されることが多いが、蘆名氏本拠地である会津盆地方面に直結し、大軍の集結を可能とする大久保口の通路として、まずはその役割が期待されたものではなかるうか。

こうした柏木城跡の特徴は、松岡進氏が「中心部を東西に分割する堀切のみが大規模で、他は背後を含め遮断するための堀を設けていない。虎口はこの堀切に近接して西の主郭側に枡形、対岸に丸馬出があり、後者は唯一の開口部を食違い虎口にした嚴重なものである。また主郭南方には複雑な折れを伴う枡形が見られる。二つの枡形がいずれも石積みで固められているのも特徴的である。」〔松岡2004a〕と端的にまとめている。

第6節 他地域との関連について

天正4年（1568）、織田信長が築城した安土城は、高石垣の導入で戦国期城郭にあらたな画期を加えた。また先にみたとおり天正期後半には東国でも城郭内で石積みを用いる事例が増える。一方松岡氏による伊達氏系城郭の検討で天正13年以降枡形を伴う連続虎口が特徴的となる中で「織豊系城郭で外枡形や馬出の形態が完成するのとほとんど同時に、伊達氏系城館に類似の定型化した技術が採用されている点にも注意が必要である。」〔松岡2002〕とされるように、東北南部地域でも大きな変化が認められる。両地域の変化がなんらかの影響下にあるものなのか、あるいはそれぞれの事情により地域内での系譜がたどれるものなのかは今後とも検討が必要であるものの、柏木城でも、石積みや大平石、枡形虎口など天正期に他地域の城郭でも導入が顕著となったとみられる技術が使われている。こうしたいわば天正期の新技術について石田明夫氏は「葦名方は石積の使用や平場の大型化など関東の技法をいち早く採用している。」〔石田1999pp137〕、「柏木城跡は、典型的な守り城として、天正12年（1584）に、葦名氏が関東、中部、関西の最新技術を導入し、総力で築いた東北地方を代表する若

松城跡以前における石垣の城である。」〔石田2001pp85〕と評価した。

そして「葦名氏は、信州の守護であった小笠原一族を、武田氏が滅び再興するまで保護していることや、武田家家臣の馬場一族を引き取ったこと、天正九年（1581）には、安土城の織田信長に使者を送っていることから、各地から様々な築城技術を導入したと考えられる。戦国期の東北の城館跡のなかで、天正十二年（1584）に築城した柏木城跡と、葦名氏・伊達氏の改修と考えられる向羽黒山城跡はその代表といえる城郭である。」〔石田2001pp104〕、「この城に丸馬出の遺構があるということは、葦名氏が武田氏系の影響を受けたということを示しています。」「天正10年に武田勝頼が秀吉に滅ぼされると・・・葦名氏も馬場一族をはじめ家臣を引き取っています。このことにより、甲斐や信濃で発達した丸馬出の技法が会津にもたらされた可能性があります。」〔石田・佐藤2007pp41〕として、その歴史的な背景についても説明を試みている。

柏木城の馬出については、その土塁の形状が弧状というよりもやや隅を意識した形状であることもあって、本稿では「馬出」とのみ記載するにとどまったが、東北地方における馬出については、「十五世紀に馬出の出現を見たのは全国的には最先進とさえいえる」、「馬出の分布の広さも、曲輪から堀を隔てた対岸をさらに堀で画すというその形態が、堀を主体とした陸奥の城館の基本形態から隔たりの小さいものだったからだろう」〔松岡2004a〕との言もあり、武田氏や北条氏を代表とする地域の馬出の導入という視点で解決される事柄なのか、今後とも慎重な検討が必要となろう。「丸馬出」の特徴的な技法を武田氏という戦国大名が多用していたことは事実としても、それを独占していたというわけではない点も問題を複雑にしている。大名領域を越えた地域での築城技術の使用について思慮すべきことは多い^{〔註10〕}。

第7節 柏木城跡の範囲

本書で述べてきた柏木城跡中心部の範囲の外側にも、平場や石積みは広がる。先に述べたとおり中心部の外側については、今後現地調査や検討を行い石田氏の図面や指摘事項について確認、精査を行っていく段階にあるが、ここで現時点における石田明夫氏の見解を確認しておこう。

・「遺構は大きく主郭部分と、それを取り巻くいくつかの曲輪群、北に面して造られた外構、南側の堀跡に分けられるもので、伊達氏の侵攻を防ぐことを主として葦名氏が築いた城郭であることがうなずける。」〔石田1999pp126〕

・「伊達政宗の会津進攻を察知し、北塩原村の綱取城跡に代わる守りの拠点として天正12年（1584）に葦名氏が・・・柏木城跡を築いた。この城跡は、東西約1.1km、南北約500m、面積約50haという規模の大きなものである。」〔石田2001pp98〕

・「城に入るには、大手口の他にも北に面し四箇所の虎口がありました。門は、敵の北側に面して石積石垣を使用した高度な建築技術によって造られ、その内側は、門から中心部へ折れ曲がりを多用した登城ルートが待ち構え、その複雑さ、嚴重さをわざと見えるようにしています。」〔石田・佐藤2007〕

・「城は、大規模な外構で守るだけでなく、北の大塩川と東の蟹沢川を最終的な外郭となるよう工夫して造られ、内側には街道沿いに宿屋や塩の生産をしていた町屋を建つ城下町が造られていました。」〔石田・佐藤2007pp36〕

・「大塩川に架かる大塩橋の南には、高さ10m以上の断崖の下に街道沿いに配置された城下町がありました。」〔石田・佐藤2007pp40〕

などが主として述べられており、広大な城域をはじめ城下町の存在までもが示唆されている。

柏木城跡中心部の検討からは、帯曲輪1や曲輪3などについては東側・南側については土塁もあり、防御についての意識が強く感じられるのに対し、北側・西側に土塁はなく、急斜面とその斜面の下側にある平場群（石田氏の言う北曲輪群・西曲輪群）が広がっている。

北側は、急斜面があるとはいえ主郭や帯曲輪1の防御が手薄い状況であることは明らかであり、北側・西側の平場群とも一体的となって城郭を構成していた可能性は高く、石田氏の指摘は卓見といえよう。

また、このような斜面で連続する平場群については、「考古学的には、河股城（福島県川俣町）の発掘調査で注目された段状遺構（コの字状小平場）が、臨時的な居住(駐屯)の多様な展開を示唆する。」〔松岡2004a〕と指摘される事例があり、類例として比較を進める必要があるろう。

一方石田氏の指摘する「中曲輪群」「東曲輪群」については、本書でも指摘した馬出・曲輪4・堅堀・大石塁などからなる防御ラインの外側に展開するものである。「中曲輪群」は「北曲輪群」と同様に斜面で雛段状に連続する平場群であることが特徴で、「東曲輪群」も含めた防御施設やその配置などから、どこまでが柏木城中心部と一体的に築かれたものなのか、検討していく必要がある。あまりに広がりすぎた城域は、守備に要する人員も多数が必要となり、駐屯地の可能性があるにせよ、防御施設の工夫で補える範囲にも限度があるはずである。

第8節 性 格

柏木城跡は、これまでに見てきたように、伊達氏に対する蘆名方の領地「境目の城」である。石田氏は「この城跡は、天正12年に葦名氏によって綱取城に代わり築かれたもので、伊達政宗に対抗するための防衛拠点であり、当時の石垣や柵形など関東地方の技法を取入れ、先端技術を駆使して築かれた境目の城である。天正13年5月には伊達政宗が新たに檜原城跡を築き、会津侵攻の前線基地とした。そのため、それ以後ますます柏木城の重要性が増し、天正17年（1589）の摺上原の戦いまで改修は続いたものと見られる。」〔石田1999〕、「守りの城跡 敵の進攻を喰い止めるための城跡で、敵に面した部分は嚴重に作られている。また退却ルートも確保されている。・・・柏木城跡がそうである。」〔石田2001 pp87〕などと述べ、松岡氏も「この城は、天正12年（1584）に伊達政宗の会津進攻に備えて蘆名側の境目の城として構築された。」〔松岡2000〕とする。

伊達氏の領する米沢から会津への最短となる進入路が、桧原から大塩を抜けて小沼を経て黒川へ向かうルートであり、天正13年、伊達氏が桧原に拠点を築いた後は、山間部の谷あいで桧原方面の細野や猪苗代からの磐梯山を北に迂回するルートの合流点である大塩の柏木城が、会津を守る防衛拠点であったのは、地形的にみても納得できる。大塩が抜かれ、会津盆地に攻め込まれてしまうと、会津盆地内での移動はさまざまな方向・経路から可能となり、これを守備するのは困難となる。

松岡氏が「これを攻撃したのは伊達方軍勢Bであったが、攻略以前に摺上原での蘆名主力の崩壊によって自落している。つまり、この城は、スケールの大きな城域を維持できる大兵力の運用を背景として初めて十全に機能するものであった。そして、境目防衛の拠点がこうして開城してしまった事態が、続いてほかの蘆名方拠点がほとんど自落する引き金となったのは明らかである。」「柏木城は会津蘆名方の防衛拠点の要であり、「領域」の境界を固める軍事性の強い城館。」〔松岡2004c〕^{〔註11〕}と述べるように、蘆名領国境目の城として、柏木城が落ちることがあれば会津盆地北半の守りも成り立たなくなるほどの重要な役割が与えられていたものと理解することができよう。

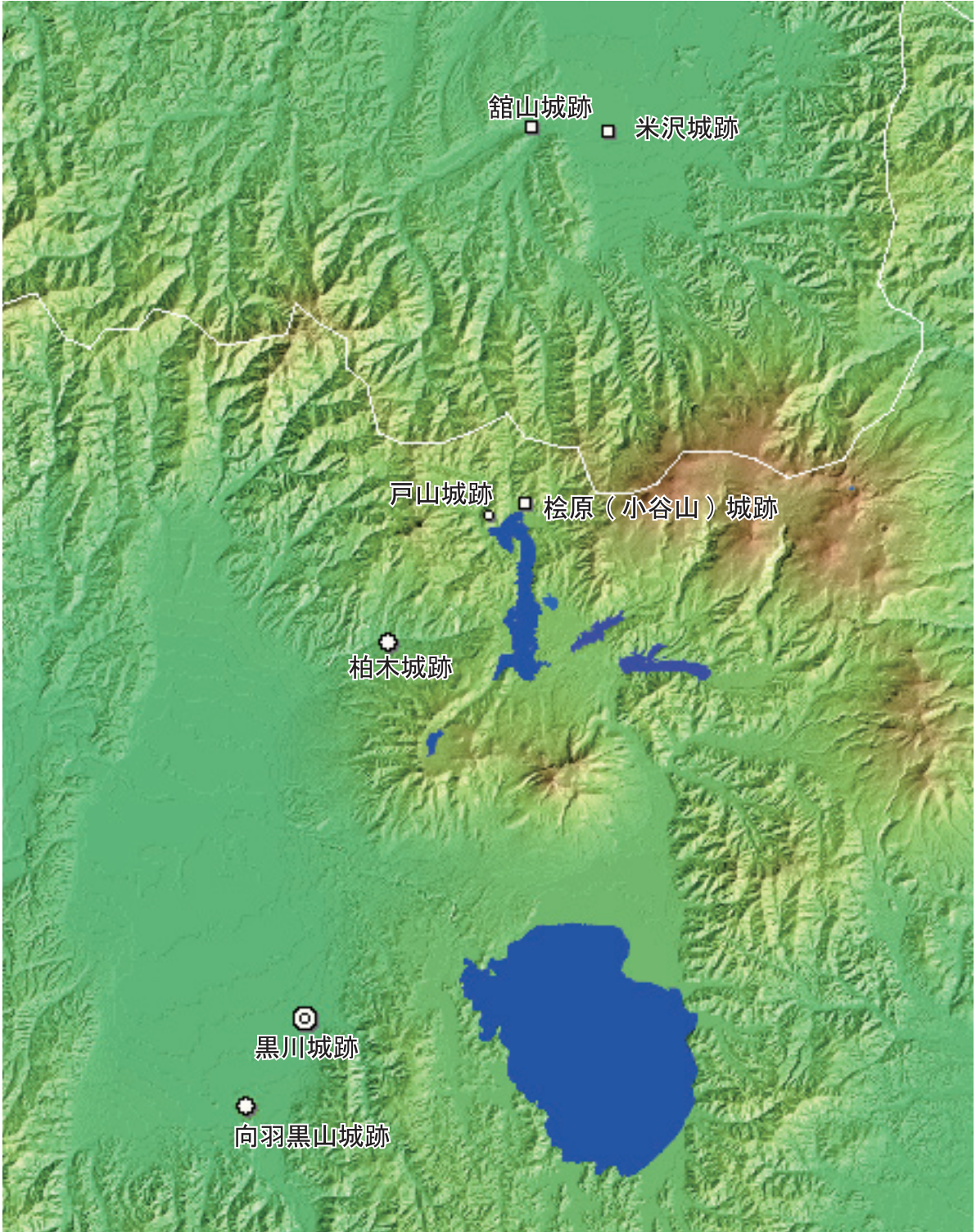


図 5-10 主要城郭位置 (KASHMIR 3D で作成)

第6章 総括

柏木城跡は、北塩原村大字大塩に位置する標高約500mの山頂を主郭として周囲に曲輪を配する天正期後半の山城である。主郭を含めた中心部の規模は東西に約300m、南北に約200mで、周囲の山麓には更に遺構が広がっている。曲輪や土塁、馬出し、堀切など、遺構が良好な状態で残り、虎口や土塁、区画施設に石積みを使用しているのが特徴である。高石垣のある若松城を嚆矢とする織豊系城郭が会津で展開する前段階の、天正期における石積みが多用された城郭である。

この城は会津の戦国大名である蘆名氏により築かれたと考えられる。『異本塔寺長帳』や寛文12年(1672)成立の『会津旧事雑考』には「柏木城」・「柏木森城」の城名がみえ、「天正12年」築城と記載される。築城期の領主は天正12年10月6日に死去した蘆名盛隆、もしくはその跡を継いだ蘆名家の遺児亀若丸であり、蘆名氏直轄の城として城代が置かれたとされ、史料には三瓶大蔵の名があがる。築城後は蘆名氏領国境の境目の城として、会津の北に接した米沢を領する戦国大名、伊達氏に対する会津の防衛拠点となった。

伊達氏は、政宗が天正12年10月20日頃に当主となるも、その年は病により動きを見せなかった。明けた天正13年4月頃から会津侵攻の動きを活発化させ、5月3日政宗自らが会津領である桧原を攻略し、その地に桧原城（小谷山城）を築城して会津侵攻の拠点とした。桧原を護っていた蘆名方は、この時、「大塩」に引いて城を堅固にして立てこもったと『政宗記』に記されているので、この時点で柏木城が蘆名方の城として存在していたことは確実であり、築城の時期も重なる可能性も指摘されている。

大塩は大塩川を主要な河川とする山間の谷あいであり、米沢から桧原をへて会津盆地北方へ入る際や猪苗代から磐梯山を北に迂回して会津へ入る際の経由地であり結節点でもある。また、大塩を下り関屋へ出るとそこは既に会津盆地の入口である。柏木城は、地形的に見ても盆地に出る直前の場所で防御に利した谷あいを望む場所にあり、蘆名氏が、領国防御の要、境目の城として築いたと考えることができる。

築城後、蘆名氏と伊達氏は、柏木城と桧原城の間でにらみ合いを続けた。『政宗記』によれば当初政宗の軍が大塩に向かい、柏木城を眼下にして桧原に引き返したという。

天正17年、摺上の戦いで蘆名義広は伊達政宗に敗れている。柏木城は主戦場となることはなく、摺上の戦いの翌日に伊達方が柏木城に入った際には城兵の姿はなく自落していた（『伊達家日記』）。伊達政宗が黒川に入り会津を領した段階で柏木城は境目の城ではなくなることから、天正17年に柏木城は廃されたとみられる。

柏木城跡中心部は、曲輪1・2・3、帯曲輪1、土塁、虎口（枳形虎口含む）、堀切、土橋などからなる主郭を中心とする曲輪群と、馬出と曲輪4、塹堀、石塁などからなる東方の防御を強く意識した曲輪群から構成される。

虎口や土塁などで使用される石積みは、天正期後半に関東甲信越地方にみられる石積みを多用した戦国期城郭のものに類似しており、当地における代表例と言える^{〔註12〕}。また枳形虎口や大平石、馬出も同じ頃のものとして時代性をよく表す。

北や西側には斜面を下った場所に連続する平場群があって城域は更に周囲に広がるとみられており、その規模も大きなものとなる。技術的には当時の最新技術が諸処に反映されており、会津の戦国大名蘆名氏の築城技術の粋が凝らされたものといえ、石積み等の天正後期における築城技術の検討や周辺

地域との比較をする上でも1つの基準とすべきものであり、本城黒川城跡や向羽黒山城跡とともに重要城郭と言える。

また、周辺の環境を含め、北塩原村内を通る米沢道（旧米沢街道）沿いには蘆名氏と伊達氏が築いた城館跡や、鉾山に関連する遺跡もよく残されており、遺跡に立てば、北塩原村域を舞台に繰り広げられた奥羽の覇権を賭けた戦いの歴史を体感することができる空間が広がっている。

柏木城跡は、地域にとって特に重要な歴史的文化財であるということができよう。

註)	
註1	石川2008では関東地方で約100ヶ所前後の城館で石積みの報告があるとされている。
註2	松本茂氏は石積みの枳形虎口のある新規木村館で城の破却を検討する中で、「新規木村館の機能時期を、天正14年10月の田村清顕死後から天正18年8月の豊臣秀吉による奥州仕置の間と考えれば、ほぼ4年である」と、その年代を比定する〔松本茂2001〕。またその石積みを伴う枳形虎口については、千田嘉博氏が「在地（伊達氏）の技術で造られた、屈折した織豊系城郭プランと評価し、天正10年代の所産とする」〔千田1992〕とし、また「在地の技法の発展を基本」とすとした〔千田1994〕。
註3	後の検討を踏まえ、石田2007では50箇所が確認されているとした。
註4	北垣聰一郎氏からご教示いただいた。大平石の語は〔北垣1981〕による。所謂「鏡石」の呼称については、戦国時代にその語を使用されていたか不明である。石田明夫氏は、虎口1「門の脇には、魔除けの大きな石「鏡石」が組まれています。」〔石田2007pp41〕とするが、「魔除け」と理解する根拠については確認できなかった。 <p>参考「大平石（身がくし石）　おおひらいし（みがくしいし）万治元年(1658)、細川氏による江戸普請では、長さ3m、横幅2.7m、控(奥行き)0.9mの伊豆石を大平石として使用した。・・・こうした例はすでに慶長年間（1596－1615）から散見できる」〔北垣1981〕</p> 「巨石　きよせき　大石を献上石として紹介した例は天正14年（1589）に豊臣秀吉の家臣蒲生氏郷が京都の方広寺大仏殿建立の際、搬入した石材は縦横それぞれ二間×四間の大石であった。自らの忠勤ぶりを、また自らの権勢を世間に顕示できる絶好の機会でもあった。」〔北垣1981〕
註5	平成25年8月現地を実検いただいた北垣聰一郎氏からご教示いただいた。その際、北垣氏からは幅の広い直線的な通路への出入り口であることや、直線的な通路は平坦であり且つ主郭南土塁からの防御が強く意識されている点などについても、柏木城の大手口・大手道を考慮する際に留意すべきであろうとのご指摘をいただいた。
註6	「城に入るには、大手口の他にも北に面し四箇所の虎口がありました。門は、敵の北側に面して石積石垣を使用した高度な建築技術によって造られ、その内側は、門から中心部へ折れ曲がりを多用した登城ルートが待ち構え、その複雑さ、嚴重さをわざと見えるようにしています。」〔石田・佐藤2007〕
註7	鈴木　啓氏からご教示いただいた。また、このような残りのよい馬出が現存しているのは珍しいとのご指摘もいただいている。
註8	北垣氏からは、区画Dを構成する東と南の土塁の傾斜角度が、つながっている帯曲輪1南土塁の傾斜角度よりもやや急である点をご指摘いただき、築城時と時間差を持ってつくられたものである可能性も含めて検討すべき旨、ご教授を得た。
註9	石田明夫氏はこの部分に、枳形虎口を想定する〔石田1999〕。
註10	齋藤慎一氏はそうした考え方を「戦国大名系城郭論」として批判する〔齋藤2003〕。
註11	松岡氏は南東北の城館を下記のように分類する〔松岡2004c〕。 <ul style="list-style-type: none">「a　「領域」の中心的な城館。黒川城、長沼城、慶徳館・猪苗代城、守山城、三春城など。本戦の場はおそらくその付近に限定される。・・・」 「b　「領域」の境界を固める軍事性の強い城館。大平城、門沢館、柏木城であるが、これらは駐屯拠点としての機能を兼備し大規模になっている。しかし常駐兵数には明白な限界があり、虎口や遮断線など嚴重な防備をはかっけていても自落と背中合わせであった。だからこそ精兵の配置は欠かせなかった。この時期特有の矛盾を強くはらんだ存在といえる。」 「c　主力群の中継拠点としての城館。・・・」 「d　「領域」全体のなかでは副次的な意義を担う城館。・・・」

会津若松城跡

大塩川

註12 「この地域で築城技術の発達した好例は、柏木城のような軍事的緊張に直接対応する城館に多く、領域中枢的な城の場合、近世初頭に大改修されて元の形状をうかがえなくなったものが多いためもあるが、類似の水準を確認できる事例が乏しい。」〔松岡2004a〕

「この地では天正18年以後の改修が考えられないうえ、小振りの石材を垂直的に積み上げた技術は織豊系との相違が明確で、蘆名の築城技術の頂点と評価してよい。」〔松岡2004c〕

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

柏木城跡について

石田 明夫

1. 城跡の位置

喜多方市から北塩原村役場を東に、大塩川溪谷沿の国道459号を裏磐梯の桧原方面へ進むと、温泉から塩が獲れたことに由来する大塩裏磐梯温泉がある。住宅と温泉宿が立ち並ぶ大塩集落の南側急斜面上にある杉林、雑木林、畑、水田に石垣を持つ柏木城がある。

大塩集落から主郭部分は、比高約110m高い位置にあり、雄国山麓の北斜面にあたる南西の大久保集落とは約30mの比高となっている。南西からすると攻め安く、北側から見ると、幅約20mで高さ 5 m以上の大塩川溪谷が城の手前にあることから、攻めにくい場所にある。

柏木城が築かれた当時、北東の萱峠から見ると、正面に東西1.1kmに渡り、高さ 5 m以上に造られた土塁と石垣が見え、城に入る門となる大手口の両側には石垣が築かれ、大きな壁となって見えていた。

城に入るには、大久保集落から下ると商工会と駐車場と村活性化センターがあり、そこは清野六郎屋敷跡と伝えられている。その東に位置する大手口との間には、米沢街道が通るように造られている。この場所は、交通の要衝でもあり、主要街道の米沢街道を抑えることにより、人の出入りと、敵の進攻を阻止する役目があったと推定される。

北側には、大規模な土塁で区画するだけでなく、北の大塩川と東の蟹沢川を最終的な外郭とするように工夫して造られてもいる。大塩川の内側に街道と宿場、山塩の生産をしていた小屋が立ち並んでいたと推定される。敵襲などがあれば、村人は、城に入り、加勢することになっていたのであろう。

2. 柏木城の築城時期

柏木城は、伊達政宗の侵攻を防ぐために、米沢街道に面して蘆名氏が築いた守りの城である。『会津旧事雑考』には「是歳（天正一二年）築 大鹽邑柏木森城屬 此邊衆士（『会津鑑』では150騎とある）於三瓶大蔵而令守於伊達氏」と書かれているが、正確に、築城年代は判明していない。

『新編会津風土記』では、蘆名義広によって天正12年に三瓶大蔵を城番とし、伊達氏に対抗し新たに築いたと書かれている。しかし、天正12年とすると蘆名義広ではなく、当時の領主は、盛隆が正しいようである。その頃蘆名氏は、後継を巡って内部混乱が続いていた。

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川

大塩川



図 10-1 柏木城跡全体図 (石田明夫原図)

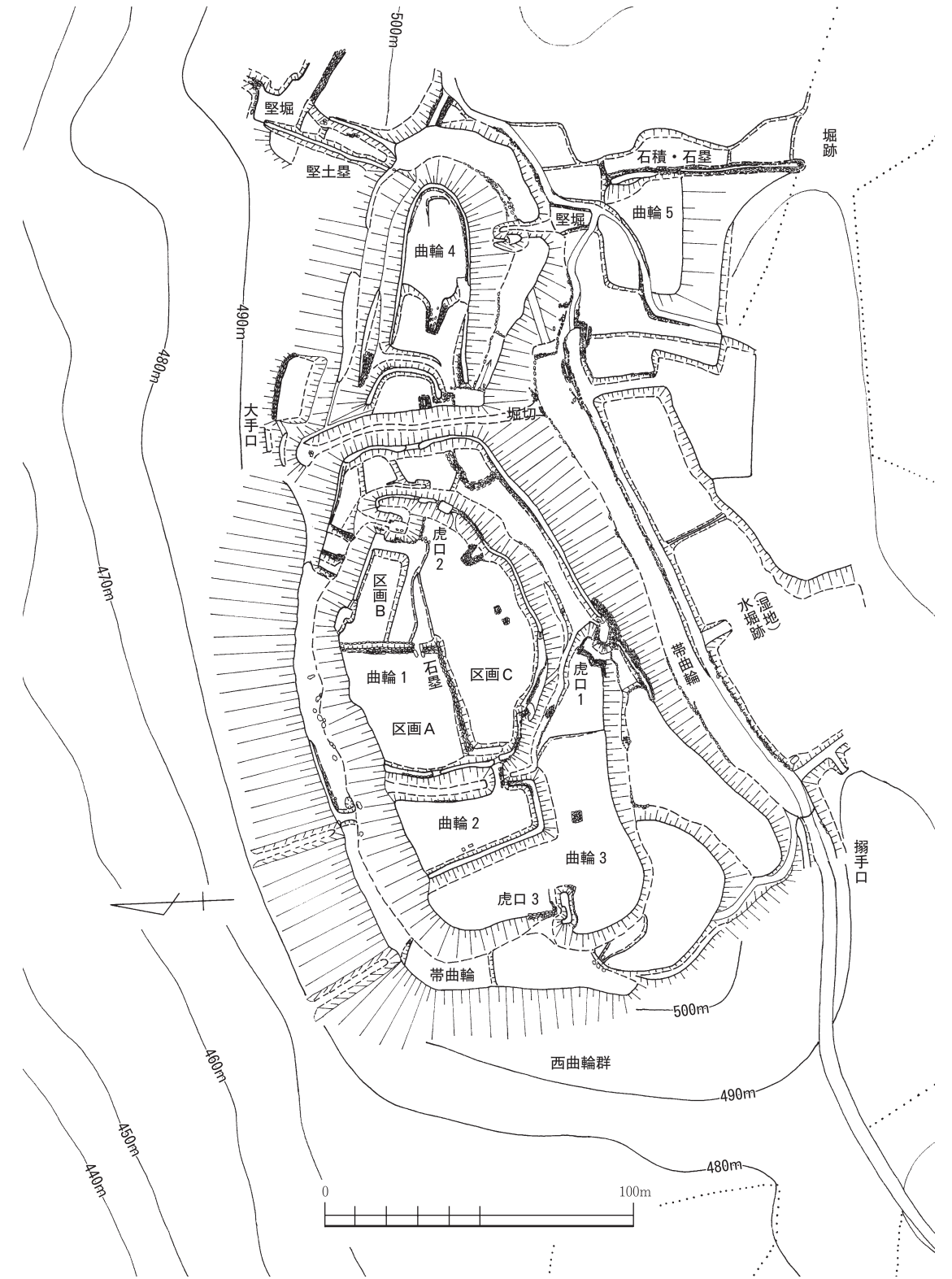


図 10-2 柏木城跡主郭

会津を支配していた蘆名氏は、黒川、現在の若松に居城の黒川城があった。その支配は強固とは言えず、天正8年(1580)6月17日、16代盛氏が死去すると、後継には盛氏の肝煎りで須賀川より人質にしていた二階堂盛隆が継いでいる。

そのころ天下統一を目指していた織田信長に対し、蘆名盛隆は、天正8年8月6日、信長の安土城

へ家臣の荒井万五郎（会津美里町上荒井）を送り、駿馬3匹と蠟燭千挺を送っている。

天正12年（1584）10月6日には、『会津四家合考』によると盛隆が、黒川城内の御殿南縁で鷹を置いて座っていたところ、背後から家臣の大庭三左衛門によって惨殺される事件が発生している。盛隆は24歳の若さで、子の亀若（王）丸は2歳と幼児であったことから、蘆名家は大混乱となる。蘆名家を継いだ亀若丸の母は、伊達晴宗の娘で、盛興・盛隆の夫人であった。天正12年（1584）盛隆が死去すると、秀吉や常陸の佐竹義宣に接近を図った蘆名氏は、政宗と対立するようになり、米沢街道の要衝であった大塩に柏木城を築城したと思われる。

3. 城跡の遺構

大手口から曲輪1（主郭）へ入るには、城の正面となる北側の大手口から入ったようだ。

米沢街道を萱峠から大塩へ下ると、その正面には、興泉寺や、東の台地上に中島氏が築いたとされる中島館が見えた。

大塩川に架かる大塩橋を渡ると、高さ10m以上の断崖の下に街道沿いに配置された大塩集落があり、大手口は、北塩原郵便局の街道南側に位置していたと思われる。

遺構はいくつかの区域に分けられていたようで、北曲輪群にある大手口は、入口が低く、両側が高く造られて門が埋まったように見える埋門形式となっていてと思われる。そこから、西側に造られた幅一間の山道をジグザクに上ると、石垣の大手門が待ち構えてと思われる。大手門の西側には、自然地形を利用した大きな土塁が造られている。大手門からジグザクに主郭へ上ろうとすると平地が連続する北曲輪群となる。そして、主郭の曲輪1に入る手前に石積みで積まれた平地の下を通り主郭の曲輪1へ到達する。

(1) 北曲輪群と大手口

北曲輪群には、城の大手口や曲輪1に入るルートがあり、いざという時に家臣団を取りまとめて留めて置く、大きな平地があった。そのため、石積みや城の飲み水を確保する水手もあった。大手虎口は、城が使用されなくなると石積みは破却されたと推定される。西側には、自然地形を利用した土塁の遺構があり、長さ約200mで高さ5mあり、土塁を石で補強して造られている。

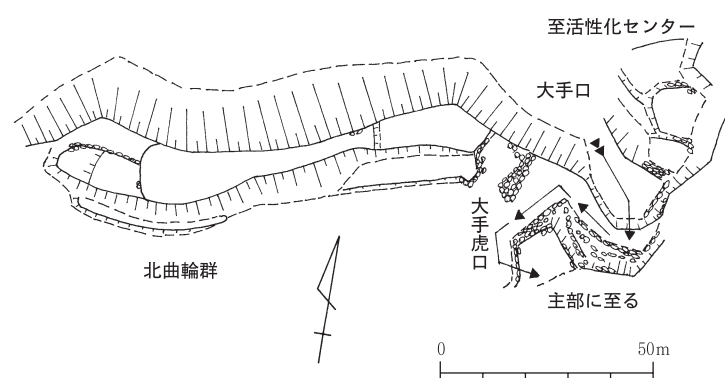


図10-3 柏木城跡北曲輪群外溝 天正12年（1584）築城

(2) 曲輪1（本丸）の遺構

主郭の中心部に入るには、明確で大きな虎口はなく、複雑に造られている。東に進むと北に面して、埋門で造られたものが大手入口と推定される。この門は、敵が侵入した場合、上から大きな石を落とし、門の内側を石や土で塞ぎ開かなくして敵の侵入を防ぎことになっていたようである。門から階段や梯子や細い通路で中に入ると曲輪1の中心部分となる。内部は平坦で、北西部分には、石塁で分けられた区画があり、東向きに門があった。内部には御殿や櫓が建てられていたと推定される。この曲輪の南は、土塁で、南東部には一間四方の櫓台もある。さらに、西と東は空掘で区画され、それぞれ

木製の橋が架けられ、いざという時は橋を落とすことになっていた。

南西部分には、裏口と推定される搦手があり、埋となっていた。また、曲輪は、帯曲輪が巡らされ、南の搦手には、石積石垣で造られた内枳形の虎口があります。門の脇には、魔よけの石「鏡石」が組まれていたようである。虎口の外側は、高さ15mの自然地形を利用した土塁となり、表面は自然石が貼られた土塁となっている。土塁は、いずれも石で堅められ、塀や柵が巡らされていた。南東部分には、石塁で区画された部分があり、何かを保管した倉があったと考えられる。また、西側には石積みの外枳虎口がある。

(3) 馬出しの遺構

曲輪1の東には、木橋と空掘で区画され、その曲輪の形はやや角張った半月形をした馬出がある。角か丸の馬出であり、その造り方は、武田信玄が多用した技法で、甲斐や信濃で発達したものとよく似ている。その遺構は、主郭を死守する役目があったと思われる。また、南側には、石垣となる内枳形の虎口がある。

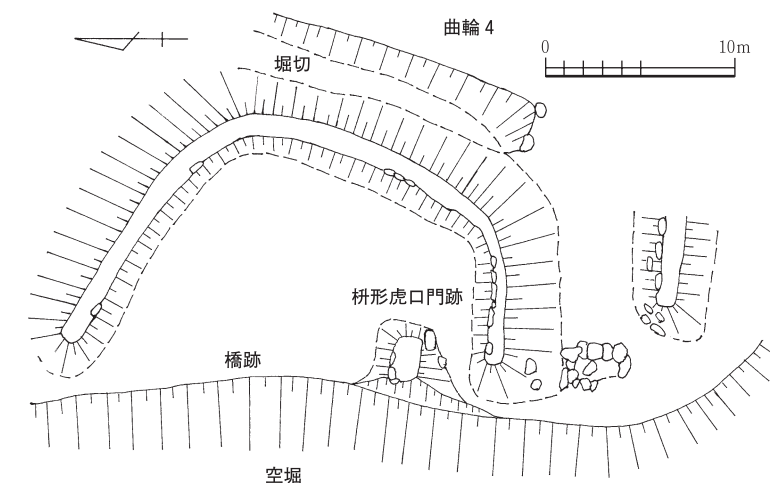


図10-4 馬出の実測図

(4) 西曲輪群と搦手口

西曲輪群は、曲輪1の西側に位置するもので、通称「ニシグルワ」と呼ばれていた。五段から六段の細長い平地があり、北曲輪群からの道が二本見られる。一部は畑となり、西側には沢を利用した堀跡がある。南東部分に、現在山道となっている所には、裏口にあたる搦手が存在したと思われる。石積みで防御され、南側の水堀の調節も兼ねていたようである。

(5) 東側の遺構

曲輪1の東には、中曲輪群がある。北側が堅堀と堅土塁で分けられ、南側は堅堀と石積み、石塁で曲輪1と厳重に分けられていた。尾根上には、3段から4段に造られた平地があり、北に面して長さ200m以上高さ約2mの石垣が連続している。石垣の下にも六段の平地群があり、その下は急斜面の崖で、攻めるにはかなり難しい。南には、自然の沢を利用した幅4mから10mの水堀が掘られている。この曲輪群の東には、石積みで守られた虎口がある。虎口の西側は、自然地形を利用した高さ5mの土塁で、南は、堀で分けられ、北に面し防御が厳重となっている。

(6) 東曲輪群

中曲輪群の東、柏木城では最も東に位置している。東曲輪群の東端には、幅10mの堀跡で分けられ、さらに外側には自然の丘陵を利用した大きな土塁があり、さらに外側には現在水田となって、堀跡で防御されている。そして、最も東側には、蟹沢川の高さ20mの深い溪谷が最終防御ラインとなっている。丘陵上は平地で構成されているが、北にと東に面し、石垣がある。北側には3箇所石積みで造られた虎口があり、最も東の虎口は、石積みは、良く残されている。

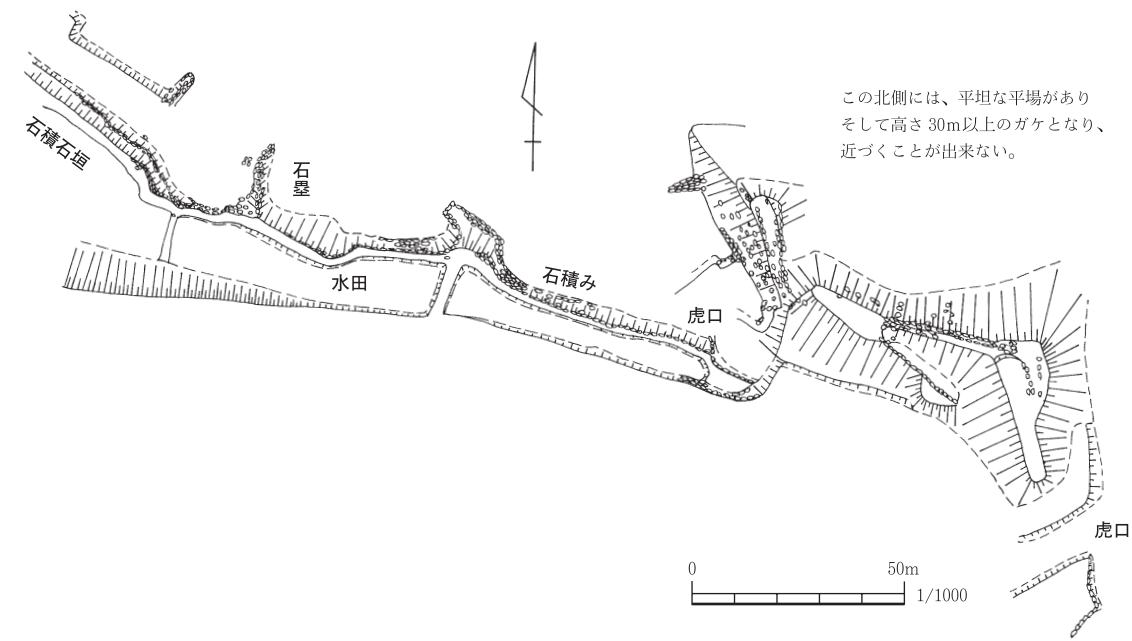


図 10-5 柏木城跡中曲輪群外構 天正 12 年 (1584) 頃築城

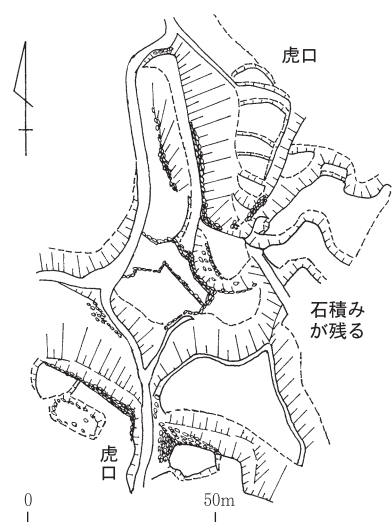


図 10-6 柏木城跡東曲輪群虎口 1
天正 12 年 (1584) 頃築城

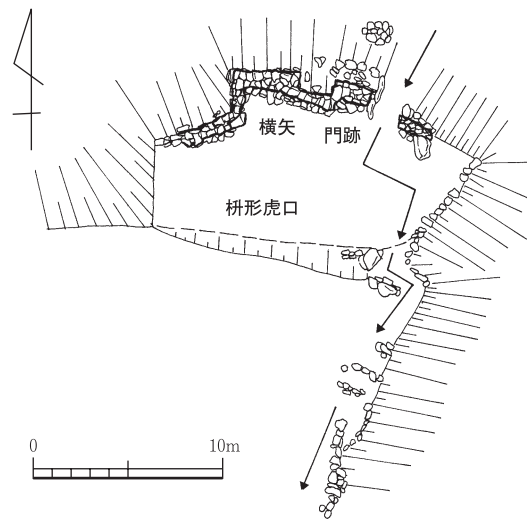


図 10-7 柏木城跡東曲輪群虎口 3

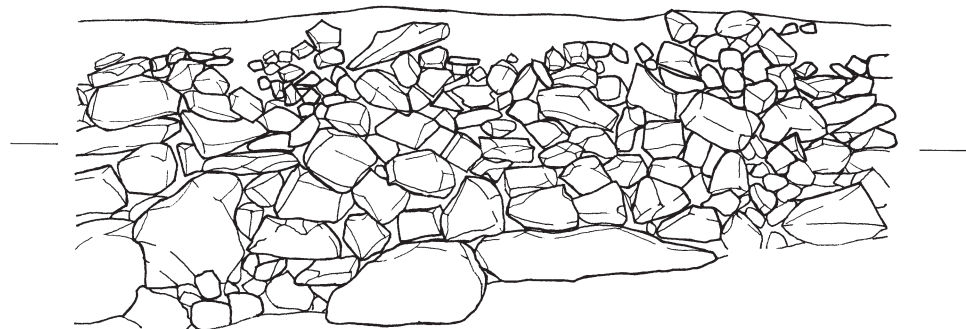


図 10-8 主郭曲輪 5 石積み (S=1/40)

台地北端には、長泉寺と墓地部分に狼煙を上げた古い段階の中島館があった。『新編会津風土記』には「村中ニアリ 地字ヲ中島ト云 今民家トナリ 堀土居ノ形ナシ 天正ノ頃葺名ノ臣中島美濃某ト云モノコレニ居ルト云」と書かれている。

(7) 柏木城の石積み

柏木城の大きな特徴は、石積みが積まれていることである。その石積みは、表面から見れば、若松城や猪苗代城と同じ石垣に見えるが、内部は大きく異なっている。柏木城では、裏側に小石を大量に入れ、水はけを良くして石垣の崩落を防ぐ「裏込め石」が入れられていないのが特徴である。東北では、福島県を中心に約50の城跡で例がある。

4. 柏木城の絵図

柏木城には、城を描いた絵図がいくつかある。「大塩邑柏木森白城之図」、「耶麻郡大塩邑柏木城」は江戸時代に描かれたもので、「大塩邑柏木城之図」は、大正 8 年に発行された『耶麻郡誌』に掲載された図である。

『耶麻郡小沼組之図』（村指定）は、江戸時代に小沼組の村々を描いたもので、「柏木古城」と書かれている。「大塩邑柏木森白城之図」、「耶麻郡大塩邑柏木城」は、『耶麻郡誌』に描かれた元図のようである。図は、明和元年（1764）から寛政 4 年（1792）までの江戸中期に描かれたものと推定される。

5. 柏木城の最後

この城は、天正17年（1589）の摺上原まで城の改修は続いたものとみられる。天正17年に、『伊達治家記録』によると、政宗家臣原田氏がこの城に入ったときは空であったとされている。城跡の石に火災の痕跡が見られることから、火を放って退却した可能性もある。その後、伊達家臣が入ったとも考えられるが、文禄 4 年（1595）の豊臣秀吉よる『富岡文書』にある 7 城以外の諸城は破却命令で完全に消滅した可能性がある。

参考文献

- 石田 明夫 1999「葺名氏・伊達氏の中世城館跡」『福島考古』第40号
- 石田 明夫 2000「東北地方の織豊以前の石垣について」『第17回全国城郭研究者セミナー』
- 石田 明夫 2001「東北部における戦国期の城郭について」『福島考古』第42号
- 石田 明夫 2005『小山田城跡』会津若松市教育委員会
- 石田 明夫・佐藤一男 2007『会津路 武士の世の裏磐梯』北塩原村

関連調査の報告 2

柏木城の文献による沿革

高橋 明

永禄年の緊張

永禄7年（1564）、伊達氏家督となったばかりの輝宗が蘆名氏と争った。蘆名氏の圧迫に苦しむ義兄の二階堂盛義を援けて岩瀬郡に出兵し、長沼城を奪い取ってしまい、蘆名氏がこれを奪還せんとするに抗したのである。

7月9日、輝宗が綱木に出馬して松原を攻めた。

伊達輝宗書状 ⁽¹⁾

此方へ一昨日馬をいたし候、かねて申付候ことく、をのへ^(談合)たんかういたし、きたかたへてたての儀、いかやうニもはしりめぐり申へく候、あひことハるまてなく候へとも、まつへさかいニ火のてをあけさせ申候へく候、そこもとの義かたくかせき^(釋ぎ)ニあるへく候、是よりハ明日はたらきをなすへく候、吉事重而、謹言、

七月十一日 輝宗（花押）

中津川九郎三郎殿

同太郎右衛門尉殿

同二郎右衛門尉殿

輝宗は家臣の長井庄中津川郷（山形県西置賜郡飯豊町の南半）の領主中津川氏に、赤崩山を越えての北方口攻撃を指示している。

輝宗の叔父にして信夫郡大森城主の伊達実元が「草」を出し、「在家四五ヵ所放火」させて引かせる⁽²⁾。その草調儀は土湯峠を越えて猪苗代口への潜入が考えられようか。これらは、蘆名氏の長沼への兵力集中を牽制したものである。

しかしながら、翌8年2月に蘆名盛氏・盛興父子は長沼に出馬して、盛興は5月迄とどまり⁽³⁾、盛氏は8月迄とどまってその戦闘を指揮する⁽⁴⁾。

8年3月にも、「長井」より「北方へ」の攻撃が行われたようである⁽⁵⁾。『北塩原村史資料編』345・511収載の「仙道会津元和八年老人覚書別本」が8年7月の戸山城攻撃と9年正月の松原村攻撃を詳述するが、7年7月と8年正月の合戦を記憶違いして記述した可能性が考えられる。

9年（1566）正月、盛義が降参して、嫡男盛隆を証人として差し出し⁽⁶⁾、輝宗は長沼城を返却して和睦した。そして、妹を養女として盛興に嫁がせる事を約束する⁽⁷⁾。この輝宗の妹との縁組は、盛氏が同盟関係にあった父晴宗に「懇望」して一旦成約したものであった⁽⁸⁾。それを、あらためて、輝宗

の娘分として縁約したのである。

天正元年（1573）冬以後、盛氏が輝宗にその「次男、会津江可指越之」き事を「頼」りに求め、「当時、言之約束計も可申候由、再三懇望」した⁽⁹⁾。同2年5月10日には盛興が、「御次男早速指越御申様」懇請する使者を発する⁽¹⁰⁾。およそ1ヶ月後の6月5日、盛興は病死する⁽¹¹⁾。盛氏・盛興父子は輝宗次男を盛興の養嗣子に迎えようとしたものであろう。それはならず、「会津御名代絶申候につき」、証人として黒川にあった盛隆が跡を継いだ⁽¹¹⁾。

輝宗は先に、「次男」すなわち「彼童子、致成人候者差越、盛氏奉公為致事も可有候」と「挨拶」した。輝宗はこの事を田村氏に知らせて、「以時分、可得意見候」と求めた⁽⁹⁾。輝宗は、伊達と友好関係にあり、蘆名と敵対関係にあった田村清顕の意向を危惧したものと思われる。盛隆が跡を継ぐも、輝宗との友好関係は両者の代を通して続く。

永禄7、8年の緊張の時期に、柏木森に築城がなされた可能性は乏しく思われる。蘆名氏が、松原守備を援ける将兵を派遣した形跡がうかがえない。幾分の築城の可能性を考えるならば、この時限りの臨時的仮設的な砦であったと思われる。

天正年の築城

「旧事雑考」が天正12年（1584）の柏木森築城をいうが、この年それを必要とする蘆名・伊達氏間の緊張はうかがえず、可能性は乏しい。「新編会津風土記」も同様に述べるが、同書は凡例に「会津ノ事ヲ記セル書、世ニ流布スル者モ多ケレトモ、皆齊東ノ野語ニテ、引用ウルニ堪ル者ナシ、独寛文ノ頃、家土向井吉重カ著ハセル旧事雑考・四家合考ノミ備用ノ一種ニ充ツ」と記して、「旧事雑考」に従ったものである。

この年10月20日頃、政宗18歳が伊達家当主となり、米沢城主となった。父輝宗41歳からの突然の移譲である。政宗は「御年少ヲ以テ頼ニ御辞退アリ、然レトモ親族・老臣等モ固ク勸メ奉ル、因テ其命ニ従ヒ給ヘリ」という⁽¹²⁾。

この月6日、蘆名盛隆が急死した。黒川城中において近習大場三左衛門に弑逆されたという⁽¹³⁾。

常陸太田城主佐竹義重が盛隆の遺児亀若丸当歳の嗣立を働きかけた⁽¹⁴⁾。輝宗が政宗の弟竺丸の入嗣を工作したことが考えられて⁽¹⁵⁾、義重はその阻止を策したものと考えられる。結局、亀若丸の嗣立となる。政宗家督はその5、6日後の決定であった。直後、政宗は体調を崩して⁽¹⁶⁾、12月半ばまで寝込む⁽¹⁷⁾。

「松原軍物語」が、11月26日松原の穴沢家当主俊光の従弟四郎兵衛が、伊達兵を引き入れて「小谷山ノ溪」に隠し置き、風呂の会を催して俊光等を謀殺したとするが、全くの虚構である。

翌13年（1585）3月半ば、政宗は岳父の田村清顕と蘆名・岩城両氏の和睦仲介を策して、それに佐竹氏を誘う。佐竹氏が賛意を示し、それを伝える家臣の書状4通のいずれも佐竹・伊達氏間の格別なる「昵懇」をいう⁽¹⁸⁾。

4月18日、政宗が辺見上総守に次のような朱印状を発した。

伊達政宗朱印状 ⁽¹⁹⁾

右意趣者、其口、当方如存分之取成候ニ付而者、一、さいかちたいせん寺分一村

政宗御朱印

無相違可下置者也、右如件、

天正十三年[㊦]卯月十八日　政宗御朱印

　　辺見上総守とのへ

山三郷の国人

「さいかち」が西枝海であれば、「辺見上総守」は山三郷の国人（村落領主）である。「其口」は山三郷また北方に相違なく、その国人等を「当方如存分」く、すなわち政宗の望むように「取成」すなわち調略したならば、これらの所領を宛行うとするものである。政宗が山三郷・北方等を制圧することがなければ、宛行いはならない。辺見上総守は政宗に内通した。この後の展開をみれば、政宗が、ひそかに北方の柴野弾正、松原の穴沢四郎兵衛等の調略を進めていることは疑いない⁽²⁰⁾。

5月2日、伊達家重臣原田左馬介宗時が申倉越（大峠）を越えて北方に潜入し、柴野弾正の館に入った。その館は「屋敷構」にして兵を潜め得ず、やむなく合戦を始めて敗退し、弾正等を引き連れて撤退する仕儀となった。ほんとうは、翌3日挙兵の手筈だったのである。

3日、政宗が松原に出馬して、「即時に」「手に入」れた⁽²¹⁾。穴沢支族「越中」（四郎兵衛）「父子」が伊達方となって、さしたる抵抗もなかったものと思われる。穴沢当主「新右衛門」（俊光）は「切腹」して果てた⁽²²⁾。

政宗は「今度は先会津へ初の手切なれば、密のため米沢の軍兵迄にて出給ふに、左馬介敗軍なりと聞き、5月5日に惣軍を松原へ参れと触給ひ、諸勢参るを待給へば、其間に会津の人数は大塩へ楯籠り、城は堅固に相抱へけ」という⁽²¹⁾。

伊達勢の北方侵攻は、蘆名方の予期するところではなかった。5月2日ないし3日、蘆名勢は急遽柏木森上に野陣を張り、政宗の動静をうかがいながら普請と作事を進めたものと考える。そうであれば、柏木築城は天正13年5月となる。

三瓶大蔵

番将

「旧事雑考」は三瓶大蔵が「此辺衆士」を率いて「襲於伊達氏松原」うの「変」を「守」とし⁽²³⁾、「新編会津風土記」は「三瓶大蔵ヲ城番トシテ、此辺ノ武士百五十騎ヲソへ」たとする。蘆名家家臣たる大蔵の存在は「伊達天正日記」天正17年6月9日条に、政宗による「三平大蔵之ちうげん^(中 10)」斬首のことがみえて⁽²⁴⁾、確認される。

城番を、初め三瓶大蔵、後種橋大蔵大輔とする説があり⁽²⁵⁾、初め種橋大蔵大輔、後三瓶大蔵に替わるとする説もある⁽²⁶⁾。種橋大蔵大輔は大場三左衛門を討ち留めたとされる人物である⁽²⁷⁾。

「仙道会津元和八年老人覚書別本」が、「新右衛門子助十郎、同新右衛門弟に善右衛門」、「其外親類共」・「譜代の被官」が「松原口をふせき申様ニと」の「年寄衆」の命を受け「大塩に居」て、「後藤城際」あるいは松原・綱木の間に「草を入、夜かけ」をするなどしたと述べる⁽²²⁾。

「仙道会津元和八年老人覚書別本」の本稿部分は蒲生忠郷の命に応じて松原の住人が書き上げたものである。執筆者を『北塩原村史資料編』掲出本⁽²⁸⁾は「年五十七 佐藤九郎右衛門」とし、別の写本⁽²⁹⁾は「年五十七 穴沢善右衛門　年六十 遠嶋彦左衛門　年五十七 佐藤九郎右衛門」の3名とする。20歳程の時の体験と見聞を思い起こしつつ書いたのである。記述に前後関係の混乱がうかがえるが、相応の信憑性もまた認められよう。

「政宗記」の松原戦の記述もまた、政宗の1歳年下の従弟成実が、18歳の時の体験・見聞等を60歳台の後半になって書いたものである。記憶違い、そして政宗と自分の名誉を守るための及び執筆時点

大塩の山

のあれこれの思惑による曲筆を警戒しつつも、相当の信憑性は認められて自然と思われる。

政宗は松原侵撃5日後の5月「八日に、大塩の上の山まで働きけれども、山中にて道一筋なれば、備^(そなえ)を立べき地形な」く⁽²¹⁾、「先手衆九人」を失って、引き上げた。「大塩の上の山」は「かや峠」である⁽²²⁾。

その後「猪苗代与之間ニ、大塩之わきへ打出候道」すなわち取上越を攻め下る可能性を探ったが⁽³⁰⁾、ならず、猪苗代氏を誘降して攻め下るを図ったが失敗し、築いた小谷山城に後藤信康を城代として、米沢に引き揚げた。

大塩の山

将兵離城・廃城

天正17年（1598）6月5日、伊達政宗は摺上に蘆名義広（佐竹義重の次男）を撃ち破った。

「四家合考」は、河原田盛次が柏木城から摺上に駆け付けて、「味方ノ軍仕損タル為体ヲ見テ、己カ手勢ヲハ、先一方へ引側メ、敵御方ノ機ヲ伺テ、猶予居」て、片倉景綱と戦ったとする⁽³¹⁾。蘆名家家臣にあらずして旗下たる伊南郷の久川城主盛次の柏木城在番そのものが信じがたいが、「四時分」⁽³²⁾

すなわち午前10時頃に始まった摺上合戦を知って駆け付けて、未だ両軍が摺上にとどまり居るという戦況ではない。雌雄はたちまち決したのである⁽³³⁾。

翌6日、政宗は金川・三橋を攻め、塩川・慶徳・源太屋敷を攻めるが、この日の「あけかた」に柏木城在番の将兵は城を離れた⁽³⁴⁾。松原から攻め下る後藤信康・原田宗時・新田定綱等を邀撃せんとすれば⁽³⁵⁾、挟撃の危険にさらされる。離城は当然である。

この後、政宗が会津を領有支配するに、柏木城を用いることはない。政宗は小田原参候にあたり、黒川城のほか南山・横田・築取・野沢等11の城に一家・一族・重臣を配置して警護させるが、柏木城は含まれない⁽³⁶⁾。政宗に替わって領主となった蒲生氏郷の支城となることもない⁽³⁷⁾。

大塩の山

註

- 中津川文書『北塩原村史資料編』三44。
- 『大日本古文書家わけ第三伊達家文書之一』一七五。
- 秋田藩家蔵文書貳拾八『福島県史 7』二10三一。
- 「会津塔寺八幡宮長帳」裏書永禄八年条。
- 秋田藩家蔵文書貳拾八『福島県史 7』二10三三。
- (11) ・「蘆名家御由緒」。
- 伊達文書『福島県史 7』二99一〇一・一〇二。
- 「会津塔寺八幡宮長帳」裏書永禄元年条。
- 青山文書『福島県史 7』二69五〇。
- 遠藤家文書『伊達氏重臣遠藤家文書・中島家文書～戦国編～』30。
- 「会津塔寺八幡宮長帳」裏書永禄九年条。
- 「貞山公治家記録」。
- 「仙道会津元和八年老人覚書」岩城須賀川今泉之城様子御尋に付申上候事。
- 伊達政宗記録事蹟考記『会津若松市史 8』244頁。
- 天正12年10月13日、蘆名家家臣にして長沼城主の新国貞通が伊達家重臣高野親兼に、輝宗の蘆名家家政への関与について礼を述べる（高野文書『会津若松市史 8』243頁）。天正13年2月7日、蘆名家宿老平田左京亮氏範が伊達政宗に宛て、「若偽を被申懸、退散被申候」と述べるは蘆名家家督問題であることが考えられる。この時、氏範は長江庄の田島城主長沼盛秀の元に身を寄せていて、「末々進退之儀」は伊達家宰臣「片倉小拾郎方頼入」ったと述べる（遠藤家文書『伊達氏重臣遠藤家文書・中島家文書～戦国編～』2）。

伊達政宗の肖像

天正17年正月、「とびたかた」が^(舊 田 方) 松原城の後藤信康と米沢城に在る伊達政宗に年始の酒肴等を届けた（針生寅次郎氏所蔵片倉家文書『北塩原村史資料編』三128）。同年6月7日から10日の間、三橋在馬の政宗の元に「会津の家老富田美作（氏実）・平田不休（氏範）・同名周防（舜範）」が本領を安堵し、「備付の与力の身代被相立被下」んことを求め、政宗の黒川城攻撃に合わせて、城中に「火の手を上て」呼応する事を申し出た（『政宗記』巻六）。これら3名は「内々伊達政宗の舎弟を代統にせんと僉議したる」身とする説がなされる（『四家合考』巻之三）。

- (16) 遠藤家文書『伊達氏重臣遠藤家文書・中島家文書～戦国編～』34。
- (17) 三浦守氏所蔵文書『仙台市史資料編10伊達政宗文書1』6・受心書状取意文「貞山公治家記録」天正12年12月17日条。
- (18) 伊達家文書『会津若松市史8』246頁・遠藤家文書『伊達氏重臣遠藤家文書・中島家文書～戦国編～』33。
- (19) 引証記一『仙台市史資料編10伊達政宗文書1』12。
- (20) 木幡家文書『北塩原村史資料編』三144。
- (21) 政宗記『北塩原村史資料編』三64。
- (22) 仙道会津元和八年老人覚書別本『北塩原村史資料編』三66。
- (23) 『北塩原村史資料編』三60。
- (24) 『北塩原村史資料編』三139。
- (25) 「蘆名家御旧臣見聞録二」。
- (26) 会津古塁記『北塩原村史資料編』三62・「会津鑑」・「会津四家合全」。
- (27) 「旧事雑考」。
- (28) 東京大学史料編纂所添付表紙題「山口道齋物語」。
- (29) 「仙道七郡古軍談」。
- (30) 登米懐古館所蔵登米伊達政宗文書『北塩原村史資料編』三84。
- (31) 『北塩原村史資料編』三134。
- (32) 「伊達天正日記」。
- (33) 「政宗記」巻六。
- (34) 伊達天正日記『北塩原村史資料編』三135。
- (35) 原田・新田勢の松原着陣は「天正日記」天正17年6月1日条（『北塩原村史資料編』三131）。
- (36) 「伊達家旧記」所収「諸境警固賦之日記」。
- (37) 「氏郷記」。

三瓶大蔵の肖像

関連調査の報告 3

三瓶（三平）氏について

高橋 充

三瓶大蔵の肖像（三瓶大蔵の肖像は、寛政10年（1798）の『寛政重修諸家譜』に写されたもの）

柏木城の城番とされる三瓶大蔵および三瓶（三平）氏に関して、これまでに気づいた史料を集めてみた（後掲4．三瓶（三平）氏に関する史料　参照）。できるだけ確実な史料を重要視しながら、考えてみたことは、以下の通りである。

三瓶大蔵の肖像（寛政10年（1798）の『寛政重修諸家譜』に写されたもの）

1．同時代史料からみた三瓶（三平）氏

- 16世紀の史料として5点を確認（史料①～⑤）。
 - 史料①　享禄元（1528）年　　「三平五郎左衛門」
 - 史料②　天文13（1544）年　　「三平五郎左衛門尉」
 - 史料③　天文14（1545）年　　「三平因幡守氏次・同隼人佐」
 - 永禄3（1560）年　　「三平讃岐守」
 - 史料④　天正13（1585）年　　「三瓶上野守・同虎丸」
 - 史料⑤　天正17（1589）年　　「三平大蔵」

○史料⑤より「三平大蔵」が実在したことが確認できる。「ちうけん」（中間　下級の従者）を抱える程の力量のある武士であり、摺上合戦直後に従者が伊達方に斬殺されていることから、蘆名方の軍勢の中でも名の知られた武士のひとりであった。合戦後の大蔵本人の動向は不明。

○「三平」と「三瓶」が同一の氏族名とすれば、読みは「さんぺい」か。

○史料③より、会津だけでなく中通り（安達郡）にも同名の一族がいたことになる。太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店）によると、田村氏・須田氏（須賀川）の家臣にも三瓶を名乗る者がいたという。

○三瓶（三平）という地名は、福島県域では未確認（『福島県の地名』平凡社）。三瓶氏の出身地（名字の地）については不明。

2．蘆名氏との関係

○史料①②より、「三平五郎左衛門（尉）」は、蘆名氏の直轄領とみられる門田庄内に知行地を与えられる（可能性のある）立場にあった。理由はわからないが、蘆名氏からは所領の面で厚遇をうけており、家臣の中でも臣従の度合が高かったと思われる。

○史料④は、「三瓶上野守」父子が高巖寺へ土地を売却した史料であるが、対象になっている敷地は、高巖寺の敷地の周延部（大門近辺等）と考えられることから、高巖寺の寺勢を拡大させるような意味の売買であったと考えられる。この寺は、蘆名氏先祖の菩提寺のひとつで、その再興に三瓶父子が積極的に関わっていたことになる。ちょうど盛隆が殺害され、幼い亀若丸が家督を相続した蘆名氏権力の不安定な時期であり、この頃に三瓶父子は蘆名氏権力を強力に支える立場にあった。

○三瓶大蔵が柏木城の城番であったとする証拠は、同時代史料にはない。編纂物の記述（史料⑥～⑬）では、三瓶大蔵は城番として派遣・配置され、近隣の多くの武士（「衆士」）を指揮する役割を担っ

三瓶（三平）氏

たとされている。前記の通り、三瓶一族の中には蘆名氏から知行を与えられる者や、蘆名氏の菩提寺に寺地を売却する者があり、総じて三瓶一族の蘆名氏に対する臣従度は高かったといえる。大蔵も同様であったとすれば、伊達氏と対峙する最前線の城郭に常駐する重大な軍役を務めたということも十分に首肯できる。

3. 今後の課題

○三瓶氏と種橋氏との系譜関係（史料⑬⑭など）

○藩政期の三瓶氏（参考史料⑯⑰など）

出羽山形出身で保科正之に仕え、会津入り 足軽クラスの下級武士
十六世紀の三瓶（三平）氏との系譜的なつながりは不明

三瓶（三平）氏

4. 三瓶（三平）氏に関する史料

(1)同時代史料（文書・日記・棟札など 写しを含む）

①享禄元（1528）年「蘆名盛舜諸公事免許判物」
〔大石直正「史料紹介『境澤文書』』『東北学院大学東北文化研究所紀要』7 1976年〕
（花押 蘆名盛舜）

奥州会津蛭川庄内大村并

門田庄之内境沢之村、両所共ニ諸

御公事令免許所也、但門田

事者、御世躰ニ付候所ニ候之間、三平五郎左衛門ニ

出候はん時者、不可有問答候、於子々孫々

不可有違儀状、如件

享禄元年〔戊子〕十二月廿八日

境沢左馬助殿

②天文13（1544）年「蘆名盛氏諸公事免許判物」

〔大石直正「史料紹介『境澤文書』』『東北学院大学東北文化研究所紀要』7 1976年〕
（花押 蘆名盛氏）

奥州会津蛭川庄内大村并

門田之庄之内境沢之村、両所共ニ

諸御公事令免許所也、三年

一度之棟役、春秋之段銭之事、

無違背可被相澄候、門田之事者、

御世躰ニ付候所ニ候間、三平五郎左衛門尉ニ

出候はん時者、不可有問答候、於子々

孫々不可有相違之状、如件

天文拾三年〔甲辰〕十二月廿七日

境沢左馬助殿

○境沢氏は蘆名氏の家臣。「蘆名氏に対する臣従関係はきわめて強く、蘆名氏の直臣ともいうべき関係にあった」（大石）。境沢氏の所領である大村（会津坂下町勝大）と境沢村（会津若松市界沢）に

三瓶（三平）氏

かかる「諸御公事」を、蘆名盛舜・盛氏父子が免除する内容。「但門田之事者」以下の部分の解釈は難解だが、「ただし、門田庄内（この場合は境沢村）は、蘆名氏の直轄領なので、もし（境沢氏から）三平五郎左衛門へ知行を替えるようなことがあっても訴訟を起こしてはならない」という意味か。そうであれば、三平五郎左衛門は、蘆名氏によって門田庄内に知行を与えられる可能性のある武士であったことになる。

三瓶（三平）氏

③永禄3（1560）年「金連明神棟札銘写」
〔『相生集』巻十一所収 『岩磐史料叢書』（中）歴史図書社 一九七一年〕

白岩

金連明神〔本文に蓮に作るは誤也〕

祭神金山彦命也、天文十四年壬寅林鐘二十九日木幡山学頭法亮辨、願主三平因幡守氏次・同隼人佐、裏に永禄三年卯月十日大旦那大内備前守、願主三平讃岐守再興と棟札にありし、三平氏は何人なるをしらず、いつれ大内の属下とみえたり（以下略）

○安達郡白岩村（本宮市 旧白沢村白岩）にある金連明神の棟札の銘文に三瓶を名乗る複数の人物が見える。表面は天文十四年（干支が壬寅なのは天文十一年）「三平因幡守氏次・同隼人佐」、裏面は永禄三年「三平讃岐守」、いずれも社殿の再建の際の願主とみられる。大旦那が大内備前守（定綱）であることからすれば、この三瓶氏は大内氏に仕えた武士か。この史料については太田亮『姓氏家系大辞典』（角川書店）。

三瓶（三平）氏

④天正13（1585）年「三瓶上野守他屋敷売券写」
〔『新編会津風土記』巻十七所収 高巖寺文書〕

（朱印 印文「止々齋」）

右、永代売渡申候屋敷事、彼在所者、高巖寺大門大町面石塚屋敷、南ハ石橋迄也、従路東三間口、地子参百文、自路西仁間口、地子四百文、是に賀藤屋敷之内老間口差添、地子百廿五文也、大門之西東ヲ合、以上六間口、地子八百廿五文之所、永代諸役夫公事御免、守護不入ニ代物五貫参百文ニ永代売渡申候事実也、於子々孫々、全此下地不可有相違者也、仍為後日之状、如件

天正十三年〔乙酉〕三月七日 売主

三瓶上野守

同 虎丸

高巖寺学天和尚 参

○黒川の高巖寺（浄土宗 会津若松市中央）は、蘆名盛舜（盛氏の父）が、亡父の盛高の木像を納め、大永2（1522）年に寺の屋敷地と門前の田を寄進している。蘆名氏先祖を供養する寺（菩提寺）のひとつ。この史料では、寺の大門両側や周辺土地が高巖寺に売却されているが、当該地は寺院の敷地と連続すると考えられるので、実態としては寺地の拡大のような意味があったと推測される。三瓶父子が寺地を提供し、蘆名氏権力（当主は亀若丸）が朱印を捺して保証している。蘆名家の家印（中興の祖である盛氏の齋号「止々齋」の印文）を使用。

三瓶（三平）氏

⑤「伊達天正日記」九 天正17（1589）年6月9日条
〔『伊達史料集（下）』人物往来社 1967年〕

とり 九日

天気よし、北方之さふらい衆各々御参候、とうのへつとう御参候、御やくら罷出候、打月より御うちとり被申候よし、御使上御申候、夜入、三平大蔵之ちうけんきらせられ候

○同じ史料の6月6日条に「大塩あけかたに引申候」とあり、摺上原での決戦（6月5日）の翌朝に大塩の城（柏木城）は開城している。8日から10日にかけては、北方の侍たちが政宗のもとに、あいついで投降している。三瓶大蔵本人の動向は不明。「ちうけん」（中間）は、公家・武家・寺社等に召し使われる従者のこと。中世の武家の場合、家子・郎等（郎従・殿原）より下位の従者。三瓶大蔵が、家子・郎等や中間など多くの従者を擁する有力な武士であったことがわかる。政宗など伊達方の面々の前で斬殺されているのは、あるいは見せしめのような意味もあったか。

(2)編纂物（江戸時代成立の史書・地誌・記録など）※いわゆる軍記物については未調査

⑥『会津旧事雑考』巻七 天正12年条[『北塩原村史資料編』三60]

是歳、築於耶麻郡大塩邑柏木森城、属此辺ノ衆士三瓶大蔵、而令守襲於伊達氏檜原ヲ変、此城東西百二十五間、南麓馬場在焉、長九十間、横四間、其以南濠也、東西百三十余間、広二十五間

※写本の中には、「此城東西百二十五間」の後に「南北三十五間」とするものもある。

⑦『異本塔寺長帳』天正12年条[『北塩原村史資料編』三59]

十二年〔甲申〕会津大塩邑柏木山築城、三瓶大蔵ヲ置〔是檜原口ノ要害也〕、此城〔東西百二十五間、南麓馬場長九十間、南北百三十間、馬場広二十五間〕名柏木城

⑧『富田家年譜』天正12年条[『北塩原村史資料編』三61]

今年、耶摩郡柏木森城築キ、辺衆ノ兵士招属三瓶大内蔵、伊達松原令襲之変事守

⑨『会津古墨記』[『北塩原村史資料編』三62]

一、大塩村柏木城〔東西七十八間、種橋大蔵大輔住、後三瓶大蔵重実居、南北百間〕

⑩『会津要害録』[『北塩原村史資料編』三63]

柏木ノ森ノ墨

大塩村ヨリ十余町此方海道ノ上ニ有リ、此城天正ノ頃三瓶大蔵ヲ入レ置テ、此辺ノ武士百五十騎ヲ属スト云、今モ亦如形ノ要地也

⑪『会津鑑』巻三十五「大塩邑」

城号柏木森、東西七十八間・南北百間、種橋大蔵太輔住、後三瓶大蔵重実住、或曰東西百二十五間・南北三十一間未詳、

天正十二〔甲申〕年築邑柏木森城〔村ヨリ余丁、北方街道在上〕、属此辺衆士百五十騎於三瓶大蔵而令守於伊達氏檜原変、此城東西百二十五間、南麓ニ馬場在焉、長九十間、其以南濠也、東西百三十余間、広二十五間、今以如形要地也

⑫『新編会津風土記』巻五十六 耶麻郡小沼組大塩村「古蹟」の項

柏木城跡 村南五町山上ニアリ、東西百二十五間・南北三十五間、南ノ麓ニ長九十間・幅四間ノ馬場

跡アリ、其南ニ東西百三十間余・南北二十五間ノ空壕アリ、本丸・二三ノ丸ノ形、堀切ノ跡残レリ、天正十二年葦名義広コレヲ築キ、三瓶大蔵ヲ城番トシテ此辺ノ武士百五十騎ヲソヘ米沢ノ押ヘトシ、檜原村ノ繫トセシ所ナリ、今ハ皆田圃トナル

⑬『蘆名家御旧臣見分録』（写本 会津図書館蔵）

（タの項）

「大塩村柏木城ニ住ス	種橋大蔵」
「代田村ノ館 三瓶民部重朝ノ子息也	種橋大和守重則」

（サの項）

「代田村ノ館ニ住ス	三瓶民部重朝」
「檜原二番手ノ備役 大塩ニ住ス	三瓶大内蔵」
「山東大槻神明館ニ住ス	三瓶隼太」
「侍組	三瓶大助」
「御近習 父ハ大蔵	三瓶平七良」
「太守御側付	三瓶安左衛門」

（ミの項）

「大塩柏木ノ館ヲ守 添臣百五十騎五千石 三坪大内蔵	
元ハ山三郷小沼ヲ領ス、又大垣ニモ住ス」	

⑭『蘆名家旧臣記』（写本 会津図書館蔵）

中目式部大輔組士のひとり「大塩ノ地首 父山城 三坪大内蔵」	
栗村弾正組士のひとり「父山城 三瓶大助」	
大番頭8人のうち「父藤十郎 姓ハ三坪 大塩柏木ノ城代	
種橋大蔵組士 後三坪ト改ム」	
平小姓組32人のうち「父ハ大蔵 三瓶平七郎」	
太守公前後左右旗本外様300余人のうち「三瓶安左衛門」	

⑮『芦名家故臣録』（写本 会津図書館蔵）

「大塩柏木ノ館ヲ守ル、添臣百五十騎 五千石 三坪大内蔵」	
------------------------------	--

(3)参考 会津藩政期の三瓶氏

⑯『会津藩諸士系譜』

・三瓶勝五郎勝虎 独礼御目見以上

・三瓶家

寛永十三（一六三六）年召出 羽州最上・三十俵二人扶持	
三瓶九郎右衛門一九右衛門某一九右衛門某一加津右衛門勝明	
一治兵衛勝宗一勝右衛門勝重一勝五郎勝虎	

会津藩家世実紀

⑰『会津藩家世実紀』

- 承応3（1654）年5月8日条　刊本一卷489頁

足軽三瓶忠左衛門：最上出身　鉄砲の名手　物頭樋口七郎右衛門預
- 延宝3（1675）年8月23日条　刊本3巻209頁

猪苗代士三瓶九右衛門
- 享和元（1801）年8月19日条　刊本15巻153頁

三日町組付三瓶幸助　長屋

会津藩家世実紀

〈付記〉

- 史料中の傍線は筆者が付した。
- 〔 〕は割書部分
- 以下は筆者による説明文

会津藩家世実紀

あとがき

柏木城はいかなる城であったか

鈴木 啓

会津藩家世実紀

永禄6年室町幕府の記録には全国群雄のうち、大名の53人が記されているが、南奥では伊達・蘆名のみで他は大名扱いではない。

米沢城主晴宗（奥州探題・守護）の孫、政宗の代になると、父祖の代を遙かに超えて絶頂期に達し、南奥は群雄割拠から統一に進む。

政宗は天正13年10月畠山氏、14年田村氏、16年佐竹氏・二階堂氏、17年相馬氏とことを構え、同6月伊達・蘆名の決戦となる。

蘆名の黒川城は平城で濠なく、防御性を欠いたから米沢～若松間の谷底道上に強固な柏木城を普請して決戦を予想した。行政機能を要さない番城は、防御と居住性中心の縄張りが欠かせず、守城優先の構造となる。軍学では防御と出撃に適した陰陽和合の縄張りを理想としたから、切岸・帯曲輪を通る道は攻城には複雑・急で屈曲鋭く連続桁形など不明確で、横矢掛や武者隠しが多く危険な通路となる。

城の縄張りや防御施設はどのように設計されるかは、軍学書にある。その代表的な例が『守城記』なので、城の構成を理解する一助として、その一部を抜き書きしてみよう。

会津藩家世実紀

籠城の蓄積物には、米・麦・豆・粟・稗・糯・飼草・塩・海草・芋・莖・干葉・干魚・鰹節・漆・渋・鉄・鉛・火薬・弓矢・鎗・鉄砲・火縄・紙・縄・釘・竹木・板・藁・菝・薪・油・蠟燭・綿・布・炭・薬種などがある。多くの倉庫が必要である。

守城兵と持口配り（配置）は10分の3は旗本・近習（主郭守兵）、10分の4は外郭線守兵、10分の3は遊軍（転戦守兵）に分割する。外郭線の虎口はその大小広狭に応じて兵を配分し、虎口間（平という）にも割付け、何間持場と定める。

城中堅固の平は老兵に守らせ、城兵少ない場合は壮士に守り難い箇所を配る。家中諸士の他、武具・細工工人・鍛冶・番匠・壁塗等の類は城中に籠るべし、其外無益の女童等は籠置くべからず。職人も籠城している。

根城（本城）に籠る時、兵多城狭くして惣構の内の市店を守勢の宿所に配与へ、或は家なき所には小屋を掛て宿せしむる也。諸方の砦より本城へ集り来る勢又他国の浪人或は近国より加勢等兼て宿所なき輩なり。

茶道料理人坊主台所の小役人等は、本丸台所に置べし。弓鉄砲の足軽は頭々の屋敷に置べし。（台所は本丸に置かれる）

本城の櫓に昼夜とも遠見を置き、鐘太鼓を置、時刻を知らせ敵の押寄る時、又火災有時相図を定置て諸手へ知らしむべし。遊軍の内、廻番の者、惣構の内小路々々残らず巡行する也。

矢倉々々其外役所は夜は燈を点じ俄に変有時、周章せざる様になし、又常に怪き者忍来杯見顕すべし。門々は昼夜とも扉を閉置、又出入する時は相言を以て改め、疑無時は潜戸より通すべし。夜は篝を焼き、或いは大挑灯を燈して出入を改むべし。

旗本出勢の時本丸にて合具（法螺）にて三段の相図を成し、諸士兼て定置立場へ集る也。

あとがき 柏木城はいかなる城であったか

諸手物主（指揮者）の出勢人数を集る相図は、拍子木・銅鑼の類で本丸相図と紛れざる物を用ゆべし。寄手よりは必ず城兵を引出して、取て返して付入にせんとし、或いは城兵を遠く引出して他の攻口より其虚に乗じて急に乗取り等の謀をなす故に、城際に攻来る敵を追立るとも、追討一町に過ぐるべからず。

敵俄攻（短期攻）にする時は、先味方の鉄砲を頻に放て猶退かざる時には、遊軍を増加して益急に放つべし。向より打んよりは横に打に利あり、横に打んよりは敵の蟻附したる後勢を打崩しに其利あり。敵猶進んで屏を乗越んとする時は、走矢倉に上て槍長刀にて突落し、切落すべし。

守城記の挿絵

以上、『守城記』の一端である[（ ）内は筆者]。

守城戦術があって縄張り・構造がきまることを、肝に銘ずる必要がある。

柏木城の中心部は広く平坦で戦闘指揮所らしく、大勢の兵士が複雑な命令に即刻機敏に反応できるように幅広い帯曲輪が用意されている。

石積みは土塁の補強と銃弾除けの施設で、長い石塁は、攻城軍を横隊から縦隊侵入に変えさせての側斜（横矢）のためと考えられ、平城・中村城の捨堀と用途は同じであろう。

虎口1の大平石は積石の中に配されているのではなく、単独の立石なので鏡石とは異なり信仰上の施設ではないだろうか。磐瀬郡長沼城の本丸下の帯曲輪に、巨石が立てられ、摩利支天石（武士の守り本尊・化生石）と記録にみえる。仏教では摩利支天は陽炎の神格化されたものであり、兵火の難を救う軍神とある。

柏木城の、恐らく東北地方に唯一遺存するのではないかとされる馬出は、絵図上では各所の城郭にみられるが、仙台城・二本松城などでは塁濠線に沿って構築されていることがわかる。これは攻城軍に巻き詰められて孤立した時、矢弾で応戦しながら怯んだ隙に突撃して形勢の逆転を計る起死回生の施設である。柏木城では主郭東の大型の堀切の外にあり、両者の連絡には木橋（引橋か桔橋）があったろう。馬出の東には曲輪4があり、その用途は不明なので、時間差の普請も考えなければならない。馬出をはじめ本城中心部は何があっても守り切る気概の伝わる縄張りと言えよう。

まとまりのない守城兵は単純連郭でもよいが、大軍が一体行動の場合は囲郭式配置、居住部の肥大化となろう。

東京都八王子市の滝山城は50区画（郭）程あり戦闘性と居住性を備えた後北条氏の動員体制を示すものとして史跡に指定されている。同じく八王子城とともに、在りし日の柏木城を考える上で参考となる。

柏木城跡

柏木城の要点は以下のようにまとめられよう。

- 柏木城は、黒川城に代わる防衛拠点として蘆名氏の築城術を傾けた構造を呈しており、戦国末期を代表する山城である。
- 伊達氏との東北における戦国の覇者を決する戦い、秀吉による小田原征伐前段の決戦を予想しつつ、蘆名全軍投入をも計ったとみられる城である。
- 時代的にも地域的にも、当城に匹敵する遺跡は東北では稀であろう。

報告書抄録

ふりがな	ふくしまけんやまぐんきたしおぼらむら　かしわぎじょうあと
書名	福島県耶麻郡北塩原村　柏木城跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	北塩原村文化財調査報告書
シリーズ番号	第3集
編著者名	布尾和史、布尾幸恵、木村郁夫、五十嵐怜、長島雄一、石田明夫、高橋 明、高橋 充、鈴木 啓
編集機関	北塩原村教育委員会
所在地	〒 966-0404　福島県耶麻郡北塩原村大字北山字村ノ内4147 <p>〒966-0402　福島県耶麻郡北塩原村大字大塩字下六郎屋敷2134（平成26年4月～）</p>
発行機関	北塩原村教育委員会
発行年月日	2014年3月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯（新）	東経（新）	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かしわぎじょうあと 柏木城跡	ふくしまけんやまぐん 福島県耶麻郡 きたしおぼらむら 北塩原村 おおあざかしわぎじょうほか 大字柏木城外	4021	0021	37°39′46″	139°58′50″		表面調査	北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会による学術調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
柏木城跡	城館跡	中世	曲輪、堀切、馬出、帯曲輪、榊形虎口、土塁、石積み、石塁		戦国末天正後半期の山城。虎口や土塁、区画施設に石積みが多用され、高石垣が普及する以前の城郭の特徴をよく残す。会津蘆名氏が築いた境目の城として伊達氏に対する防衛拠点となった。

要約	<p>柏木城跡は、天正期後半の山城である。主郭を含めた中心部の規模は東西に約300m、南北に約200mで、周囲の山麓には更に遺構が広がっている。曲輪や土塁、馬出し、堀切など、遺構が良好な状態で残り、虎口や土塁、区画施設に石積みを使用しているのが特徴である。織豊系城郭が会津で展開する前段階の、天正期における石積みが多用された城郭である。築城主は会津を本拠地とする戦国大名蘆名氏と考えられ、文献には天正12年築城と記載される。築城後は国境の護りの要となり、天正13年、伊達政宗ひきいる軍は松原出兵後大塩へ向かうが柏木城を眼下にして松原に引き返したという（「政宗記」）。</p> 天正17年、摺上の戦いで蘆名義広が伊達政宗に敗れた後、廃城となったとされる。城内の虎口や土塁などで使用される石積みは、同じく天正期後半に関東甲信越地方にみられる石積みを多用した戦国期城郭に類似しており、会津地方における代表例と言え、枳形虎口や大平石の採用も同じ頃のものとして時代性をよく表す。 北や西側には斜面を下った場所に連続する平場群があって城域は更に周囲に広がるとみられており、その規模も大きなものとなる。技術的には当時の最新技術が諸処に反映されており、会津の戦国大名蘆名氏の築城技術の粋が凝らされたものといえ、本城黒川城跡や向羽黒山城跡とともに重要城郭と言える。
----	---

北塩原村文化財調査報告書 第3集

かしわ ぎ じょう あと
柏 木 城 跡

《北塩原村城館等保存・整備・活用検討委員会の記録》

2014年3月31日

発 行 北塩原村教育委員会
〒966-0404
福島県耶麻郡北塩原村大字北山字村ノ内4147
印 刷 三洋印刷株式会社
〒965-0053
福島県会津若松市町北町上荒久田字鈴木163